

## 第一章あらすじ

地球歴2713年、スペースアカデミー基礎過程、いわゆるアカデミー附属校の2年に進級した俺、こと中井ケンジは、一年ぶりに、星野美月と再会する。地球、太陽間の引力がバランスする第2ラグランジュ点(L2)にある巨大な宇宙都市、L2ステーションのスペースアカデミー。始業式を終え、新しい実習チームのメンバーは、かねての打ち合わせ通り美月を含めた親しいメンバーが集まることになった。俺、美月をパイロットとして、ナビゲータは沢村ケイ、エンジニアリングがジョージ・エイブラムス、メデイカルにマリナ・クレア、そして、通信と情報収集を担当するC&Iは、美月と一緒に8時間差のタイムゾーン、ゾーン2から転入してきた謎の女子、サマンサ・エドワーズ。そして、この、いわばくせ者揃いのチームを率いるリーダーは俺なのである。

とりあえず、街に出た六人、親睦会を兼ねた食事で意気投合して、街のゲームセンターで宇宙艇の操船シミュレーションに挑戦することになるのだが……

これは俺たちの新しい冒険の第一章である。

## 第一章序文

2000年前、人類は自らの進化の道筋を自身の手で決める決断を行った。以来、様々な機能を人体に組み込むための遺伝子コンポーネントが開発され、それによって人類が大きな飛躍を遂げたことは、先に述べたとおりだ。だが同時に、それは自らの将来に対して完全に責任を負うということでもある。それ以前の人類は、自らが持つ様々な不都合の責任を、偶然や、神、悪魔といった自然、超自然的なものたちに押しつけてきた。しかし、こうした要素を自らの進化過程から排除してしまった人類は、様々な失敗の責任をすべて負わなければならない。それが、2000年前の決断の本質である。しかし、今になって私は思うのだ。我々は、本当にすべてを自分たちの手中に収めることができたのだろうか。

既に全人類共通の遺伝的形質として組み込みが終わっている機能の多くが、外部の電子機器や通信網と連携して人間本来の五感や演算能力、記憶能力などを拡張するためのものである。これらはインターフェイスコンポーネントと呼ばれ、いまや生活に不可欠のものとなっている。なぜなら、すべての社会インフラは、こうした能力を前提として組み上げられているからだ。しかし、人格だけは別である。人の本質とも言える人格についてはいまだに謎だらけだ。それを司る脳神経の部位や、それを構成するための遺伝子セットはとうの昔に解析が終わっている。にもかかわらず、その部分だけが、あらゆる操作を拒絶してしまうのだ。つまり、その部分に何かの操作を加えたとたん、それは機能しなくなり、人格そのものが破壊されてしまうのである。これは人間としての死を意味し、そうした操作を加えられた細胞は自滅する。

現在の遺伝子工学は、基本的に人体や動物を使った実験は行わない。既に確立されている遺伝子モデルを使ったシミュレーションで、新しい機能コンポーネントを設計し、試験するのである。現在、このモデルを使ったシミュレーションで99.99999%まで問題を排除できる。その後、後天的形質としての臨床組み込み試験が行われるのだが、万一、いや億にひとつの問題が発生した場合でも、すぐにその遺伝子をページできるような処置もほどこされているため、安全性は極めて高い。この臨床試験の後、正式な承認を受けて、まずオプション機能としての市販が許可される。もちろん、これは後天的形質、つまりその一代限りの機能としてのものだ。しかし、それが社会的に有益かつ、将来にわたって必要になるという判断がしかるべき機関でなされると、それは生殖細胞への組み込み、すなわち遺伝的な形質とすることが認められる。さらに、それが将来整備されるインフラと結びつくようなものである場合は、次のバージョンの基本コンポーネントに加えられ、全人類共通のものとなるのである。

この2000年ほどの間に人格形成に関する操作についても様々な議論が行われてきた。犯罪

はいまだなくならないし、まれではあるが、人格に異常をきたすケースも残っている。こうした部分に対して操作を加えるべきかどうかという議論は、人間の本质と深く結びつくだけに、きわめて慎重に行われてきた。今のところ、多くの識者が人格操作については否定的だ。もちろんそれ以上に先に述べたような技術的な問題が大きく立ちはだかっている。幸か不幸か、そのため、こうした議論を無視して先走った研究者の試みはすべて失敗に終わっているわけだ。おそらく、もし神もしくは創造主と呼ぶべき存在がいたのならば、それは我々がこの領域に足を踏み入れることがないように考えていたのだろう。自らの本質を変えてしまうことがないようにと。

今、我々遺伝子工学者は、この人格と、人体の機能を分離して考えている。たとえば、複数の人間つまり人格が、互いの能力を共有したり、相互利用したりできるようなインターフェイスの開発に力を注いでいるのは、こうした思想の反映でもある。最近では複数の人と電子機器、通信網が相互に協力して何かを達成できるようなモデル作りが進んでいる。人には得手不得手がある。たとえ十分な機能を持っていても、それを使いこなせないこともある。有史以来、人はそうした問題を抱えながら、協力することでそれを補ってきた。今、我々が進めようとしているのは、そうした協力のためのネットワークをより進化させることだ。情報のみならず、必要に応じて互いに機能や、必要ならば記憶や経験をも共有できる、そんな世界を目指しているのである。

(アンリ・ガブリエル著「第二創世記の始まり」より)

ここは、地球からおよそ150万Kmの距離にあるL2ステーション。地球と太陽の引力と公転軌道の遠心力がバランスする第2ラグランジュ点(L2)にある巨大な宇宙都市である。ここにあるスペースアカデミーは、多くの宇宙船乗りを育ててきた専門教育機関だ。アカデミーはその専門課程、つまり、宇宙船運航に必要な様々な専門分野に特化した教育課程と、基礎課程、つまり、一般教育と専門課程に進む前の準備を行う教育課程に分けられている。そして、後者の基礎課程は、一般の高校教育課程を含んだ形で行われている。形としては一貫教育ではあるが、基礎課程修了後に他の方面へ進む可能性も考慮して、名目上分離されているのである。そのため、基礎課程は附属高と呼ばれたりもする。

俺は中井ケンジ、今日から附属高の2年になる健全な男子である。いましがた新学期の始業式が終わり、教室に戻ってきたところだ。実のところ、この一年ほど、附属高のレベルの高さに、かなり打ちのめされてきた。進級だって恥ずかしながら追試のあげくによくやく・・・とあったところだ。本来、どうして俺なんかがここに入学できたのか、自分でも不思議なのだが、俺には時々、神ががりみたいなことが起きる。それは、システムを介して他の誰かと情報共有している時に突然発生する。それが起きると、自分が知らなかったことや、経験もしていないようなことが、なぜかすべて知っていたことのように理解できてしまうのだ。この附属高の試験の際にも、それは起きた。そのおかげで、俺はここに入れたわけだが、入ってからはさっぱりで、一年間ついて行くのに苦労してきた次第だ。

最後にそれが起きたのは、入学式前日。地球から入学式が行われる第6静止軌道ステーションまでのフライト中だった。地球低軌道で軌道間遷移のための待機中に強烈な太陽嵐が発生、生じた磁気嵐でパイロットがインターフェイスのオーバーロードを起こして意識を失い、たまたま居合わせた俺と、今、前の席に座っている美月、フルネームは星野美月・ガブリエル、彼女の両親は遺伝子工学者、とりわけ父親は教科書にも名前が出てくるアンリ・ガブリエル・・・という、まあ、なんとというかセレブのお嬢様なのだが、その美月と俺の2人が、どういうわけかパイロットの代わりをすることになってしまったわけだ。

言っておくが、最初にそれを言い出したのは俺ではない。この美月である。だが、結局俺も巻き込まれ、それからが大変。何度も襲ってくる磁気嵐でシステムをやられながら、なかばアクロバットみたいな操縦をして、墜落を回避、加速ステーションとの無理矢理のランデブーで、静止軌道に上がるための移行軌道であるトランスファー軌道に乗せてもらったのはいいが、燃料切れとかコンピュータの不具合とか、またしてもトラブルに襲われ、救援のタグボートとのランデブーにも失敗してしまう。もうこれまでか・・・と思った時に、非常通信を聞きつけた大型の恒星間貨物船、ヘラクレス3に救助されたという顛末。その途中、操縦のためのバーチ

ヤル・パイロット・インターフェイス（VPI）を使って、TS5型シャトルのシステム経由で美月と情報共有モードに入った時、それがまた起きた。俺たちが生還できたのは、その「神がかり」のおかげだったのかもしれない。だが、それ以来、そんな力とは、ずっとご無沙汰だ。

ちなみに、美月は去年、俺とは別のクラスにいて、しかも俺とは違うタイムゾーンにいたので、ほとんど会うことがなかった。こうした宇宙都市は、多くが8時間差のある3つのタイムゾーンに分かれている。こうして生活時間に差をつけることで、24時間、都市機能を維持しているわけだが、生活時間は一部重なるものの、一方がオフの時、他方は授業があったりするわけで、交流できるタイミングはかなり少ないのだ。

人工重力装置が一般化している現代の宇宙都市では、もはや昔のように回転による遠心力で重力効果を生む必要が無い。そのため、都市は円筒形のステーション（正確には円筒形の強化シールドで覆われた正三角柱）の表面に配置され、24時間で一回転して昼夜を生み出すようになっていく。天井の強化シールドは適切に太陽光を調節、散乱して地球の青空のような景色を作り出してくれる。もちろん朝夕の空も再現されるので、生活感覚は地球上にきわめて近い。唯一違和感があるとすれば、またたかない夜空の星くらいだろう。それはすばらしい満天の星空だが。

まあ、あまり一度に多くのことを話してもしかたがないので、これまでの話はおいおいするとして、今の話に戻ろう。2年目からは基礎課程でも、実際の宇宙艇を使った訓練が実施される。そのために1年では基本的なシミュレータ訓練を終わらせてある。生徒は、それぞれの役割、つまりは志望する専攻科目ごとに、各実習チームに参加する。1チームは、パイロット2名、ナビゲーション1名、エンジンアリング1名、コミュニケーション&インテリジェンス、略してC&I1名、そしてメディカル1名の6名で編成される。これが、小型宇宙艇一機を飛ばすためのクルー構成だ。ちなみに、俺と美月はパイロット志望である。チーム編成は、学年のはじめに、各自の希望を入れながら調整して決めることになっている。だが、実は俺たちのチームは既に数日前、美月を含めて全員決められてしまっている。うちのクラスの担任教師であるフランク・リーブスと、その他女子2名の陰謀によるものだ。今朝発表されたクラス分けも、それを反映して、チーム全員同じクラスである。まさに教師の職権恐るべし・だ。だが、美月はまだそのことは知らない。そもそも、こうなった理由は美月が持つ特殊なコンポーネント構成、というよりも、脈絡無く詰め込まれた雑多なコンポーネントが情報氾濫を引き起こすことで、ゾーン2、つまり美月が元々いたゾーンでチームが組める相手がいらないということにあるわけだ。これは彼女自身のせいではなく、遺伝子工学者である両親の仕業なのだが、なぜか俺と組むと、うまくいってしまうのは、先に話したシャトル事故の際に実証済みである。（個

人的にはあまり嬉しくもないのだが・・・)なので、フランクは、美月をこのゾーン1に移動させたというわけだ。

これはあまり思い出したくないのだが、シャトル遭難で覚悟を決めた時に、俺は美月に、お前を守ってやるとか、ずっと一緒にいるとか言ってしまったのである。もちろん、追い詰められた状況下でだが、そのときは本心から出た言葉だったような気がする。だが、奇跡的に助かって、その後、美月はどうやら、その言葉を根拠に俺を下僕化しようと考えてしまったようなのだ。去年、一年離れたことで、もう時効だろうと思っていたのだが、そう甘くはなかったらしい。さて、今年も前途多難である。

「よし、席に着いてくれ」

担任教師のフランク・リービスが入ってきた。フランクは、昨年はゾーン2つまり、今俺たちがいるゾーン1より8時間遅いタイムゾーンを受け持っていたのだが、今年からこちらに移ってきた。昨年俺たちの入学と同時に着任した2年目の教師で、恒星物理が専門の研究者だ。教師は研究の片手間という話だが、パイロットとしての腕前もかなりらしい。それに女子の人氣ランキングはトップレベルのイケメン教師である点がちよつと憎らしい。

「さて、明日から授業が始まるわけだが、その前に、今年度の実機演習のチームングを決めなければいけない。そこで、各自、まず自分が組みたい相手をこのフォーラムに入力してもらおうと思う」

フランクがそう言うと、俺の目の前に、記入フォームが表示された。これは、教室のアウトバンドインターフェイスを経由して、俺の視覚に直接投影されている。アウトバンド、正しくは、アウト・オブ・バンド(帯域外)インターフェイスは、視覚や聴覚の拡張により、可視聴域外の光や音を通信手段として使って、外部と情報交換するためのコンポーネントである。そして、それは基本的な遺伝子コンポーネントの一部として、すべての人が保有している。なので、直接、送られてくるこのフォーラムは自分にしか見えないし、これに記入した内容を他の生徒に知られることもない。

「念のため言っておくが、もちろん希望がすべて通るわけじゃないぞ。希望が重なるような場合や、適切な組み合わせでないと判定される場合は、違うメンバーと組むことになるから、承知しておいてくれ。それから、一部の諸君には、あらかじめ、私の方から推奨するメンバーを記入してある。異議がなければ、そのまま出してもらえると助かる。」

そういう意味では、俺に渡されたフォームには既に全員の名前が記入されているわけで……、たぶんこれは他のメンバーも同じだろう。つまり、数日前の根回し通りの人選になっているわけだ。ちなみに、俺のチームは、俺、美月の2名がパイロット。それからナビゲーションに沢村ケイ。彼女は入学式当日に出会って以来、一年間同じクラスで、シミュレータ実習も同じチームだった。とにかく元気で賑やか、ちよつと脱線気味な女子である。そして、エンジンアリングは、ジョージ・エイブラムス。ゲーム好きでオタク、しかしちよつと天才肌で遅刻と居眠りが玉にキズの男子である。基礎課程1年目にしてアカデミーのセンターコンピュータをハッキングしてしまい、謹慎を食らったのは、教師や生徒たちの間でも有名だ。今日は、初日から遅刻でフランクにお灸を据えられた。彼も1年間一緒にチームでケイや俺の遊び仲間だった。メデイカルはマリナ・クレア。附属校トップ入学で、その後も試験ではずつとトップをキープしている優等生女子。前期はこのクラスの委員長に決まっている。でも、このメンバーの女子の中では最も性格が素直というか、天然というか……、いい感じの女子だ。彼女も入学式当日に出会った一人。昨年、クラスは違ったが同じゾーンだった。ケイと仲がいいので、時々、一緒に遊んだりしていたからよく知っている。C&Iは美月と同じゾーン2から移動してきたという謎の女子、サマンサ・エドワーズ。彼女に関しての情報はまったくない。そして、リーダー役は俺らしい。なんで俺？と思うのだが、確かに考えてみれば、一筋縄でいかない連中ばかり。誰がやってもなにかしら問題が出そうだ。まあ、中でも一番取り扱いが難しい、星野美月の扱いに慣れている（あまり慣れたくはない……のだが）俺が適任なのかもしれない。

「よし、記入したら提出してくれ。あとは、システムが希望をとりまとめて、総合判断して決めてくれるはずだ。」

ちよつと抵抗してみたい気もしないではないが、それはたぶん無駄だろう。この組み合わせは、システム上では既に確定扱いになっているはずだ。変えたところで戻されるのがオチである。残念ながら受け入れるしかない。俺は、そのまま提出ボタンにタッチする。

仮想的な画像にタッチするというのもおかしな話だが、アウトバンドを使った情報交換では、入力にこうしたジェスチャーを使う場合が多い。それに、単なるジェスチャーではなく、ちゃんと触った感触がフィードバックされてくるのである。俺の動きをモニターしているコンピュータが、アウトバンドを通して送ってくる仮想現実だが、それは、実際にそこにタッチパネルがあるのと同じ感覚だ。

俺は提出してから、周囲を見回して他のメンバーの様子を確認する。ケイ、マリナ、ジョー

ジの3人はこの状況を知っているので問題ない。互いに顔を見合わせて確認している模様。さて、問題は俺の前にいる美月だ。なんとなく固まって宙をにらんでいる。(仮想映像を見ているので、そう見えるのだ)そして、いきなり俺の方を振り返って・・・

「ケンジ、なによこのメンバー。あんた、もしかして知ってたわけ？」

と、いきなり俺にくっつくわけ。

「あ、いや、俺も今見たところだ。でもまあ、知らない連中ばかりでもないし、いいんじゃないか？」

まさか、根回し済みとも言えないので、ちよつと、とぼけておくことにしたわけで・・・。

「あんたはいいわよ、でも、ちよつと出来過ぎてる気がするわね」

「まあ、確かにそうだけど、たぶん、フランク先生が俺たちのことをよく知ってるからじゃないのか？」

「・・・」

美月は、まだちよつと不満そうな顔をしている。とは言え、彼女はこのゾーンのメンバーをほとんど知らないから、他のメンバーを指名することも難しい。まあ、こいつの性格から言うと、自分に選択肢が与えられないということが面白くないのかもしれないのだが。

「まあ、いいわ。いずれにせよ、あんたがちゃんと仕事をしてくれるなら、問題ないわよね」

「え、し、仕事・・・って？」

「だって、あんたリーダーでしょ。だったらメンバーの面倒を見るのはリーダーの仕事よね。なにか文句でも？」

「い、いや、たしかにそうだが、それはあくまで実習チームの話だよな」

「チームワークを円滑に進めるためには、普段の付き合いも重要なはずよ」

「まあ、それは確かだが・・・」

「ということ、仕事はきちんとしなさいよ！」

「あ、ああ・・・」

なんだか、こいつの仕事という言葉には、かなり個人的な内容が含まれていそうな気がするのだが、とりあえず、納得してくれるなら、今のところそれは考えないでおこう。



「星野、あとはお前だけだが・・・」

とフランク。美月は、ちよっと口をとんがらせながらも、提出ボタンに触れる。

その瞬間に、俺の前のフォームの色が変わって、確定、承認済みのステータスが表示された。

「よし、これで全部揃ったな。手元に調整結果がフィードバックされていると思う。各自、システムから最終案が提示されていると思うが、未確定になっているチームは。それで問題なければ確定させてほしい。いいかな？」

周囲を見回すと、多少首をかしげている生徒はいるものの、間もなく全チームが確定したようだ。

「よし、今日のところは、これで終わりだ。あとは、新しいチームで親睦を深めるといいだろう。では、明日からよろしくな。」

フランクはそう言うと、手を振りながら教室を出て行った。生徒たちは、それぞれのチームごとに集まりだしている。ケイとマリナ、そしてジョージが俺たちの所へやってきた。

「さて、親睦でも深めてみますか？皆さん、よろしくっ！」

「なかなか面白そうなチームだね。パワーありそうだし。楽しみだね」

「皆さん、よろしくお願いしますね。」

「ああ、みんなよろしく」

「・・・」

見たところ、美月はまだちよっと不満そうにしている。

「ねえねえ、星野さん。ゾーン2の話も聞かせてよ」

とケイがすかさずジャブを放つ。

「話す事なんて何もないわよ。どうせ私はあっちでも疫病神だったんだから。あんたたちも覚悟しといたほうがいいわよ」

と美月が軽く返す。

「ふーん、ゾーン2の奴らもひどいねえ。こんな可愛い娘つかまえて、疫病神とは。まあ、どれくらい疫病神か、ちょっと楽しみだけど」

「言っとくけど、後で後悔しても知らないからね」

「大丈夫だよ、その時はこっちの下僕さんに責任とってもらうからさ」

お、俺かい？いきなりこっちに振るのか。

「あれ、ケンジって星野さんの下僕だったのか？ そう言えば、星野さんって、あの34便の時の相方なんだよね。俺は、ジョージ・エイブラムス。よろしく」

「あんたがエイブラムス？ あの、センターコンピュータをハッキングした？」

「あはは、ゾーン2でも有名になっちゃったか。謹慎3日食らっちゃったけどね。あ、俺のことは、ジョージでいいよ」

「あたしのことも、みんな美月でいいわよ。私だけラストネームじゃおかしいでしょ」

ほお、美月にしては協調的だ。こいつもゾーン2の一年間で少しは進歩したのか。

「美月さん、改めてよろしくお願いしますね。私も、マリナでいいですから」

「ケイさんも、よろしくつ。あれ、そういえばもう一人は？」

そうそう、サマンサ・エドワーズって……。と振り向いたとたんにそこに顔があった……。ほとんど、おデコにキスしそうな距離である。そんな気配はまったく無かったのだけだ。

「うわっ……」

俺はちょっとびっくりして一歩下がる。

「サマンサ・エドワーズ。C&Iを担当します。よろしく」

「あ、いたいた。私は沢村ケイ、ナビ担当です。あ、ケイでいいからね。よろしく」

「お、俺は中井ケンジ、パイロット担当。い、一応だが、リーダーということになってる。よろしくな。俺も、ケンジでいいから」

「マリナ・クレアです。メディカルを担当します。よろしくお願いしますね。私もマリナと呼んでください」

「僕はジョージ・エイブラムス。エンジニアリング担当。情報・通信系でなにか不都合があ

ったら言ってくればなんとかするよ。僕のことも、ジョージでいいから」

「星野美月・ガブリエル。パイロットよ。美月と呼んでいいわ。あつちで顔は知ってるわよね」

「よろしく。私のことは、サムと呼んで……」

これで、とりあえず全員揃ったわけだが……

「さて、リーダー、これからどうする？」

「どうって……、いきなり言われてもなあ……」

「あんたね、リーダーでしょ。そんなことも考えつかないで、先が思いやられるわ」

おいおい、そりゃ、無茶振りだろう。まあ、リーダー役そのものが無茶振りなんだが……

「とりあえず、街に出てってのはどうだい？」

ジョージが助け船を出してくれたので、俺はそれに乗ることにする。

「そうだな、とりあえず出てから考えようぜ。そうしよう」

「あいかわらず、行き当たりばったりよね。一年前と全然変わってないわ、そんなところが」

そう簡単にならなかつたまるものか……、などと俺は思いつつも無視を決め込むことにする。

だが……

「一年前って、あのシャトル事故の話？ それ、もっと詳しく聞きたいな。ケンジってば、いつもごまかして教えてくれないんだから」

「あ、僕も聞いてみたい。降下軌道から射出用の加速磁場に乗ったんだよね。前から興味があつたんだ」

いかん、この話は一年間封印してきたのだ。なぜなら、最後に誰もが聞きたがる部分は、最終的に救助される直前の……あの部分なわけで……。

「と、とりあえず出てから話そうか……」

と、俺は全員を促して、教室を出る。しかし、行く当てはなかったりするのだが……

「あ、この前行ったお店はどうでしょう。いい感じのお店でしたよね。あそこならお話しやすいし」

「あ、あそこね。いいかも。そうしようよ」

マリナの提案にケイがすかさず同意する。マリナさん、あなたは俺が困ったときに、いつも助けてくれる天使のような・・・

「ケンジ、あんた、そうやってこの二人と仲良くやってたわけ？」

「仲良く・・・って、そりゃ、同級とか隣のクラスとか・・・だったしな。美月だって・・・」

と言いかけて、俺は一瞬言葉に詰まった。そうだ、こいつはたぶん、一年間、孤独に過ごしてきたんだ。そう思うと次の言葉が見つからない。

「ええ、私も時々遊んでもらってましたよ。これからは美月さんも一緒ですね。楽しくなりそうです」

おお、絶妙のフォローです。マリナさん！

「だね。まあ、ケイさん的には、ライバルが増えてちよつと困るところもあるんだけど、とりあえず、仲良くやろうよ」

「おお、なんだかケンジのハーレムみたいじゃないか。羨ましいな」

おいおい、冗談じゃない。ハーレムどころか、修羅場になりかねない。俺は命がいくつあっても足りないっての。

「そんないいもんじゃないような気が・・・」

「あんた、なにか不満でも？」

「あ、いえいえ、不満なんか・・・ございませんです。」

「おお、さすが下僕殿。ご主人様には従順だねえ」

「おい！・・・」

そんな会話をしながら、俺たちは街に繰り出した。

街はちようどお昼時。お目当ての店は結構混んでいて、少し待たされて、テーブルに案内された。

「おなかすいたよ。とりあえずランチだね」

「そうですね。ちようどいい時間ですし」

俺たちは、それぞれに食事を注文する。このシステムもさっきの教室と同じでアウトバンドでメニューが送られてくる。注文したい料理にタッチすれば注文完了だ。

「ねえ、何にする？ 私はこのレディスランチがいいかな」

「そうですね。軽いめのメニューですし。私もそれにします」

「僕は、そうだな、・・・スペシャルメニューで・・・」

「なんだよ、そのスペシャルってのは？」

「あはは、見てのお楽しみ」

「ジョージ、まさか、また？」

「おいおい、また謹慎食らうぞ」

「大丈夫だよ、ここは代金さえきちんと払えば文句は言わない。まあ、それで何かあっても自己責任だけだね」

どうやら、ジョージはこのカフェのシステムにも裏技を使えるらしい。

「ここのシステムは穴だらけ・・・でも、記録は残るから、ごまかしても後で請求が来る」

サムが口を開いたのは、これが最初か・・・。彼女もC&I志望だけあって、システムには詳しいのだろう。

「でも、その組み合わせは・・・デンジャラス」

「え、僕の注文わかったの？」

「調理ドロイドへの指令をインターセプトした」

「さすが、C&Iだねえ。ジョージの上前をはねるとは」

「まいったな。その手があったか。C&Iは情報のルーティングも制御できるからね。いわゆる、マン・イン・ザ・ミドルってやつだね」

「そう。ここの通信装置はセキュリティが甘い。偽の経路情報を受け取ってしまう。あ、正確にはガール・イン・ザ・ミドル」

「なにに、そのイン・ザ・ミドルってのは？」

「ああ、システム間の通信は、適切な経路を選んで伝送されるようになってるんだ。これを制御するために通信機器間で受け渡されるのがルーティング、つまり最適な通信経路の情報なんだけど、もし、偽物の経路情報を通信機器が受け入れてしまうと、本来の経路をねじ曲げることができるとだよ。たとえば、全部の通信が一旦、自分を経由するようにするとかね。そうすると、他の通信の中身を覗いたり書き換えたりすることができるとか。本来の通信相手の間に入り込むという意味で、イン・ザ・ミドルなのさ」

「それって、盗聴って言わないか？」

「まあね。でも、最低限のセキュリティすらかけていないこの店の方が悪いって話もある。それに、覗いたのがこのテーブルからの通信だけなら、問題ないだろうね。まあ、これがVUなんかでの一般の通信だったら、明らかに犯罪になってしまいうんだけど、VUの場合はかなり強固なセキュリティをかけてるから、僕にも破るのは無理だ」

いやはや、ジョージだけでも大変なのに、このサムって娘も、なかなか手強そうだな。ちなみに、VU（ヴィユー、バーチャルユニバースの略）ってのは昔風に言えばネットみたいなものだ。今では地上だけではなく、宇宙都市や各種の衛星をも繋いでいる。単なる情報だけではなく、インターフェイスを介した仮想現実感まで伝送できるので、たとえば、地上と宇宙都市の間での仮想会議みたいなこともできる。恒星間通信でも実験中だが、遅延がかなり大きいため、今の通信方法を変える必要があつて、まだ実用化はされていない。

「ところで、美月は何を注文したんだ？」

「関係ないでしょ！ 何でもいいじゃない」

「はいはい。でもまあ、来れば分かるんだし、隠しても無駄だろ」

「うるさいわね」

どうやら美月もちよつと大胆な注文をしたようだ。サムに聞いてみたい気もするが、敢えて火種を蒔かない方がよさそうだからやめておこう。

「ところでさ、C&Iは最初の一年、別課程で実習するじゃない。どんな実習してたの？」

「主に、情報処理能力に関する実習。とりわけ、多元的情報処理の訓練が中心。ある事象について、異なる視点からの情報を総合して、その事象の本質を推定、分析すること」

「ふーん、なんだか難しそうだねえ」

「たとえば、メデイカルが、いろんな症状から病名を推定するようなものですよね。それをもっと一般的な形にしたような」

「そう。抽象的な情報処理能力と同時に、出来るだけ多くの情報ソースとインターフェイス出来ることが、C&Iの条件。でも私は、あまり多くのインターフェイスを持っていない。情報は他人頼み。そういう意味では、C&Iとしては欠陥品」

「でもさ、C&I志望でいられるってことは、情報処理能力はかなり高いよね。さっきのだって、一応、暗号化されてる通信を解いたわけだから。だったら、船の情報系をうまく調整できれば、ある程度情報をたばねて渡すことは出来ると思うよ」

「あの暗号は古いタイプの物だから解読法はもう分かっている。ちよつと計算能力があれば解読できる」

「でも、あの短時間でそれをやったんだ。それはすごいと思う。僕だったら1時間くらいはかかるかもしれない」

ジョージは、このサムがちよつと気に入ったみたいだ。まあ、あくまでも彼のオタクセンサーが反応したのだとは思うが。

「ねえ、暗号ってそんなに簡単に解けるの？」

「いや、たぶんそれはこの二人だからじゃないか？ 少なくとも俺には何がなにやら分からん」

「たぶん今の最新型の暗号だと、アカデミーのセンターコンピュータを使っても何十年か、かかるんじゃないかな。それだけ時間がかかると、情報としての価値は、ほぼなくなってしまうから大丈夫だと思うよ」

「正確には75年と231日12時間3分35秒かかる。但し、センターコンピュータの量子演算ユニットを、そのただけに全部使った話だから非現実的」

「それを聞いてちよつと安心しました。メデイカルはプライバシーに関わる情報が多いですから、漏れたら大変なんですよね」

「そう単純じゃないわよ。暗号化する時って、それを解くための鍵になるデータを使うんですよ。その鍵が盗まれたら、どんな強力な暗号だって、あつという間に解かれてしまうのよ。だから、理論的な解読時間はあくまでも暗号鍵が盗まれないという前提よ」

と美月が横から口を挟む。これはちよつと意外。まあ、彼女も優等生のたぐいではあるわけだが、知識の範囲もかなり広そうだ。

「そうそう。そうなんだよね。だから、暗号化されたデータを力づくで解読するなんてこと

は普通やらないんだ。鍵が保管されているシステムに侵入してそれを盗むつてのが、大方の犯罪者の手口なんだよね」

「さすが、センターコンピュータをハッキングした人は言うことが違うねえ」

「だから、それは言いっこなしだつて」

「まあ、暗号鍵自体も、保存するときとは別の暗号を使って暗号化してあるから、それほど単純にはいかないけどね。ただデータ本体に比べれば、解読のための計算量は少なくすむから、どのみち鍵を手に入れるのが早道なんだよね」

なんとなく怪しい会話になってきている気がするのは俺だけだろうか。公共の場でこんな話をしていて大丈夫だろうか、などとちょっと心配になってきた時、ウエイトレスが料理を運んできた。ウエイトレスとは言っても、アンドロイド、つまり人型のロボットなのだが、これがまた、人と区別がつかないくらいよく出来ている。

「お待たせしました。レディスランチでございます」

「あ、それは私とそちらで」

とケイ。

「あ、お先にどうぞ」

「じゃ、お言葉に甘えていただきます」

「それじゃ私も、いただきます」

間もなく次々と料理が運ばれてきた。

「ハンバーガーランチでございます」

「あ、それは俺です」

「サラダランチでございます」

「それは私・・・」

さて、問題の二人は何を頼んだんだろう。最後になるってことは、手にかかる料理に違いはない。俺は自分の料理を食べながらも興味津々で2人の料理が運ばれてくるのを待っている。

「お待たせしました。14オンスのクラシックステーキでございます」

「それはこっち」



と美月。おいおい、真つ昼間から特大ステーキかよ。どんだけ肉好きなんだ、こいつは。

「おお、すごいねえ。美月って肉食派だったのかあ」

「悪い？ このところ肉とはご無沙汰してたから食べたかったのよ。まあ、地球で食べてた肉に比べたら安物だけど」

「ケンジ、喰われないように気をつけなよ」

「誰がケンジなんか。そんなもん食べたら腹壊すっての」

「そんなもん？ 喰いたいと言われても、こつちが願い下げだ！」

「ほらほら、痴話喧嘩しないの」

「痴話喧嘩？」

俺と美月が同時に・・・不覚にもかぶってしまった。

「お、やっぱ仲いいねえ。きつちり反応がかぶってるし」

「そ、そんなんじや・・・」

まただ・・・。

「ほらほら。二回連続つてのは、偶然にしても、かなり確率低いと思うよ」

そして今度は二人とも黙り込む。これもかぶってる。こいつとそこまで気が合うなんて、あまり考えたくないのだが、たぶん向こうもそう思っ様子を見ているのだろう。しばし、沈黙が・・・。その時、最後の料理が運ばれてきた。

「け、ケーキかよ」

そう。スペシャルメニューは、大皿いっぱいに乗せられたショートケーキ。そして、大ジョッキにつがれた黒い泡立つ液体。

「ねえ、その不気味な飲み物は何？」

「あ、これね。大昔流行ったコーラってやつ。一度飲んで見たかったんだよね。データベースからレシピを持ってきて、調理ドロイドに流してみたんだけど」

「おい、大丈夫か、そんな物飲んで・・・。しかも、飯の代わりにケーキって・・・」

「いやあ、なんか甘い物が食べたくてね。あ、たぶん一人じゃ食べきれないから、デザートの代わりに食べていいよ」

「デンジャラス・・・」

たしかに。この砂糖の塊みたいなケーキと不気味な液体、いやこれも甘そうだ。いくらなんでも、炭水化物の摂り過ぎだろう。俺もサムの意見には同意する。

「でも、おいしそう」

とサム。

「あ、いいよ好きなの食べて」

「じゃ、私はイチゴのいただきっ！」

と、ケイが先に手を出す。案外、ジョージは女子受けする行動を無意識に会得しているのかもしれない。結局、マリナと美月も一切れずつ。

「そりゃそうとき、さっきの話だけ・・・」

口にケーキを入れたまま、ジョージが言う。

「ジョージ君、お行儀悪いよ。食べてからにしなさいよ」

と言ってるケイも同じなのだが・・・。ジョージは口の中のケーキを、そのコーラとかいう不気味な液体で流し込んでから続ける。

「TS5型飛ばした話が聞きたいなあ。あの機種の制御システムは最新型なんだよね。フライトコンピュータだけじゃなくて、各部の制御用コンピュータが独立して自律的に動けるんだ。ちようど人間の神経系みたいに、フライトコンピュータやパイロットの指示を、それぞれの部分で学習するんだよ。それだけじゃなくて、フライトコンピュータなしで、互いにうまくバランスが取れるように協調して動けるんだ。だから、フライトコンピュータの負荷が大幅に軽減された分、いろんな機能が増えてるらしいんだよね。旧システムに慣れたパイロットだと、最初は違和感があるみたいんだけど、どんな感じだった？」

「いや、違和感もなにも、操縦したのは初めてだしな。でも、たしかにマニュアル操縦も思

ったほど難しくなかった気がする」

「え、マニュアルって、本当にマニュアルで飛ばしたの？」

「いや、俺も出来るとは思わなかった。シミュレータでやったときは5分でアウトだったんだけど、不思議だよ」

「ケンジ、あんた、誰かを忘れてないかしら？」

いきなり美月が割り込んできた。

「あんたが一人で操縦してみた言い方しないで欲しいわね」

「あ、いやそんなつもりじゃ・・・」

「そもそも、あんたは私のバックアップじゃない。まあ、私一人でも出来たとまでは言わないけど、忘れてもらっちゃ困るわ」

いかん、美月が黙っているのをいいことに、ちよつと調子に乗って喋ったのが、ご機嫌を損ねたようだ。でもまあ、美月が言うのにも一理はある。彼女のインターフェイスからの情報がなければ、俺一人ではダメだったかもしれない。それに、彼女のダイレクトインターフェイス（DI）ユニットが保護回路を強化した高級品じゃなければ、二人とも磁気嵐のショックによるオーバードロードで死んでいたかもしれないのだから。

「忘れてなんかいないさ。あれは、美月がいたから乗り越えられたんだしな。感謝してるんだ」

と俺はちよつとフォローに走ることにした。

「そ、そうよ！ 感謝しなさい。私だって・・・あんたがいなかったらダメだったかもしれない。そういう意味じゃ、感謝してるんだからね」

「おお、なんかいい感じですね。ケイさん的にはちよつと妬けますが」

「そう言えば、フランク先生が、お二人は相性が抜群、とかおっしゃってましたよね。羨ましいです」

「い、誤解しないでよね。別に、私はこいつなんか・・・」

美月が赤面して口ごもる。相性というのは、そういう意味とは思うのだけど。

「相性って、そういう意味じゃなくて、なぜだか分からないんだけど、情報共有がすごくう

まくいくんだよな」

「そ、そうよ。情報共有の話だから。でも、確かに不思議なのよね。ケンジが相手だと、うちの親が私にやった人体実験みたいなインターフェイスからの情報がきれいに整理されるのよ」

「それは、興味深い」

「うん、なんだろう。僕もちよつと興味があるな。そうだ、ちよつと試しに遊んでみないか？」

「遊ぶって、どうするの？」

「ゲームセンターに行つてフライトシミュレータで遊ぶ。あれ、実はアカデミーのデータベースから一部のデータをもらってるから、リアルに近い操縦ができるんだよ。ちよつとこのチームで試しにやってみないか？」

「お、いいね。実習前の予行演習か。やろうやろう」

「面白そうですね。是非」

「あんたたち、知らないわよ。目が回っても・・・、私の情報量はハンパじゃないんだからね」

「そうだな、まあ、実習でいきなりやるよりは、一度練習しといたほうがいいかもしれない。やってみようか」

そんな感じで話がまとまって、俺たちは、近くにあるゲームセンターに向かったのである。



大昔、コンピュータゲームが発明された頃は、ゲーム機械を人間が手で操作していたそうだが、今は、すべてインターフェイス経由で操作する。しかも、かなりリアルな仮想現実がある。ゲームの中で様々な体験も出来る。いわゆるロールプレイングゲームなどは、本当に自分が冒険の旅に出ている感覚になれるから、時々、帰ってこない奴まで出てしまう。まあ、ゲームセンターにはそういう奴を現実世界に連れ戻す、専門のカウンセリングスタッフも常駐しているのだが、これはある種の現実逃避にも使えてしまうわけだ。

そんなわけで、ゲームセンターと言っても、昔とはずいぶん様子が違う。フライトシミュレータのような大物は別として、個人プレイのゲームは、それぞれブースが用意されている。そこに入って座ったら、好きなゲームと繋がって遊ぶわけだ。VU経由で遠隔地の仲間とチームプレイも出来るし、見ず知らずの相手と対戦も出来る。チームプレイ専用のブースもある。

シミュレータものは、それぞれの規模に応じた小部屋があつて、その中で仮想現実を使って、実際に乗り物を動かしているような感覚を楽しむことになる。宇宙艇のフライトシミュレータも、実際の船のコックピットくらいの部屋の中でプレイするのである。

俺たちは受付をすませると、フライトシミュレータ用の小部屋に入る。がらんとした何も無い小部屋だが、機種を選ぶと、その機種に応じたシートの配置や、仮想現実感による機器類のパネルなどが用意されることになる。

「さて、どの機種にする？」

と、ジョージが機種選択パネルを見ながら言う。

「TSシリーズのシャトルだと、パイロット専用だから、やっぱ小型クルーザークラスよね」

「まあ、順当なところで、ST1Bあたりじゃないか？ 実習にも使う船だし」

「うーん、STシリーズはちよつと物足りないんだよなあ・・・あれ、こいつ、ペガサスIIが入ってるじゃないか。いつ入ったんだろ」

とジョージ。

「ペガサスⅡって、SF2A？ 最新型じゃない」

「面白そうじゃん、やってみようよ、それ」

「いきなりファイタークラスって、ちょっと難易度高くないか？」

「ケンジ、あんた何言ってるのよ。失敗したってどうってことないんだから、難易度高い方が面白いに決まってるじゃない」

「そうですね、面白そうだし」

「よし、決まり！ ペガサスⅡで行こう」

「支持！」

はあ、やっぱりこのチームはこういうノリか。ちょっと先が思いやられるのだが、まあ、ここは美月の言うとおりに、楽しむことを優先するでしょう。

「じゃ、エントリーするよ。みんなDIユニットの準備はいいかな」

ジョージがパネルを操作すると、室内が一瞬またたいて、宇宙艇のコックピットに変わる。この船は、小型の哨戒・戦闘用宇宙艇で、ちょうどこのチーム構成で飛ばせる船だ。この景色の多くは仮想現実だが、本物と寸分違わない。シートのような物理的に力がかかるものも、特殊な力場を使って作られているので、座り心地などは、本物と変わらない。こうした仮想現実感を送るには、アウトバンドでは容量がたりないため、通常はDIつまり、外部信号を受信して、直接神経系とインターフェイスする方式が使われる。このために使われる装置がDIユニットで、多くの場合アクセサリや時計のような形で身につけられている。

「うわー、かっこいいねえ。さすが最新型。えっと、ナビシートはそこかな」

ケイが真っ先に自分の席に着く。

「やっぱ、すごいな、このシステムは。これもTS5と同じで、自律制御系が組み込まれているんだよね。だからメインのコンピュータシステムには、かなり余力があるはず。まあ、シミュレータだから、機能は制限されてるんだろうけど」

ジョージはエンジニアリング席につくと、早速システムのチェックを始める。俺と美月は操縦席、サムは通信コンソールに座る。マリナは、一番後ろのメデイカルモニターコンソールだ。彼女はここで、全員の体調などを監視する。

「ほら、あんたがリーダーなんだから機長席でしょ」

美月はそう言うと、副操縦士席に座る。

「よし、システムはOKだ。各自接続チェックを」

「了解」

ジョージの声に全員が応える。まずは、各自、自分の担当のシステムに接続して機能確認をする。

「機長席操縦系統チェック・・・OK」

「副操縦士席操縦系統チェック・・・OK」

「ナビゲーションシステム接続チェック・・・OK」

「通信及び情報処理システム、接続チェック・・・OK」

「メデイカルモニター接続チェック・・・OK、全員のVMIアクセス許可を確認、数値正常」

「システムすべて正常、接続チェック完了。それじゃ、情報共有テストいくよ。各自共有モードに」

「了解」

ジョージの声で全員が一斉に共有モードに切り替えた瞬間・・・。

「きゃっ、何、これ・・・」

「うわっ、こりゃすごいな」

「情報氾濫・・・」

「なんだか、目がまわりそうです」

はあ、やっぱり起きたか。俺の目の前にもありとあらゆる情報が表示されていて、酔ってしまいそうだ。これは、美月が持っているインターフェイスから俺の意識に流れ込んでくる雑多な情報だ。他のメンバーにも同じことが起きているはず。でも、俺の感覚もまたあの時のように研ぎ澄まされているわけで・・・。

「だから言ってるのよ、あとで後悔しないでねって」

「ちよっと待ってくれ、今なんとかするから」

とりあえず、あの時のように……乱雑な情報を一旦整理して、それから不要と思える情報を消して……と。

「おお、ケンジすごいね。こういうことが出来ちゃうんだ」

「だいぶ見やすくなったね。これならどうにかなりそうだな」

「どうなるかと思いましたが、大丈夫そうですね。皆さん、かなり血圧が上がっちゃってますけど」

「びっくり、でもこれすごい。こんな情報量、見たことない」

さて、とりあえずどうしようか、これでもまだ少し情報過多かもしれない。二人だけの時と違って、他のメンバーからの情報もある。

「ケンジ、ここからはちょっと僕に任せてくれるかな。システムで情報の振り分けをやってみる。各担当に必要な情報だけを渡せるようにするから」

とジョージ。

「全部、全部欲しい」

とサムが言う。全部って……大丈夫なのか？

「そっか、サムの処理能力だと、このデータは逆に役に立ちそうだからね。それじゃ、サムの所は、一旦フィルタを外すから、自分で必要な情報を取り出せるかな」

「やってみる」

なるほど、チームで動くと言っつのはこういうことなんだ。二人だけでやってた時に比べると、ずいぶん選択肢が増えるんだな。

「サンキュー、完璧だよ、ジョージ。これで私も仕事が出来る」

「私の所も大丈夫です。あとは、こちらのシステムに整理させますから」

俺の前の情報も、その種類や重要度ごとにパネル化されて整理されていく。俺がやるより、ずいぶん見やすくなった。



「すごい、信じられない。今までこんな事、絶対無理だと思ってたのに」  
「やっぱ、チームってすごいよな」

美月も信じられないという顔をしている。もしかしたら、フランク先生は本当に最強のチームを作ってくれたのかもしれない。

「よし、それじゃ、最後のチェック。サウンドモードにするよ」  
「了解」

さて、これが一番のお楽しみ。サウンドモードは、機外の景色すべてを、全員の意識に投影する。不思議だが、目では一度に見えない範囲も同時に見えている感覚になれる。つまり後や上下にも目がある感覚だ。想像できないかもしれないが、例えば目を閉じると、周囲の気配が感じられるように、人間の脳内には全周のマップが存在する。聴覚はこのマップ全域を使えるが、通常、視覚は見えている範囲のマップだけしか使わない。このサウンドモードは聴覚同様に、外部映像や長距離、短距離の様々なセンサーの情報をたばねて全周マップに投影してくれる。

「わ、すごい」  
「綺麗ですね」

サウンドモードに切り替わった時、俺たち6人は地球の周回軌道上に浮かんでいた。足元には青い地球。頭の上には太陽、宇宙を漂っているというか、この世界全部を見渡せる、神様にでもなった気分だ。

「大丈夫そうだね。特に異常はないかな」  
「OK！」  
「それじゃ、一旦切るよ」

俺たちは次の瞬間、またSF2A型機のコックピットに戻ってきた。

「さて、リーダー。シナリオはどうしようか」  
「そうだな、まずは基本的な離着艦手順でもやるか」  
「ケンジ、なにつまんないこと言ってるのよ。ランダムモードに決まってるじゃない」

「おい、いきなりかよ」

「いいんじゃない？ 面白そうだし。最悪でも機体が壊れたりほしくないんだしさ」

「賛成」

おいおい、こいつらみんなちよつと危なすぎる。

「よし、じゃランダムモードで行くよ。で、レベルは？」

「そりゃ初心者レベルからだろ」

「試しに上級レベルでやってみたら？」

とケイが言う。

「それ面白そう」

と美月。こいつら、シミュレータだからなのか、それとも、実機でもこんな感じになるのか……俺は不安だ。

「よし、じゃレベルは上級にセット。モードはランダム。最初のミッションは、テロリスト基地の破壊か……じゃ、ブリーフィング開始だ」

俺たちの前に、スペースガードの士官らしい画像が現れ、ミッションの説明を始める。どうやら、俺たちは火星基地所属の攻撃隊で、アステロイドベルトに潜むテロリストの基地を発見して叩くことが任務のようだ。基地は5ヶ所あり、いずれも対空砲や誘導ミサイル、戦闘艇などによって防衛網が敷かれている。ミッションは、最低3ヶ所の基地を破壊して、戦闘宙域から離脱すること。なかなかエキサイティングな設定だが、上級モードだから簡単にはいくまい。

「それでは諸君。ミッションの成功と無事の帰還を祈る。以上だ」

ブリーフィングが終わると、外部画像が火星軌道ステーションの射出用カタパルトに変わる。これは、惑星間宇宙艇射出用の高速マストライバーである。

「よし、射出前チェックだ」

「了解、チェックシーケンス開始……OK、異常なし」

ジョージが答える。

「目標コースセット」

「ナビゲーションマップ接続、コースセット！」

とケイが叫ぶ。

「サラウンドモードに移行するよ」

とジョージ。

「OK、頼む」

視界がサラウンドモードに切り替わると、俺たちはチューブ状の射出カタパルトに浮いた状態になる。

「射出シーケンス、カウントダウン開始」

前方のメインスクリーンの端に数字が現れ、射出のカウントダウンが始まる。カウントゼロになった瞬間、かなりきつめの加速感があつて、周囲の景色が一気に流れた。まるで絶叫系のマシンにでも乗った気分だ。ちよつと酔いそうになる。

あつという間に打ち出されて、後方に火星ステーション、そして空の半分ほどを火星が覆っている。そして、それが、どんどん遠ざかっていく。前方には美しい星空、そうした映像に加えて、コースを示すマップと、近傍の小天体の位置が表示されている。

「OK、目標宙域までのコースに乗ったよ。予想到達時間は3分」

とケイ。

「指向性磁場による加速を終了。自律航行開始するわ」

と美月。火星ステーションと周辺の加速ステーションを使った外部加速が終了して、いよいよ、自前で飛ぶことになる。

「エンジン始動、加速は正常」

ジョージはエンジンその他、船のシステムをモニターしてくれている。

「索敵開始します」

サムが長距離センサーのデータをマップに重ねてくる。まだ目標は表示されていない。既に出発点に対する相対速度は秒速3万キロ、光の速度の10%という、惑星軌道間では、かなりの高速だ。実際に、この船は小型だが、高出力の反物質リアクターと重力エンジンを備えている。その気になれば、通常航行でも光速の半分近くまで加速することが可能だ。オプションで、ワープドライブ用のアタッチメントも装着できる。使えるエネルギーには限界があるので、あまり遠くまでは行けないが、レベル12程度のワープ速度は出せるので、近場の恒星系くらいまでならひとつ飛びだ。スペースガードでさえ、まだそれほど多くは配備されていない最新鋭機である。

しかし、このメンバーは……いや俺もだが、どうしてこんなにこの最新鋭機を使いこなせるのだろうか。もしかすると、俺と同じことが全員に起きているのだろうか。

「そろそろ小惑星帯に突入するよ」

ケイが注意を促す。

「ジョージ、偏向シールドを展開できるか？」

「OK、偏向シールドを前方に展開。出力50%」

このあたりから、石ころ程度から岩の塊くらいの微少天体が多くなる。この速度では避けようがないので、前方に力場を発生させて、向かってくる物体を逸らす必要がある。それが偏向シールド、もしくはデフレクターと呼ばれる防衛装置だ。

「あと1分で目標宙域に入るよ」

「OK、各自戦闘態勢。美月、操縦は俺が代わろう。お前は火器管制をたのむ」

「わかったわ。任せなさい」

そう、こいつの性格だと、攻撃に回す方が間違いないからな。派手に撃ちまくってくれるだろう。

「あと30秒」

「サム、対空監視よろしく」

「了解、今のところ攻撃の兆候はない」

ミッションエリアに入ったとたんは何が起きるか分からない。しかも、これは上級モードだから、たぶんミサイルとか対空砲が雨あられと飛んでくる。たしかにエキサイティングだが、ちよつと寿命が縮みそうだ。

「あと10秒」

「よし、自動操縦解除、行くぞ」

さて、ここからだ。何は起きるか。

「目標宙域に入ったよ」

そしていきなり、甲高いアラーム音。

「長距離ミサイル確認、方位030、102から3発、方位348、020から3発、着弾まで20秒」

ほら、おいでなすった。マップ上に赤い点が3個ずつ、二手からこちらに向かってくる。

「火器管制、セーフティロック解除。迎撃ミサイル発射！」

すかさず、美月が対応する。

「防御シールド最大出力」

ジョージが叫ぶ。俺はコントロールステイックを握りながら（と言ってもこれも仮想現実なのだが）迎撃ミサイルの行方を追う。黄色い点が、赤い点と接触する。

「ミサイル5機消滅、1機残存」

1機打ち漏らしたか。迎撃ミサイルをもう一度撃つ余裕はないな。

「回避行動、ショックに備えろ」

俺は、ステイクをひねって、急角度で進路を変える。もちろんミサイルもそれについてこようとするから、連続して回避行動を続けなければいけない。感じる加速度は実際のものではないとはいえ、かなり目が回る操縦だ。本来、自由落下状態で加速度が発生しない重力エンジン装備の機体においては、この加速度自体が平衡感覚を保つための仮想現実なのだが。しかも、サラウンドモードだから、余計にきつい。あんまりやるとクルーの体調が心配だが、そこはマリナがモニターしてくれているから、問題があれば教えてくれるだろう。

「フェイザーキャノン、照準ロック」

美月が叫ぶ。フェイザーってのは、量子波動干渉ビームのことだ。このビームは一種の空間振動波で、狙った相手に当たると、原子よりもさらに微少なレベルで量子振動に干渉する。これにより、相手は原子レベルで崩壊してしまうのだ。弱点は、宇宙船の防御シールドによってかなりの部分を反射出来ることと射程があまり長くない点だが、近距離でのミサイル迎撃には有効だ。美月が勢いよくフェイザーを連射する。

「ミサイル破壊確認」

「攻撃目標複数確認、優先目標、方位203、158」

「よし行くぞ」

俺は、サムが指示した方向に機首を向ける。

「防御シールドを前方に集中」

ジョージが叫ぶと同時に、前方からフェイザーの連射が来る。小さな小惑星に設置された防衛線だ。間一髪、シールドが跳ね返す。同時に、美月がフェイザーを連射して撃破。

「ひゃあ、危なかったねえ。ジョージ、美月、グツジョブ」

ジョージが親指を立てて笑う。だが、まだまだ油断はできない。フェイザーがダメなら、次は短距離ミサイルの嵐だろう。早めに基地を叩かないと、危ない。

「美月、ここから基地を狙えるか？」

「たぶん・・・、やってみるわ」

前方に敵基地の拡大図が表示される。サムだ。

「ここが最適な攻撃ポイント。リアクター施設。シールドが強固なので、ミサイル3発ヒットが必要」

戦闘時のC&Iは、各種の情報に基づいた攻撃指示もこなさなければならない。

「了解。照準ロック、長距離ミサイル1番から3番発射！」

「美月、迎撃を考慮してあと2発たたき込め」

「わかったわ。4番、5番続けて発射！」

マップ上を目標に向けてミサイルが飛んでいく。

「優先目標破壊を確認。第二目標、方位080、238」

「080、238、了解」

どうにか、最初の目標は撃破したが、まだまだ先は長い。今度は何が来るのか。

「前方にSクラスの小惑星。回避コース、002修正」

「002修正、完了」

ここは小惑星帯だ、小惑星帯と言っても、映画みたいに、所狭しと小惑星が並んでいるわけじゃない。間隔は地球と月の間よりもずっと広い。だが、このスピードだと、それも一瞬だから、注意しないと小惑星に激突して、あつという間にゲームオーバーだ。とりあえず、ケイのナビゲーションで衝突は回避できる。

「後方注意！敵前哨基地」

サムの声。なんだ、もしかして今の小惑星の裏側に……。俺は、急いで回避行動に入る。俺たちの脇をフェイザーの青白い光がすり抜けていく、危ないところだ。シールドは前方に展開しているから、後ろからやられたらひとたまりもない。

「ジョージ、シールドを全体に広げてくれ」

「了解、でもパワーがちよっと不足気味だ。ヒットするとダメージを受けるかもしれないから注意してくれ」

「一発で落とされるよりはマシだ。たのむ」

敵は立て続けに撃ってくる。こっちはかわすので精一杯だ。この動きの中じゃ、こちらもフェイザーキャノンはロックできないだろう。

「美月、短距離ミサイルに攻撃座標をセットできないか」

「たぶん。でも、この火力だと迎撃されるわよ」

「かまわない、自律追尾でセットしといてくれ」

「わかったわ、短距離ミサイル、自律追尾にセット、ターゲット座標入力」

俺は、機体を急反転させると攻撃をかわしながら、小惑星の裏側へと回り込む。幸いにも裏側に砲台はないようだが、こちらも攻撃ができない。だが……。

「美月、カウント10でミサイルを撃て」

「了解、でもターゲットが見えないわよ」

「いいから、たのむ」

俺は小惑星の裏側を回り込んで、また表側に進路を向ける。そして敵の砲台が見える直前・・・  
カウントゼロ。

「今だ！」

「発射」

ミサイルが飛び出す、ミサイルはまだ目標にロックされていない。だが、自律追尾にセットされたミサイルは、ターゲットを自動的に捕捉する。俺たちの船より少し先に、ミサイルが小惑星の陰から飛び出し、標的をとらえた。ミサイルは進路を変え、敵の砲台に真横からヒット。



「やった」

「敵砲台及び前哨基地の破壊を確認」

「ケンジ、お見事。すごい作戦じゃないか」

これでターゲットは2つ破壊した。あと一つ。

「コース復旧、第二目標へ、080、275、射程到達予想は20秒」

「コースセット」

いきなり、またアラームだ。

「敵戦闘艇5機を確認。方位、030、358」

おいでなすった。今度はドッグファイトか……。

「敵戦闘艇、機種はSF1B2機、SF1A3機と推定」

相手は旧型だ。一対一では、こちらの性能が圧倒的だが、5機相手だとかなり大変だ。

「短距離センサー帯域にジャミング開始」

とサムの声。そうだった、この機種は電子戦機能も備えているんだ。このジャミングで敵は短距離ミサイルをロックできなくなる。だが、こちらのミサイルも同じだ。こうなると減速して接近戦しかなくなる。だが、5対1はちよつと分が悪い。そう考えている間に、敵の5機が散開しはじめる。攻撃態勢だ。まずい。せめて相手が2、3機ならば……。

「ケンジ、反転して引き離せ。スピードだったらこっちはずっと上だ」

たしかに、しかし、後ろを見せたら総攻撃を食らう可能性が高い。ならば……。俺は、コースそのままでフルスロットルに入れる。

「ケンジ、何してるのよ、反対……」

いや、この機のスピードなら……。

「美月、長距離ミサイルを敵の1番機から3番機にロックだ」

「長距離って・・・いいわ、ロック完了」

一気に加速した俺たちの機体は、あっという間に敵の戦艦艇の間をすり抜ける。そして一気に距離を広げた。俺はそのまま機体を後ろ向きに宙返りさせる。

「よし、撃て！」

「長距離ミサイル6番、7番、8番発射」

敵との距離は既に短距離ミサイルの射程を超えている。しかし、長距離ミサイルは十分に届く距離だ。しかも、長距離ミサイルのセンサーは短距離ジャミングの影響を受けない。ミサイルが敵の1番機から3番機を撃墜する。さて、あと2機。この体制で反転して攻撃に入ろう。

「敵、4番、5番反転。軌道から戦術を分析。加速が弱い。やり過ぎして反転攻撃する作戦」

敵の戦術や意図の分析もC&Iの仕事だが、分析が恐ろしく速い。しかし、この距離だとこちらも十分に加速できないから、さっきのように振り切るのは難しい。どうしたものか。考えている間に敵はどんどん近づいて、フェイザーを乱射してくる。まだ射程外だが、目くらましにはなる。

「ケンジ、そのまま、右側の奴に突っ込んで」

美月が叫ぶ。突っ込めってか？ 何をするつもりだ。いや考えてもしかたがない。ここは美月を信じるとしよう。

「ジョージ、シールドお願い」

「ほいな。防御シールドを前方に展開」

敵は明らかに戸惑っている。そりゃそうだ、いきなり相手が突っ込んできたわけだから。慌てて進路を変えようとするその脇をすれ違いざま、美月が側面にフェイザーを打ち込む。

「敵4番機、機関部破損、戦闘能力喪失」

「ケンジ、上昇反転よ」

「了解」

俺は、機首を思い切り上げて宙返りをかける。まあ、この上下という感覚は相対的なものが……。宙返りを終えたあたりで反転しつつある敵機が視野に入ってきた。

「サム、ジャミング解除を」

「了解、ジャミング解除」

サムが言うのとほぼ同時に美月が短距離ミサイルを2発発射。敵は慌てて逃げようとするが、もう遅い。ミサイルが敵機に吸い込まれる。

「敵5番機撃墜」

「美月、やるな」

「S F 1 Bは側面の防御が弱いつて聞いたことがあるのよ。ちょっと賭けだったけど」

さて、次は……

「目標、240、183」

「了解、コースセット」

「長距離ミサイル射程まで15秒」

今回もサムが敵の弱点をサーチして指示してくれる。

「ターゲットロック！」

「よし、長距離9番、10番発射、続いて11番発射」

美月が長距離ミサイルを発射。今回の目標はあっけなく破壊。防衛は戦闘艇に頼っていたのだろう。

「さて、これで3目標。ミッションは一応、成功だけど……」

「どうする？ いっちゃう？」

とケイ。

「どうせならコンプリートしようよ」

とジョージ。やはりこのチームは危険かもしれない。

「長距離ミサイルはあと一発しかないのよ。どうするつもり？」

「それは僕に任せてくれよ」

おいおい、ジョージ、何をする気だ？

「ジョージったら、またインチキするわけ？ 懲りないわね」

「インチキとはひどいな。本来SF2Aは長距離ミサイル20発を搭載出来るんだよ。なのに、このシミュレーションでは12発しか積んでいない。そっちのほうがインチキだよ」

どうやら、ジョージはシミュレータをハッキングしてミサイルを増やそうとしているようだ。まあ、これはゲームだから、裏技ってことにはなるんだが。

「よし、できた」

「驚いたわ。長距離ミサイル残数が9発になった」

「ついでに、ラスボス対策も入れといたから」

「え、ラスボス対策って？」

「それは後のお楽しみさ」

こいつら、楽しんでるな。いや、これはゲームだ。そうだ、俺も楽しめばいいじゃないか。

「皆さん、ちょっといいですか？」

とマリナが後ろの席から声をかけてくる。

「ちょっと皆さん、ストレスのレベルが上がってきてるので、あまり無理はしないほうがいいですよ。集中力が10%ほど低下してきてますから」

「大丈夫だよ。マリナ」

「そうそう、マリナちゃん、心配性なんだから」

おいおい、メディカルの忠告は無視しちゃいかんだろ、お前ら。

「わかった。それじゃ、続行するが、マリナがこれ以上無理だと判断したら撤収するぞ。いいかな」

「ほーい、了解。さて、お次の目標は？」

「探索中・・・弱いけど、それらしい反応を確認。方位、165、090、距離1800万Km」

「標準速度で1分ってとこかな」

「コースセット、いくぞ」

俺たちは、戦闘を、というかこのゲームを続行することにした。だが、ここから先はたぶん、一気にレベルが上がる。ゲームオーバーにならなきゃいいんだがな。

「敵、補給基地を確認。周囲にフェイザー砲台3基、短距離ミサイルランチャー3基」

「敵射程まで25秒」

敵の武器は短距離のみ、しかし長距離ミサイルを撃っても迎撃される可能性が高い。まずは敵の防御力を削がないといけない。

「よし、突っ込むぞ。減速して攻撃態勢。前方のシールドを強化してくれ。美月は、フェイザーでミサイルランチャーを破壊しろ」

「了解、防御シールドを前方に展開、出力100%」

「フェイザー、敵ミサイルランチャーにロック」

「敵、短距離ミサイル発射確認」

「このままいくと射程に飛び込んでじゃうよ！」

「ジャミングできるか？」

「短距離レンジでジャミング開始」

「回避行動」

ジャミングが効いてくれば、ミサイルはこちらの回避行動に追従できないはずだ。だが、なぜかミサイルが追従してくる。

「なんで、ジャミングが効かないのよ」

「くそっ、自律型だ。逃げ切れるか・・・」

俺は急旋回でミサイルを一旦かわしたが、ミサイルはまた方向を変えて俺たちを追いかけてくる。こうなればチキンレースだ……。

「美月、フェイザーはロックしてるな。射程に入ったらすぐに、ミサイルランチャーを撃つてくれ。これで前から狙われたらアウトだ」

「わかったわ。任せて！」

「ケンジ、敵のフェイザーにあまり近づくとシールドが持たないぞ」

「わかった。美月、短距離ミサイルを砲台にたたき込め。迎撃されてもかまわないから」

そうだ、しばらくでも敵の砲台がミサイルに対応してくれば、その間に……

「了解。短距離ミサイル照準、敵フェイザー砲台3基、発射！」

短距離ミサイルが連続して数発、敵の砲台に向けて飛び出す。

「射程に入った。フェイザー斉射」

美月のフェイザー斉射で敵のミサイルランチャーが吹き飛ぶ。しかし、俺たちはまだおしりに火が付いた状態だ。ミサイルは少しずつ距離を詰めてくる。もう敵基地のある小惑星は目前。

「ケンジ、衝突しちゃうよ！」

「まだまだ……もう少し……」

そう、これはチキンレースだ。俺は、敵基地目前で一気に機体を旋回させる。これは、このSF2Aじゃなきや出来ない荒技だ。思った通り、敵のミサイルは、追尾できず、そのまま敵基地に突っ込む。

「よしー！」

「すごい、やっちゃったよー」

「敵補給基地、破壊を確認」

これで4つ。残る敵基地はあと一つだけ。しかも、長距離ミサイルはまだ9発も残っている。だが、最後の奴は相当難敵に違いない。

「最終目標を確認、方位210、120、距離120キロ」

「了解、コースセット。攻撃態勢だ」

敵は目と鼻の先。こうなれば、突っ込んで派手に暴れてやろう。そう思った直後だった。

パチッ！、と音がして、一瞬目の前が光った感じがした。次の瞬間、サラウンドモードが途切れて、薄暗いコックピットに俺たちは連れ戻されていた。



「何が起きた？」

「セーフモードに落ちたな」

「故障かな？」

「ちよつと待ってくれ、システムに何か電磁的な負荷がかかったみたいだ」

「まさか、磁気嵐？ 木星磁気圏からはまだ遠いの？ シールドは？」

「EMP機雷・・・」

サムがつぶやくように言う。EMPつまり電磁的な衝撃波を生み出す機雷が敷設されていたということのようだ。こいつは、近くで食らうと最強レベルの磁気嵐以上のダメージがある。おまけに、船の磁気シールドを中和するような位相で磁気パルスを発生させるので、シールドも無効にされてしまう。そう、1年前のシャトル事故の時と同じように、本来ならば、俺たちはインターフェイスのオーバードに陥っているはずだが、これはシミュレーションなので、そこまでの影響はない。

「ひゃあ、本物だったら死んでたかもね」

「だな。あの時と一緒にだ」

「例のシャトル事故の時もこんな感じだったの？」

「そうよ、あの時は本当に死ぬかと思ったわよ」

「でも、ゲームオーバーにならないところを見ると、命は助かったみたいだな」

「あの、皆さん。今、私と美月さん以外はみんな気絶してる状態なんですけど」

とマリナが悲しそうな声を出す。どうやらシミュレーションのVMI上では、そういうことになっているらしい。たしかに、俺もシステムへのインターフェイスを拒否されているようだ。美月のDIユニットは安全重視の特別製。例の事故の時も、そのおかげで助かったのだが、シミュレータはそのことをきちんと認識しているようである。

「だめだ、こりゃ。復旧作業もできないや」

ジョージがつぶやく。

「ちよつと待ってください。順次、ケアしますから」



そうだ、ここはメデイカルの出番である。本来なら俺たちは気絶してるのだから、おとなしくしておこう。だが、あまりゆっくりは出来なさそうである。EMP機雷の爆発で、おそろく敵はこちらの位置をつかんでいる。いつ攻撃が来ても不思議じゃない。

「マリナ、ジョージを優先してちょうだい。システム復旧が先よ」

「わかりました」

そうだ、パイロットは美月がいる。ジョージが動けるようになれば、とりあえず行動は起こせる。シミュレータでは実際に治療を行う訳ではないが、VMIから得た情報で、治療手段を検索し、指示を出せばいい。それが正しければ、治療対象は行動可能になるだろう。

「ジョージ君、ちょっとシステムに繋いでみてください」

「了解・・・、うん大丈夫みたいだ。急いで、システムを再起動しないとイケないな」

「ジョージ、急いで、ミサイルが来る。火器管制を先に復旧して！」

「うん、今やってる」

おいでなすった。早速、敵基地から長距離ミサイルを撃ってきた。美月はそれを打ち落とすつもりらしい。機関やフライトシステムの復旧には時間がかかるから、それは正しい判断だろう。こういう時に美月が残っていると、使える情報量が多い分、有利ではある。もちろん、美月がそれを使いこなせての話だが、システムが全復旧すると、ちょっときついかもしれない。それまでに俺が戻れていれば、なんとかなるんだが。マリナの判断はどうだろう。気絶中の俺が口を出すのは反則だから、ここはマリナの判断に任せるしかないのだが。

「よし、火器管制と長距離、短距離センサーを復旧。引き続き、エンジンとフライトシステムを再起動するぞ」

「了解、フェイザーを敵ミサイルにロック、迎撃開始」

間一髪、間に合ったようだが、どんどん飛んでくるミサイルを一発でも打ち漏らしたらおしまいだ。美月の腕を信じるしかないが。とりあえず、美月は今のところ、手際よくミサイルを打ち落としてはいるが・・・。

「ケンジ君、どうですか？」

と、マリナ。やっぱり彼女は、そのあたりを心得ていてくれたようだ。俺のインターフェイ

スも復旧している。

「OK、戻った。俺も大丈夫だ。操縦系統をチェックする」

「ケンジ、フライトシステムはかなり損傷を受けてる。各部のサブコンピュータがいくつかわられてるけど、バックアップシステムでなんとかなりそうだ。エンジン起動にもう少しかかるから、先にフライトコンピュータを見てくれるかな」

「了解、フライトコンピュータ自己診断シーケンスを開始」

「ケンジ、そろそろヤバイわよ。ここから動かないと袋たたきにされそう」

しかし、相手は長距離ミサイルを撃ち尽くすつもりだろうか、立て続けに撃ってくる。このままだと美月の集中力も限界だ。それに・・・フライトコンピュータにもちよつとエラーが出ている。

「ジョージ、フライトコンピュータも、ちよつとまずそうだ」

「ちよつと待ってくれ、今チェックしてる・・・。まずいな、プログラムが一部消えてる。

再起動してバックアップをロードしないとイケない」

「やってくれ、エンジンはどうだ」

「エンジンはもうすぐ起動できそうだ」

「わかった、しばらくマニュアルで飛ばすから、その間になんとかしてくれ、たのむ」

またしても、初物でマニュアル操縦。だがまあ、今回は大気圏に突っ込む心配がないからいいのだが、それでも姿勢の制御が格段に難しくなるのは確かである。だが、ここにとどまっていれば、狙い撃ちだから、いたしかたない。

「よし、エンジン始動。マニュアルで行くぞ」

俺は、スロットルをぐつと押し込みながらスティックをひねる。そのとたんに機体がスピニングながら予想もしなかった方向に飛び始めた。

「ケンジ、何やってんのよ。照準が合わないじゃないの」

「うわ、酔いそうだ」

美月とジョージが叫ぶ。最悪だ。姿勢制御がここまで難しいとは・・・。確かに、TS5の時とはスピードは段違いなんだが。幸いにも、この挙動にはミサイルも追従できないようで、

撃ち漏らしたミサイルも外れてくれたようだが、このままじゃどこに飛んでいくか分からない。なんとか体勢を立て直さないと、どこかの小惑星に突っ込みそうだ。

「すまん、ちょっと待ってくれ・・・」

そう、スティックだけじゃなく、各部のスラスタ―制御もやらなくちゃいけない。重力エンジンの引つ張る方向は機体から見て前方だが、機体がスピンのすると、軌道がめちゃくちゃになる。

「ケンジ、一度スティックを中立にしてから、スラスタ―で姿勢を整えるんだ」

ジョージが叫ぶ。俺は言われた通りに操縦スティックから一旦手を離し、それからスラスタ―で姿勢をまっすぐにする。

「よし、それでゆっくりとスティックを動かして、コースを変えて見てくれ」

俺は言われたようにやってみる。今度はスピンすること無くコースが変化する。しかし、機体の挙動が落ち着くと同時に、またミサイルに追いかけることになるのだが。俺は機体が暴れないように、慎重にスティックを動かしながら、ランダムにコースを変えて、どうにかミサイルを回避する。だが、これじゃ、きりが無い。

「ケンジ、これなら照準が合わせられるわ。敵の基地に向かって！」

美月が叫ぶ。

「了解、頼むぞ」

「方位、076, 113に！」

お、ケイも復活したようだ。俺は指示された方向に機種を向ける。心なしか、機体の反応が良くなっている気がする。前からは、ミサイルがどんどん飛んでくるが、美月が片っ端から破壊していく。だが、この集中力が途切れた時が怖い。

「ケンジ、直線じゃ無くて少しジグザグに飛んで見てくれ」

ジョージが言う。俺は美月の照準が外れない程度にジグザグ航行を試みる。なんだか進路を変えるごとに、機体の反応が良くなっていく気がする。

「よし、ケンジ、そろそろ好きにコースを変えていいよ。スティックがきちんと反応するようになってるだろ?」

「ああ。でも、これって……」

「機体がケンジの操作を学習したのさ。言っただろ、各部の制御をやっているサブコンピュータが自律系を作れるって」

「そうか、これが……」

もう、機体はフライトコンピュータのアシストがあったときとそれほど変わらない挙動をしてくれるようになってる。まだちょっと操作がピーキーだが、それは問題じゃない。

「よし、ターゲットに突っ込んでやっつけるぞ」

「待って。前方にまた複数の機雷。コース変更002、001」

「了解」

サムがいいタイミングで復活してくれたので、さっきの二の舞は避けられた。危ないところだ。

「目標を解析。破壊には3ヶ所への同時攻撃が必要。各2発ずつのミサイルヒットが必要」

最後だけに難易度が高い。しかも単純に長距離ミサイル6発を使うことになる。予備は各1発しかない。敵の火力からして、相当数の迎撃ミサイルも持っているだろう。それを全部打ち落とさないと、ターゲットは破壊できない。

「美月、長距離ミサイルを2発ずつ、ターゲットにロックしろ」

「了解。ロックしたわ。いつでも発射できる」

「よし、カウント3で全部発射だ」

俺はスティック握りしめるとスロットルを押し込む。

「今だ、発射しろ!」

「了解。ミサイル11番から17番まで発射」

立て続けにミサイルが6発飛び出していく。俺は、速度を上げてミサイルを追う。こんな芸当もこの機体でしかできない。俺はミサイルの後方から少し外れた位置に機体をつける。ここなら飛んでくる迎撃ミサイルを狙い撃ちできる。

「敵、迎撃ミサイル多数」

「美月、全部打ち落とせ」

「全部って、あんたね。でも、やるしかなさそうね」

美月はフェイザー連射で近づいてくる迎撃ミサイルを全部打ち落とすとしていく。

「距離、40万キロ」

「よし、このまま突っ込むぞ」

「そろそろ敵のフェイザーの射程圏内に入るわ」

そりゃ、やばい。フェイザーはミサイルじゃ迎撃できない。

「美月、短距離ミサイルは？」

「あと3発しかない」

3発か、これじゃ足りないのは明らかだ。どうする……。この船だって、シールドがまだ不完全だ。狙われたら危ない。

「よし、システム復旧できたぞ。フライトコンピュータ接続、防御シールド、前方に集中、最大出力」

ぎりぎり、間に合った。だが……

「サラウンドに変えるか？」

「たのむー！」

視界がまたサラウンドビューに変わる。これで一気に視界が良くなった。よし……。俺は、機体を加速して飛んでいくミサイルの前に押し出す。ミサイルの先を飛ぶなんて芸当はだれもやったことはあるまい。フェイザー相手ならこいつのシールドでぎりぎりまで防げる。またも

やチキンレースだが、フェイザーにシールドを破られる直前に短距離ミサイルを撃ち込んで離脱できれば……。

「ケンジ、どうするつもりよ！」

「ぎりぎりまで、こいつのシールドでミサイルを守る。シールドを破られる直前に離脱するから、その時に残った短距離ミサイルを撃ち込んでくれ」

「わかった」

敵のフェイザーがシールドに当たってはじける。だんだん攻撃が激しくなって、シールドが負荷にあえぎ始めた。サ라운드ビューの視界が少し揺らぎ始めている。

「ケンジ、そろそろ限界だ」

「よし、カウント3で離脱。3，2，1，今だ！」

俺は、ステイックを思い切りひねる。ほぼ同時に美月が短距離ミサイルを発射。かなりきわどい……。機体ははじかれたようにコースを変え、ミサイルが敵に向かう。敵は、それを迎撃するが、その直後から追いかけてきた長距離ミサイルが着弾。

「ミサイル全弾着弾。目標破壊を確認！」

「やった」

「すごい、コンプリートじゃん」

「すごいな、やれば出来るもんだね。機雷を食らったときは、正直ダメかと思ったけど」

「さて、とりあえず戻りますか」

「基地に帰投する。オートパイロットスタンバイ。ケイ、座標入力たのむ」

「了解、火星ステーションの座標セット、オートパイロットに移行」

ミッション完了だ。これで、ターゲットを全部破壊したのは俺たちが最初に違いない。機内はちよつとお祭りムードになっている。

「なんか、おなか空いてきたよ。終わったら、メシいこ、メシ」

「そうですね、私もちよつと気疲れしました。あまりお役にたてませんでした」

「いや、マリナがうまく処置してくれなかったら、最後のターゲット前で終わってたよ」

「全員の力だね。やっぱ、このチームはパワーがすごいな」

「美月も、すごかったな。ヒット率90%越えてるじゃないか」

「実力よ、実力」

「・・・何か、来る・・・」

「え、？」

サムの一言。そして、次の瞬間、全員が固まった。

「何よ、あれ」

「なんだか、やたらデカくないか？」

サムが画像を拡大する。それは・・・！！

「じゅ、巡航艦！？」

全員が声を揃える。

「これって、まだ終わってなかったってこと？」

「えー、ターゲットは5つだったわよね」

「ちょっと待ってくれよ・・・、やっぱり延長戦があったのか」

「延長戦。しかも、巡航艦相手に戦えてるか？」

「ムリムリ、そんなの。勝てっこないよ！」

「冗談でしょ」

そんな会話をしている間に、巡航艦はどんどん近づいてくる。艦載機も、うようよ出てきた。しかも、こつちと同じS F 2 Aだ。こりゃ、艦載機だけでも勝ち目がない。

「さて、と。対策しといて正解だったかな」

とジョージ。

「対策？」

「言っただろ、ラスボス対策しておいたって」

「ラスボス、じゃこれが？」

「そう。無敵のラスボス。普通じゃ絶対に勝てない・・・。だけど・・・」

ジョージはいいたい、どんな方法でこいつに勝とうというのだろう。

「それは・・・反則」

「だってき、こんなのが出てくること自体が反則じゃないか。こつちも楽しませてもらわな  
いよな」

サムはもう手の内を知っているようだが、いったい何を・・・。

「残った長距離ミサイルの18番、19番を自動点火にして発射してくれないかな」

「でも、即迎撃されちゃうわよ」

「いいから、撃ってみて」

「わかったわ、長距離18番、19番、自動点火にセット、目標、敵巡航艦。発射！」

ミサイルが敵に向かって飛んでいく。

「一度セーフモードに落とすよ」

「え？」

と言う間もなく、ジョージはシステムをセーフモードにしてしまう。また、暗いコックピットが戻ってきた。

「どうする気だ、これじゃ狙い撃ちだぞ」

「大丈夫だよ。3, 2, 1」

巡航艦の手前で爆発。モニターの視界にざっとノイズが入る。

「え、何よ、これ」

「OK、システム再起動」

また、サラウンドビューが戻ってくる。驚いた、敵の巡航艦の周りの艦載機が全部浮遊して機能停止してるじゃないか。

「EMPなの？これ」

「そう、さっきのお返しさ」



「でも、あと一発しかないけど、全部は無理なんじゃ」

「いいから、撃ってみてよ。あ、それから撃ったら全速離脱ね」

え、そんなヤバい代物なのか、最後の一発。

「じゃ、撃つわよ。目標ロック、20番、発射」

「全速で離脱！」

ミサイルと巡航艦があつという間に遠ざかる。そして、一瞬の後にまばゆい閃光が・・・。

「これ、まさか・・・」

「そう。反中性子弾頭」

「えー、そんなものどうやって積んだのよ」

「だから反則」

そりゃ、反物質弾頭の中でも最も強力な反中性子弾頭をまともに食らったら、巡航艦隊だって、ひとたまりもない。たしかに反則な裏技だ。でもまあ、これで本当にコンプリートだ。

「とりあえず、帰投コースをセットするよ」

オートパイロットに切り替えてから、俺たちは全員でハイタッチする。なんだか今日結成したばかりのチームだなんて事も、すっかり忘れてしまっていた俺たちだった。本当に、これは最高のチームだ。

さて、ミッション完了のご褒美は何だろうか、などと考えていたその時だった。いきなりアラーム音が・・・。

「え、なにになに？」

「何よ、もう終わりじゃないの？」

「あ、やばい・・・」

「油断大敵・・・」

次の瞬間、目の前に大きな小惑星が出現、あつという間に衝突だ。目の前に、大きくGAM  
E OVERの文字。

「何が起きたんでしよう」

「ゲームオーバーかよ、いったい何なんだ、これは」

なんか理不尽な結末だ。スクリーンに最初に出てきたスペースガードの士官らしい男が映し出される。

「君たちは、勇敢に戦い、我々を勝利へと導いた。君たちの名は永遠に刻まれるだろう。我々は君たちを忘れない。どうか安らかに眠って欲しい」

吊いのメッセージかよ。

「そんなの反則よ！」

「いや、まあ先に反則やったのはこっちだからな」

「反則には反則？」

「いやあ、やられちゃったな」

「自業自得」

そんな感じで、どうやらゲームオーバーらしい。でもまあ、とりあえず十分楽しんだから、よしとしよう。まあ、このチームのいい点と悪い点は、これではつきりしたわけだ。調子に乗ったらどこまでも行けるけど、調子に乗りすぎて油断してしまうのが難点だ。

「ま、これが実機だったら、全員死んでるからな。気をつけようぜ」

「ケンジ、何を悟ったみたいなのよ。もつと悔しがりなさいよね」

「ま、全員死亡はリーダーの責任だしね。反省の弁は必要だよ。うんうん」

「おい、俺の責任なのか？」

「まあまあ、そのほうが丸く収まるじゃないか」

「同意」

なんか理不尽だ。

「でも、残念ですよ。頑張ったのに」

マリナはやっぱり優しい。彼女がいてくれれば、俺は頑張れるかもしれない。とりあえず、俺たちはゲームセンターを出て街を歩き始める。

「おなかすいたよー、何か食べに行こうよ」

ケイが言う。たしかに、ちよつとエネルギーを使ったかもしれない。でも、俺はもう帰って寝たい気分なのだが……。それに晩飯にはまだちよつと早い。とりあえず、俺たちは、また元のカフェに戻ることにした。

「でもさ、このチームって、楽しそうだよね」

と、ケイ。

「うん、なんか、すごく、しっくりくるっていうか、いきなりあそこまで行くとは僕も想像できなかったな」

ジョージもこのチームが気に入ったみたいだ。

「でも、ちよつと不思議な感じがします。なんだか頭がすごく冴えていた気がするんですよ」  
「わかる、それ。なんか先がずつと見通せる感じ？」

「みんな同じだったのか。俺もそうだ。というか、去年の事故の時と同じか、それ以上だな。美月はどうだった？」

「あたしも同じ。去年の時よりも、自分の情報処理能力が上がった気がする」  
「興味深いチーム。使える情報が多くて楽しい」

なるほど、全員、普段とは違う何かを感じていたらしい。サムじゃないが、これは興味深いかもしれない。

「でも、最後に悔しいよね。普通、オートパイロット中でも、障害物は回避行動ができるくらい余裕で発見できるよね」

「いきなり現れた、というのが正しい」

「そう、僕も思っていたんだけど、なんとなく外部から介入されたような気がするんだよね」

「反則技使ったから？」

「反則とか言わないで欲しいな。でも、介入されたとしたら、ゲーセンの中からじゃ無いかもしれない」

「それじゃ、いったい誰が？」

「おお、天才ハッカー、ジョージ君の上前をハネるような奴がいる？」

「外部回線経由の通信」

「あのシステムって、どこかに繋がってるんだっけ？」

「ああ、あのシミュレータのプログラムはアカデミーから提供されてるんだ。本物のシミュレータのパラメータをいくつか変えて、操作しやすくしているのと、データはアカデミーのセンターコンピュータのデータバンクから定期的に更新されるんだ」

「じゃ、アカデミーに繋がってるのか？」

「そう。だから、何かできるとすれば、アカデミーの誰かということになるね」

「でも、どうしてアカデミーがそこまでゲーセンに肩入れするわけ？」

「戦術データの収集」

「そうなんだ。今の宇宙艇のシステム、特にペガサスみたいな最新機種は、自律制御ネットワークの調整に実際の操作データが大量に必要なんだ。システムは、実際に行われた操作を整理して、戦術として再構成する。これは、センターコンピュータの仕事だけど、そこで作られた戦術テンプレートは船の戦術コンピュータにダウンロードされて、そこから各部の自律制御系にも送られるんだ。最近じゃ実戦はそれほど多くないし、どうしても実戦だとリスクーな戦術は取りにくい。その点、ゲームは気楽だから好き勝手できるだろ。奇想天外な戦術や、追い詰められた時にしか考えられない戦術を収集するにはいい環境なのさ。実際、これ遊ぶのはアカデミーの学生も多いからね」

「ねえ、ジョージってどうしてそんなに詳しいわけ？」

「あはは、実はそのデータをちよつと拝借しようと思って調べたんだ。うまく行きかけたんだけど、ダウンロードする直前に見つかっちゃってね」

「そっか、それで謹慎3日ってわけね」

「だから、それは言わない！」

「じゃ、今回の俺たちのデータもペガサスⅡのシステムに反映されるのか？」

「まあ、それはセンターコンピュータが有効だと判断したら、って話だけどね」

「ま、でも反則技は実際には使えないよね」

「そうとは限らない。宇宙艇一機で巡航艦に対応する状況は貴重」

「でも、あれは実戦だったら、ほとんど自殺ミッションだろ」

「だから貴重なのさ。実際にそんなシチュになったら、EMPと反物質弾頭の組み合わせは有効だと思うよ」

「あんな物騒なものは、そんなに都合よく配備されてないだろ」

「まあね。でも、最悪は船の反物質リアクターの燃料カートリッジを使うって手もある。まあ、それで失敗したらもう後が無いけど」

「そんな状況には陥りたくないわね」

「そうですね。平和な宇宙が一番です」

そんな会話をしながら、俺たちは少し時間をつぶして、その日は解散した。



さて、その翌日から授業が始まることになったわけだが、基礎過程2年は週の後半2日が実習にあてられる。2年からは基本的に実機を使うのだが、最初の数回の授業はチームの連携を確認するために、シミュレータを使う。俺たちのチームは、もう連携確認済みだったが、それは最新型のSF2Aでの話。実習で使うST1B、これはSF1B型宇宙艇の武装をダミーにした練習機なのだが、システムが旧式で、先に最新型に慣れてしまった俺たちには、ちよつと手強い相手だった。おまけに担当教師は、あの入学式当日に小言を食らったコワモテである。さんざんシゴかれたのは言うまでも無い。まあ、おかげで・・・と言うべきか、3回目くらいでは、そこそこうまくやれるようになってきたわけだが、システムの処理能力があまりないため、時々情報氾濫による混乱に悩まされていた。ジョージが苦勞してシステムを調整してくれているおかげで、どうにか俺たちはシミュレータ訓練のステージを終わらせることができたのだ。そして、実機訓練の初日がやってきた。

実習、とりわけ実機訓練の集合時間は早い。まず、朝7時に格納庫に集合して機体の点検、それからブリーフィング、そして実習開始だ。俺も含めてだが、うちのチームは朝にあまり強くない。というより、約一名、とても心配な奴がいるわけで・・・。そして、実機初日から、その不安は的中することになる。

「おっはよく、みんな早いねえ。ぎりぎりは私だけかあ」

と、集合時間3分前にケイが現れる。ここまでは、許容範囲だ、だが、問題は・・・。

「あれ、あいつまだ来てないの?」

「ああ、不安の中だ」

「あっちゃあ、ヤバくない? それ」

「分かり切ったこと言わないでよね。最悪よ!」

「ジョージ君、どうしたんでしょうね。さすがに今日は遅れたらちよつと・・・」

「またゲームで夜更かしじゃないの?懲りない奴よね」

「あ、でも、昨日の夜は、いつもの所にはいなかったよ、あいつ。いたら絶対、一緒に落ちさせたんだけど」

「じゃ、単なる寝坊かよ。何考えてんだ、あいつ」

というような会話をしている間に集合時間になってしまった。まずい、これは本当にまずいぞ。

「よし、全員いるな。各チームの機体割り当ては、一覧を流してある。それぞれ自分たちの機体の点検にかかれ」

例のコワモテ教師の声だ。まずい・・・、とりあえずバレないように取り繕えないものか。

「うちの機体は205か、とりあえず、何かしておかないとマズいよな」

「でも、ジョージがいないと、システムチェックができないよ。あいつのインターフェイスがないとメインコンピュータにアクセスできないし」

「とりあえず、ここについて見つかるalmazい。とりあえず乗船してから、ジョージに連絡してみよう」

「そうね。また吊し上げられるのは、ご免だわ」

俺たちは、出来るだけ目立たないように、そーっと機体に向かう。だが、205と書かれた機体の前にいたのは、コワモテ教師だったりするわけで。

「お前ら、今日から実機だ。気持ちを引き締めて行け！ ん、どうした？ エイブラムスはどこだ？」

まずい、早々に気づかれてしまった。ここはなんとか・・・。

「あ、すみません、ちょっとお腹の具合が悪いみたいで、トイレに行ってます」

などと適当にごまかしてみるのだが。

「なんだと、実機演習の前に腹をこわしただと？ 体調管理は基本中の基本だろうが。お前らもここにいろ。戻ってきたらちよつと気合いを入れてやる」

「あ、でも、先に出来ることがあれば、しておいたらどうでしょう」

なんとか、この教師の目を盗んでジョージに連絡しないとまずい。

「しかし、そもそも、エンジンアリング担当抜きで何が出来るんだ？」

「あ、その・・・」

「システムチェック程度なら出来ます」

と美月が横から割って入る。そうか、こいつは、そういうインターフェイスを山ほど持っているんだって。

「星野、お前はパイロットだろう。エンジンアリングのかわりができるのか？」

「システムにはアクセスできます。機長の許可があれば、自動チェックシーケンスの開始くらいはできるので、時間を節約できます」

「ふむ、よかろう。中井と星野は、乗り込んで、先にチェックを始めておけ」

「わかりました」

よし、とりあえずなんとかなりそうだ。俺は美月と二人で宇宙艇に乗り込んだ。とりあえず、これでジョージと連絡が取れる。

「ケンジ、システムチェックを始めるから、機長席からアクセス許可を出して」

「わかった、・・・よし、美月のIDでアクセス許可を出したぞ。後はたのむ。俺はジョージと連絡を取るから」

「わかったわ。システムアクセス許可を確認。システム起動。自動チェックシーケンス開始」

俺は、美月がチェックを走らせている間に、コミュニケーターを使ってジョージを呼び出す。

「ジョージか？ 今どこだ」

「悪い、やっと格納庫に着いたところだよ」

「まったく初日から何やってる。急げ。それから、お前は腹を壊してトイレってことになってるから、聞かれたらそう言えよ。いいな」

「・・・」

「どうした？ わかったのか？」

「・・・」

どうしたんだろう、通話は切れていないが返事が無い。

「なるほど、そういうことか？」



と、いきなり後ろから太い声がした。

「なかなかのチームワークじゃないか、中井」

振り返ると、コワモテ教師。しかも、隣にジョージを連れてきている。手には、ジョージのものらしい、コミュニケーションターが……。こりや、万事窮すか。

「さあて、こうなれば全員同罪だが……。まずは、中井。リーダーのお前に申し開きの機会を与えてやろう。何か言うことはあるか？」

「あ、いえ、ありません。すみませんでした」

「素直でよろしい……と言いたいところだが、世の中はそれほど甘くない。そもそも、実機演習初日から遅刻する奴も奴だが、適当にごまかせば何とかなるなんて思っている奴らが一番気に食わん。そもそも、お前は……」

教師がそう言いかけた時、アラーム音。

「なんだ？」

「システムチェックでエラーが出ています。内容は……」

美月が答える。

「機制御系の自己診断エラーみたいですね。スタビライザーがうまく働いていないようです」

ジョージが付け加える。

「なんだと。まったく、お前らが、ろくでもないから機体にまで嫌われたか。この機体は整備行きだな。今日は実機なしだ。これから反省文でも書いて持つてこい」

「そんな……、代わりの機体はないんですか？」

「残念だが、今使える機体はこれしかない。あきらめろ。自業自得だ。さあ、降りた降りた」

俺たちは追い立てられるように外に出る。実機演習はお預けか。

「ごめん、僕のせいで・・・」

とジョージがすまなさそうに言う。

「いや、俺が下手な芝居を打とうなんて考えたのが悪かった。申し訳ない」

「ま、故障じゃ仕方ないよ。ジョージもこれに懲りたら、遅刻癖を治しなさいよね」

仕方が無い、これから教室にでも行って反省文でも書くしかないな。と思つて歩き始めた時だった。そこにフランクが現れた。

「どうした、何かあったのか？」

「いやな、こいつら実機初日から遅刻しやがった上に、それを適当にごまかそうとしたわけだ。おまけに機体も故障ときた。お前さんの生徒ときたら、どうしたものやらな」

「そうか、それは申し訳ないな。担任の責任で厳しく指導しておくから、こいつらは俺に任せてくれないか」

「よかろう。きっちり絞めといてくれ」

「わかった」

コワモテも苦手だが、担任教師のフランクに迷惑をかけてしまうのは申し訳ない。だが、これからどんなお説教が待っているのだろう。ちょっと気が重い。

「よし、それじゃ全員こっちに来い。これから罰として、ひと仕事してもらおうぞ」

「あれをやらせるのか？」

「そうだ。まあ、こいつらにはおあつらえ向きの仕事だがな」

なにやら物騒な会話である。フランクは俺たちに行ったい何をさせるつもりなんだろう。俺たちは、フランクについて、格納庫の奥に歩いて行く。なんとなく気が重いのだが・・・。

「ところで、どうして遅れたんだ、エイブラムス」

「すみません。ちょっと今日の準備をして遅くなってしまつて・・・」

「ほお、何を準備していたのかな？」

「このチームのプロファイルを反映させた情報フィルタプログラムを書いてたんです。S T 1 Bは処理能力が足りないんで、僕らのチームには少しきついんですよ」

「あれ、ゲームで夜更かしじゃなかったんだ」

「ひどいな、さすがに僕でも実機初日にハマったりはしないよ」

「そうか。その心がけは悪くないが、遅刻しちゃだめだろう」

「すみません。やり始めたらちよつと欲が出て、あれこれ手を入れていたらつい・・・」

そういうことだったのか。ジョージは俺たちのために、あれこれ頑張ってくれていたんだな。

「ところで、先生、俺たち何をすれば・・・」

「ちよつと、君たちには、罰として実験台になってもらう」

フランクが笑いながら言う。

「実験台？　ちよつと不気味な響きがするんですけど・・・」

「まあ、見れば分かるさ・・・、ほらそこだ」

フランクが指さした方向には、銀色の宇宙艇。機体には子馬のマークが入っている。

「これって・・・」

「ペガサスⅡじゃないですか！」

「そう、いや、正確にはS T 2 A、つまりペガサスⅡの同型練習機だ。愛称はポニーⅡというんだが。最近できたばかりのプロトタイプさ」

「練習機だから、ポニー（子馬）ですか？」

「まあ、そんなところだ。で、これからこいつの試験をするんだが、君たちにはそれを手伝ってもらう」

「マジ・・・ですか？」

「不満か？」

「と、とんでもない。やります」

なんと、実験台ってのは、こいつのテスト飛行につきあえということだったのか。罰どころか、願ってもないチャンスだ。どうやら、例のコワモテもグルだったらしい。しかし、どうして俺たちなんだ？

「でも、これアカデミー専門課程の訓練用ですよ。そのテストに私たちなんかでいいんでしょうか？」

とマリナがちょっと不安そうに言う。

「残念ながら、専門課程の学生で、これを動かせる奴がいないのさ。まだ、シミュレータもテスト段階でね」

「って、それは私たちも同じ・・・ですよね」

「何を言ってるんだ。君たちは、もうこの機種の、というより、こいつの親分でシミュレーションしてるじゃないか」

「え？」

「いやあ、正直言うと、あのシナリオをクリア出来る奴らがいるとは思わなかったんだがね」

それって、まさかあのゲーセンの？

「もしかして、僕らがゲーセンでやったシミュレーションのことですか？ やけにリアルなシミュレーションだなと思ったんですけど」

と、ジョージが先に切り出す。

「君は知ってるよな。あのデータがアカデミーから提供されていることは。そしてその目的も」

「はい、・・・って言っているのかな・・・」

「君らがやったシナリオは、実際の訓練用のプロトタイプをゲーム用に少し手直したものだ。しかし、君は私が入れておいた制限を全部外したばかりか、とんでもない武装強化までやってくれたわけだが」

「じゃ、あの最後のは？」

「ああ、あれは私からのプレゼントだ。君らがあまりに楽しそうだったんでね」

なんてこった。あれは全部アカデミーに筒抜けだったのか。それに、最後の小惑星もフランスの仕業だったとは。

「まあ、このことは他の生徒には内緒にしておいてくれ。変に意識されると、データに偏りが出てしまうからな」

「でも、実機初日にこれに乗れるんだ。夢みたいだね」

「これなら処理能力も問題ない」

「ほんと、すごいです」

「あ、あんたたち。浮かれてるんじゃないわよ。シミュレーションと実機じゃぜんぜん違うんだからねっ！」

そう言う美月もずいぶん嬉しそうじゃないか。

「うむ、星野が言うとおりで。訓練は基本動作からじっくりやるからな。当分アクロバットは禁止だ。もちろん、システムの書き換えも禁止だぞ、いいな」

ジョージが苦笑いしている。こいつはまた何か企んでいたようだ。

「よし、それじゃ乗り込んでシステムチェックからだ。手順は分かってるな。ブリーフィングはその後、機内でやろう」

「わかりました」

なんだか、夢みたいだ。練習機とはいえ、これは最新鋭機。それを俺たちが実際に飛ばせるなんて。たぶん、みんな同じ気持ちだろう。顔を見ていれば分かる。

「なにボートしてるのよ！ 行くわよ」

「あ、ああ」



美月に促されて俺たちはピカピカの機体に乗る込む。ハッチから機関室を通ってコックピットに入る。本当にピカピカで、チリひとつない新品だ。まだかすかに塗料の臭いもする。

「すごい・・・本物だよ、どうしよう」

ケイが嬉しそうに言う。コックピット内の配置はシミュレータとほぼ同じだ。唯一違うのは指導教官が座る教官席があること。教官はこの席で機体の全状況をモニターできるのと同時に、必要があれば、すべての操作に介入できる。

「よし、全員配置についてくれ、システムチェックを始めるぞ」

フランクが指示を出す。俺たちは、自分の持ち場についてチェックの準備を始める。

「よし、中井、リーダーのお前がチェック全体を指揮しろ。私はここで見てるからな」

おいおい、いきなり放置ですか？　かなり無茶振りだが、まあ、俺たちは同じ事をシミュレータでやっているし、フランクはそれを知っているのだから、しかたがない。

「了解、それじゃシステムチェックを始める。ジョージ、メインシステムの起動とチェックをたのむ」

「了解。システム起動、自動チェックシーケンスを開始・・・OK、異常なし」

「各部、接続チェック、続けてシステムチェックを行う。機長席、システム接続・・・OK、操縦系統異常なし」

「副操縦士席、接続チェック・・・OK、操縦系統、火器管制システム、異常なし」

「ナビゲータ席、接続チェック・・・OK、ナビゲーションシステム、異常なし」

「C&I席、接続チェック・・・OK、通信システム、各センサー、情報処理系、異常なし」

「メデイカル席、接続チェック・・・OK、各自、VMI接続許可を確認。メデイカルモニタ・・・異常なし」

「エンジンアリング席、全システム異常なしを確認。情報共有チェックに入る・・・とその前に、先生、ちょっといいですか？」

とジョージが突然言い出す。

「なんだ？」

「実は、この機種の情報フィルタプログラムも用意してあるんですが、入れちゃダメですか？」

「ほお、準備がいいな。この機体に乗ることが判ったみたいじゃないか」

フランクが笑って言う。

「いえ、もともとゲーセン用なんですけど、実機でも使えるように手を入れてみたんです。まさか本当に乗れるとは思ってませんでした。実はそれをやっついて遅刻してしまっ……」

「そうか、なら使わないと遅れた申し開きができないな。よし、やってみろ」

「ありがとうございます」

ジョージはそんなことまでやってたのか。驚いた奴だ。まあ、興味半分、趣味半分なのはわかっているが、このチームには、本当に貴重な存在だ。

「ねえ、バグってたりしてないよねえ？」

とケイ。

「大丈夫、だと思っ……」

「その、だと思っ……のがちよつと危険っぽいけど、ま、いいか」

「じゃ、チェックシーケンスを再開するよ。フィルタプログラムを導入。動作チェック…… OK。それじゃ各自情報共有モードに移行してくれ」

俺の目の前に、綺麗に整理された情報、操作パネルが現れる。このまえのシミュレータの時とほぼ同じだが、さらにいくつかのサブパネルが追加されている。これなら、情報共有したあとで、いちいち再整理をやらなくてすむから、大助かりだ。

「こりやすごいな、ジョージ。ものすごく見通しが良くなってるよ」

「ちなみに、火器管制は機長席と副操縦士席で切り替えが出来るようにしてあるよ。訓練には必要だろ」

「驚いたわ。これを一晩で作ったわけ？」

「ナビゲーシヨンパネルもいい感じだよ。サンキュー、ジョージ」

「C&Iも完璧」

「メディカルモニタもすごく見やすいです」

「ふむ、なかなかよく出来てるじゃないか。システムを開発した連中に見せたら驚くな」

フランクも感心している様子だ。これはもう既に俺たち専用のカスタムメイドと言ってもいいだろう。

「よし、問題なさそうだな。それじゃ、これからブリーフィングを開始する。まず、今日の訓練についての概要だが・・・」

俺たちの目の前に、大きな立体作戦図が表示される。L2周辺のマップに船の航路図を重ねたものだ。

「まずは、基本的な離着陸訓練からだ。最初は自動シーケンスでの操作に慣れてもらう。君たちには退屈かもしれないが、基本は重要だ。手順は、標準の自動離陸シーケンスから、管制の指示で着陸コースに入り、ステーションとのデータリンクを確立して制御を移行、自動着陸するという順序だ。細部の説明は不要だと思うが、質問はあるか？」

たしかに、退屈な訓練だ。オートパイロットをセットしたら、ほとんどすることはない。だが、こうした手順を間違いないこなせるようになるのが基本だからな。あのヘラクレス3の船長やデイクが言ってたとおり、基本からやり直そう。

「よし、特に質問がなければ始めるぞ。最初は、中井がパイロットをやってくれ。星野はバックアップだ。いいな」

「了解です」

「了解しました」

「それじゃ、始めよう。ステーションとの通信回線を開いてくれ」

「回線開きます」

「デッキ3コントロール、こちらコードネームP21、訓練飛行を開始する。指導教官はフランク・リービスだ」

「こちらデッキ3コントロール。P21訓練開始を了解。離陸は5番カタパルトへ。データリンクを確立してください」

「P21了解。よし、始めよう」



さあ、いよいよこいつを飛ばすぞ。

「ステーションとのデータリンクを確立。飛行計画のリクエストが来ています」

とサム。

「了解。飛行経路、座標入力・・・完了」

ケイが答える。

「入力座標確認。異常なし」

と美月。ナビゲータが飛行計画に従って投入した座標はパイロット二人が確認するのが決まりだ。

「機長席、同じく入力座標確認。異常なし」

「了解、飛行計画を送信・・・飛行計画承認を確認」

「デッキ3コントロール。こちらP21、5番カタパルトへのタクシー（移動）許可を要請」

「P21、5番カタパルトへのタクシーを許可する。タクシーシーケンスを開始せよ」

「P21、了解。係留を解除」

タクシーシーケンスを起動すると、機体は自動的に、決められた経路を通って、カタパルトまで移動する。まず、機体を格納庫につなぎ止めている人工重力が停止し、浮遊した機体を誘導路に沿って、弱い牽引ビームが引っ張ってくれるのである。我々は、それが正しく動作していることを監視しているだけだ。

「こちらP21、係留解除を確認、タクシーシーケンスは正常」

「P21、タクシー開始を確認。5番カタパルト離陸順位はナンバー3」

「こちらP21、ナンバー3了解」

訓練用カタパルトには、既に同級生たちのST1Bが並んでいる。俺たちは現在3番目で離陸待ちのようだ。この中で一機だけのST2Aはたぶん注目の的になっているはずだが、まさか乗っているのが俺たちとは、誰も思うまい

「よし、離陸前チェックをやるぞ。美月、たのむ」

「了解よ。チェックシーケンスを開始、ジョージ、そっちでもモニターしてて」

「OK、今のところ全システム問題なし」

「離陸前チェック完了。異常なし。ゴーよ！」

「了解。さあ、いつでも来い！」

カタパルトからは僚機がどんどん飛び出していく。複数あるカタパルトから同方向に離陸するので、少しずつ時間差をつける必要がある。なので離陸には多少待ち時間が余計にかかる。

「なんか、じれったいね」

「ほんと、さっさと飛ばせて欲しいわよね」

「こら、お前ら。訓練中は私語禁止だ。集中しろ」

と、フランクに叱られる。まったく、この二人はいまいち辛抱強さというものがない。そういう俺も、実は少しイライラは始めているのだが、ちよつと落ち着いたほうが良さそうだ。

「皆さん、ちよつと緊張気味みたいですね。少し肩の力を抜いた方がいいですよ」

マリナが後ろから声をかけてくる。さすが、うちのメデイカルはちよつと違う。確かに俺もちよつと力が入ってるかもしれない。

「そろそろ、サラウンドビューにしようか？」

ジョージが言う。

「そうだな。カタパルトに入る前に切り替えておこう」

俺がそう言うと、視界がサラウンドビューに変わる。誘導路に並ぶ機体、そして星のような色とりどりの光に満たされたステーション内部の空洞に飛び出していく銀色の宇宙艇。息をのむ景色だ。

実は、最初の訓練からいきなりサラウンドビューで飛び出すなんてことを普通はしない。下手をすれば目を回してしまう奴が出るからだ。しかし、俺たちは既にそれを経験済みである。しかも、シミュレーションとはいえ、この訓練よりずっと強力な惑星間軌道射出用カタパルト

でだ。フランクもそれを知っているからだろう、止める様子は無い。

「P21、こちら第3デッキコントロール。離陸を許可する。チャンネル288BでL2デパーチャーにコンタクト、5番カタパルトに進ませよ」

「P21、離陸許可了解。L2デパーチャーにコンタクト」

サムと管制の通信は軽快だ。さあ、いよいよ離陸。俺は離陸シーケンスをスタートさせる。

「離陸シーケンス開始。カタパルトへ進入」

「L2デパーチャー、こちらP21、離陸準備完了。データリンクを移行」

「P21、こちらL2デパーチャー、離陸せよ」

「P21離陸」

このカタパルトは訓練用なので、比較的短いし、加速もそれほど大きくはない。それでも、離陸後ほんの数秒で秒速10Kmくらいまで加速される。デッキを離れた後、指向性の加速磁場で、このスピードまで一気に加速されるわけだ。ステーションのデッキからほぼ瞬時に星の海のまっただ中に放り出された感覚である。とりわけ、サウンドビューでこれをやると急自分たちが宇宙に取り残されたような感覚になる。

「P21、こちらL2デパーチャー。離陸正常。訓練飛行を続行せよ」

「P21、了解」

とりあえず、これから、あらかじめ設定されている座標を経由して飛行し、今度はL2ステーションにアプローチして着陸する。

「飛行制御を機内に移行。オートパイロット作動」

「オートパイロット正常動作確認」

この場合、操作は俺が行い、副操縦士である美月がバックアップでその操作を確認する。

「コース正常、L2アプローチエリアまであと30秒」

ケイがコールする。設定されたコースを監視するのはナビゲータの仕事だ。視界にはグリーンでコース図と経由座標が表示されている。サウンドビューでは、すべての情報が外部の景色と一緒に意識に投影されるのである。

「間もなくアプローチエリア」

あつという間だ。これから着陸シーケンスが始まることになる。

「L2アプローチ、こちらP21、デッキ3への着陸許可を要請」

「P21、こちらL2アプローチ。現在、着陸順位はナンバー4。制御を移行せよ」

「P21、了解」

「データリンクを確立。飛行制御をL2アプローチに移行」

視界の中のコース表示がブルーに変化する。これは、外部制御による誘導飛行に切り替わったことを意味する。これから先は特に操作は不要だ。全部自動で着艦、誘導路への移動までが行われる。俺たちの前には3機のST1Bが列を作って着陸態勢に入っている。それを見ながら、俺はちよつと退屈な気分になる。

「お前ら、これは実機だつてことを忘れるな！ しかもプロトタイプだ。気を抜くと何かあった時に対処出来ないぞ」

俺たちの退屈を見透かしたようにフランクが声をかけてくる。たしかにそうだ。シミュレータなら故障しても死ぬことはないが、実機だと大事故になる可能性もある。油断は禁物だ。

「分かりました」

全員がそれに応える。だが、実際退屈なことに変わりはない。この中で集中力を保つことが一番難しいのである。

「P21、デッキ3への着陸を許可する。着陸シーケンスを開始」

「P21、了解。着陸シーケンス開始を確認」

俺たちは巨大なL2ステーションに吸い込まれていく。ステーションからの指向性磁場が、離陸時とは逆に俺たちを減速させ、着陸コースに乗せてくれるのだ。俺たちを乗せた子馬（ポニー）は、最後はゆっくりとデッキに着地する。それから、誘導路へと送り出されることになる。

「P21、着陸を確認。デッキ3コントロールにコンタクトせよ」

「P21、了解。デッキ3コントロールにコンタクト」

これで、ひととおりの手順が終了する、あとはデッキコントロールの指示で、格納庫へ移動するだけだ。

「よし、まずは上出来だ。このままもう一度やるぞ。今度は星野がパイロット、中井はバックアップだ」

「わかりました。美月、操縦系統をそっちに渡すぞ」

「了解よ。操縦系統移行を確認。バックアップ頼むわよ」

「了解！」

今度は美月の操縦で同じことをやるわけだ。パイロット2名は、どちらが操縦をしてもいいように互いに作業を補完できなければいけない。

「デッキ3コントロール、こちらP21、格納庫に戻らずこのまま離着陸訓練を続行する」

「P21、デッキ3コントロール了解。離陸は2番カタパルト、離陸順位はナンバー5」

「飛行経路、座標入力」

「パイロット席、飛行経路確認」

「機長席、飛行経路確認」

「飛行計画を送信・・・承認を確認」

「離陸前チェックを開始」

そんな感じで、俺たちはまたデッキから飛び出し、ぐるっと一回りして戻ってくる。これを何回かやると、さすがに俺たちの退屈も限界に達する。

「よし、今度は離陸後、マニュアルで行くぞ。訓練宙域に入ったらコースと速度は自分でコントロールしろ」

さすがにフランクもこれ以上俺たちを退屈させるとまずいと感じたのだろう。単純なルートだがマニュアルなら多少退屈しのぎにもなる。マニュアル操作での飛行は、チーム全体の連携が問われる。操縦だけでなく、飛行経路や速度、機体の状態や航路周辺の状況など、各担当がきちんとチェックし、情報交換しなければいけない。単純そうで、案外難しい仕事なのである。だが、それもシミュレータでは経験済みだ。俺たちの機体は、また離陸許可を得てカタパルト

から打ち出される。

「訓練宙域まで、20秒。航路図を投影」

ケイが、飛行経路のマップを映し出す。コース設定は俺の仕事、速度コントロールは美月がやっつて、互いに確認する。

「第一目標地点、方位030、020。現在速度を維持」

「コース変更、030、020」

「コース正常。推力調整、プラス2%からゼロへ、現在速度を維持」

「速度、コース正常。第一目標点まで30秒・・・」

「第一目標点までの進路クリア、障害なし」

「第一目標点から第二目標点、方位080、090。100Kまで加速」

ケイが言う100Kとは秒速100Kmの意味である。秒速3000Km程度までの低中速域では、この秒速Kmの単位が使われ、それを越えると、ポイント(・)01Cのように、光速Cつまり秒速約29万7千Kmを単位にして、小数で表すことになる。KやCが省略された場合、整数はKを単位とし、小数はCを単位とするのが暗黙の了解事項である。ただ、訓練では間違いを避けるために通常、省略はしない。

「コース変更、方位080、090・・・」

「推力プラス10%、100Kまで加速・・・」

おかしい、コントロールスティックの反応が悪い・・・。

「ケンジ、コースはずれてるわよ!」

「わかってる、うまくコントロールできないんだ」

「前方、他機に注意!」

「美月、減速だ」

コースを外れた俺たちの前に数機のST1Bがいる。このまま突っ込んだら危険だ。

「推力マイナス20%、減速・・・現在50K・・・40K・・・30K」

「よし、反応がよくなった。コースに復帰するぞ」

とりあえず、一旦コースに戻したのはいいが、何が起きたのだろう。

「よし、そのままの速度を維持しろ。エイブラムス、原因はわかるか？」

とフランク。

「操舵系と推力調整系の自律連携がうまく取れていないようです。100K以上だと、かなり誤差が出てしまいますね。ちよつと補正が必要です」

「どうすればいい？」

もちろん、教師であるフランクは答えを知っている。これはジョージに対する実地テストだ。

「80K程度の速度でしばらくコースを変えながら飛行すれば、学習すると思いますが」

「よし、それが正解だな。エドワーズ、他機のいない宙域はどの方向だ？」

「方位、170〜220、070〜130、距離100万Kmの範囲に機影ありません」

サムが、その範囲をマップに映し出す。

「中井、進路をその範囲に取って少し遊んでやれ」

「わかりました。美月、速度を80Kまでゆっくりと上げてくれ」

「了解、推力調整プラス1%で加速」

さて、好きに操縦していいのであれば、それは楽しい。とりあえず、この機体の癖を把握するにはいい機会だ。まあ、それは逆に、この機体が俺の癖を学習することにもなるんだが……。

「あとで代わりなさいよね！」

美月がちよつと不満そうにつぶやく。まあ、気持ちはよくわかる。俺は、とりあえず指定された宙域まで一直線に飛ぶことにする。

「L2エリアコントロール、こちらP21、操縦系統調整のため、現在区域周辺、半径30万Kmの範囲でのランダム飛行許可を要請する」

「P21、こちらL2コントロール。現在のところ、その周辺はクリア。20分間以内のラ

ンダム飛行を許可する」

「こちらP21，了解、これよりランダム飛行を開始する」

さて、お楽しみだ。でも、何もない空間で適当に飛ばすというのも、それほど簡単ではない。どうしても動きが単調になってくる。

「沢村、疑似障害物をこの空間マップ内に展開してみる」

「了解です。さて、お手並み拝見といきますか」

そうそう、そうこなくつちや面白くない。これは練習機だから、そういう機能も用意されているわけだ。……といきなり前方に小惑星。俺は慌てて進路を変える。まだ反応があまり良くないから、危ないところだ。

「おい、いきなりかよ！」

「えへへ、無駄口叩いてる暇はないかもね」

……とまた前方に、今度は大型巡航艦……。疑似映像だと分かっているけど、肝を冷やす。まるで実機でゲームをやってるみたいだ。

「さて、ちよつと難度を上げるよ」

「おい、まて……」

今度はいきなり、小惑星群に囲まれた。それを避けながらジグザグ航行をする。速度一定でこれやるのは結構辛い。

「美月、スロットルをこっちに回してくれ」

「もう、勝手にやってなさいよね！」

「そう来なくつちや、じゃ、もうちよつと頑張ってもらおうかあ」

いかん、だんだん小惑星の間隔が詰まってくる。俺は、スロットルを加減しながら、コースを変えて前方の小惑星を回り込む。だが、その前にも小惑星。それを間一髪でかわす。心持ち、機体の反応が良くなってきた気がする。

「へえ、だんだん調子出てきたじゃん。それじゃ、これはどうかな？」



ケイの奴、楽しんでるな……。と思つた瞬間、小惑星の陰から戦闘艇が二機現れた。いきなり撃ってくる。

「おい、こりゃ反則だ。こつちには武器は無いんだぞ」

「いやいや、そういうシチュで、どう逃げるかつてのもパイロットの技術でしょ」

「くそ！」

俺は大きくひねりを入れて、小惑星の陰に飛び込む。青白いフェイザーの光が機体をかすめる。危ないところだ。しかし、また目の前に小惑星。見通しが悪すぎる。

「サム、短距離センサー映像を重ねてくれ」

「了解！」

サラウンドの画像に、短距離センサーのマップ映像が重なる。これなら、先に何があるか、ある程度見通せる。まあ、この映像も、ケイが作り出した疑似障害物を使ったシミュレーションなのだが。

「なんだ、こりゃ。無茶だろ、これは！」

前方にほとんどぶつかりそうな感じで小惑星がひしめいている。隙間はほんの僅かだ。しかも後ろからは戦闘艇が追ってくる。あそこへ突っ込むしかないじゃないか。

「回避コースは？」

「コースは3つ」

コース図が重なって表示される。しかし、どれも敵しそうだ。

「右のコースに入って！」

美月が叫ぶ。理由を聞いている暇は無い。どれも似たようなものなら、美月のカンにかけよう。俺は右側のコースに進路を合わせる。ほぼ同時に左舷を敵のフェイザーがかすめた。

「あぶねー、助かった」

とはいえ、この先のコースは簡単じゃないわけで……。まずは、あの小惑星の隙間を抜けないといけない。

「もっとスピードを上げて！」

「無茶言うな、くそっ！」

俺は、全身の毛が逆立つ感覚を味わいながらスロットルを引くと、小惑星の隙間をぎりぎりでぐり抜ける。幸いにも、機体の反応はかなり良くなってきた。これならもう少しスピードアップしてもなんとかなりそうだ。

「敵一機消滅！」

「小惑星に突っ込んだわ！ あと一機よ」

「もうちよつとで、こつちがそうなるところだったぜ」

前にはまだ幾重にも小惑星が重なっている。俺は、その間をジグザグにコースを取りながらすり抜けていく。後ろにはあと一機、戦闘艇が張り付いている。武器があれば戦えるのだが、これじゃ、どちらかが自滅するまでのチキンレースだ。練習艇に武器は搭載されていないから、どうしようもない。いや、待てよ。そもそもこの戦闘自体が架空のシミュレーションで、実際の俺たちは、何もない宇宙空間をただジグザグに飛んでいるだけだ。少なくとも外からはそう見える。シミュレーションなら、なんとか出来るんじゃないか？

「美月、操縦替わってくれ！」

「え、何よ、いきなり？」

「いいから、頼む！」

「分かったわ、切り替えなさいよ」

俺は操縦系統を美月に渡すと、脇にある火器管制パネルをのぞき込む。実際に武器は無いが、このシステムはそのまま使えるはずだ。ならば、シミュレーションプログラムに武器を追加できれば……。

「ケンジ、それは僕の仕事だよ」

ジョージは気が付いたようだ。

「先生、火器管制を含めた戦闘シミュレーションを起動しちゃダメですか？」

「そう来ると思った。かまわないが反則技はなしだ。通常兵器だけなら許可しよう」

「わかりました。それで十分です。だよな、ケンジ！」

「十分だよ。頼むからあんまり物騒なものはいれなくてくれよ」

これまで暗くなっていた火器管制パネルが、オレンジの表示に替わる。短距離、長距離のミサイルが20発ずつ、それからフェイザーも使える。だが・・・

「ケンジ、武器はいいけど、どうやってあいつの後ろに回り込むつもり？ この小惑星帯じゃ、ぶつからないでいるのが精一杯よ」

そう。美月の言うとおりで。しかも、敵はだんだん間合いを詰めてくる。

「ジョージ、後方シールドを最大に。おしりに火が着きそうだ」

「了解、シールドを後方に集中して展開」

さて、あんまり時間がない。旋回しようにも、周囲に小惑星が多すぎる。この宇宙艇では、後方に対して使える武器も無い。このまへのゲーセンの時みたいに機体だけ反転させたら、その瞬間にこつちが小惑星に衝突だ。困った・・・。だが、状況は相手も同じだ。ちよつと間違えれば小惑星に突っ込んでしまうから、攻撃よりも操縦に集中せざるを得ない。うまく、相手の進路を妨害できれば・・・。

「美月、俺がミサイルを撃つたら、それを追い抜いて、前方の小惑星の間を抜けられるか？」

「ミサイルを追い抜くって、無茶言わないでよ」

「いや、こいつなら出来るはずだ」

「小惑星に突っ込んででも知らないわよ！」

「お前ならできる、大丈夫だ」

「死んでも恨まないでよね」

俺はミサイルを前方両側の小惑星にロックする。

「いいか、いくぞ」

「いつでもどうぞ。てか、いつでも同じよね。やるしかないなら」

「ミサイル発射、行けっ！」

「最大加速・・・」

俺たちの宇宙艇はミサイルを一気に追い抜いて加速する。目の前にふたつの小惑星が迫ってくる。隙間は僅かだ。運を天に、いや美月に任せるしかない。その瞬間、すべてがスローモーションになったように感じた。不思議な感覚だ。とるべきコースがはつきりと見える。そして、美月も正確にそのコースに機体を乗せている。次の瞬間、俺たちは小惑星の隙間をぎりぎりですり抜けていた。

その直後、追ってきたミサイルが小惑星にヒット。大量の破片を巻き上げる。そして敵の戦艦はそれに突っ込んでコースをはずれ、小惑星に接触して吹っ飛んだ。

「敵機、消滅を確認」

「やったの？」

「ああ、どうにかな」

「なんて奴だ、無茶しやがる。これが本物だったら命がけだぞ」

フランクが後ろから叫ぶ。まあ、本当にこんなシチュなんて無いだろうけど・・・。そもそも、これは実機を使つてのゲームみたいなものだから。これが本物だったら、最初から命がけだ。

「先生、自律制御系の連携誤差がほとんどなくなりました。もう大丈夫だと思います」

ジョージが声をかけてくる。

「よし、お遊びは終了だ。L2に戻るぞ。L2エリアコントロール、こちらP21、調整を完了、これから帰投する」

「P21、こちらL2コントロール。了解、コースを203, 185へ」

なんとなく、このまえのゲーセンの延長みたいなシミュレーションもこれで終わり。また退屈な訓練に逆戻りだ。

「疑似障害物を消去。帰投コース、203, 185へ。相対速度100Kまで加速、L2アブローチエリアまで3分」

「了解、帰投コースセット」

ケイのコールに美月が応える。

「推力10%、相対速度100Kまで加速」

操舵と推力制御を交替したまま、美月の操縦で俺たちはステーションにもどるコースに乗った。そして、また制御をステーションに渡して着陸。

「よし、一度、格納庫に戻って今の調整データを管理コンピュータと同期させておこう」と、フランク。

「第3デッキコントロール、こちらP21、格納庫、スポット43へのタクシー許可を」

「P21、こちら第3デッキコントロール。タクシーを許可する」

「了解。格納庫へのタクシーシーケンスをセット」

俺たちの子馬（ポニー）は、ゆっくりと格納庫に引いて行かれて、スポットに着地する。

「システム、駐機モードに移行。管理コンピュータとリンクします」

ジョージが手際よくシステムを切り替える。駐機モードになると、機体の制御はデッキの管理コンピュータに渡され、集中管理される。管制から移動許可を受けるまでは、システムがロックされるので、勝手に機体を動かすことはできなくなる。

「よし、そのままみんな楽にしてくれ。とりあえず、君たちのおかげで、初期段階のデータ収集はうまくいったようだ。これから、この機体は一旦整備に回して、再調整することになる。今日の所はこれまでだが、またいずれ手伝ってもらおうことになると思うから、その時はよろしく頼む」

「先生、これに乗れるんだったらいつでも、手伝いますよ」

「いっそ、これ、僕たちにもらえませんか・・・ってダメだろうな」

「さすがに、それは無理だ。まずは、普通にST1Bに慣れてもらわないとな」

「あーあ、これ乗った後に1Bじゃ、ちよっとモティベーション下がっちゃいますよー」

「情報処理能力に不安・・・」

まあ、ゴネてもしかたがないのは分かっちゃいるのだけど、全員がそう言いたくなるのは無

理もない。これとST1Bじゃ性能が違いすぎる。

「まあ、そう言うな。いつも最新型の機体を使えるわけじゃない。旧型をうまく乗りこなせて、初めて一人前だと思え」

「そのとおりだ。お前ら！」

と、いつの間にか後ろに、例のコワモテ教師が立っている。

「さて、お前らの機体が整備から戻ってきたんでな。昼飯を食ったら、こいつのことは綺麗さっぱりと忘れて、機体の前に集合だ。いいな」

なんとなく気が重い。思い切りシゴかれそうな予感がするのだが……。それに、処理能力の足りないST1Bで、このチームが、とうるか美月がうまくやれるかどうかかも心配だ。そのあたりは、ジョージ頼みなのだが、データの整理はできても、使える情報は大幅に減るだろうし、機体の反応も天地の差だろう。まあ、それが本来の実機演習だから、いたしかたないのだが、なんとなく超一流レストランの前菜のあとに、安レストランのメイン料理がでてきたような気分になる。

「とりあえず飯にしようよ、お腹すいたよ」

「そうですね。食事をして午後に備えましょう」

俺たちは、後ろ髪を引かれながら、ST2Aから降りて、学食に向かおうとする。

「そうだ、エイブラムス、ちょっと残れ。話がある」

後ろからフランクの声。もしかして、遅刻のお説教だろうか。

「先に行ってくれ、僕はお説教を聞いてくるから」

ジョージもそう思ったらしい。頭をかきながらフランクの所に歩いて行く。そういう意味では、俺も同罪のはずだが、呼ばれたのはジョージだけだ。ちょっと悪い気もするが、とりあえず俺たちは先に学食に向かった。



「先生、遅刻のこと忘れてなかったのね。案外、根に持つ性格だったりするんじゃないの？」  
と美月。

「いやいや、性格の問題じゃなくて、あれは教師の愛情ってやつだよ。私にも愛情注いでほしいよー」

ケイが遠い目をして言う。こういう会話をきっかけに、また火花が散りそうだから不安だ。

「だったら、グレてみたらいいじゃない。ああ、あんたならその必要も無いか」

「いえいえ、美月さんほどでは・・・」

ほら始まった。二人とも笑いがちよっと引きつっている。ここらで止めとかなないとマズい。

「ほら、もう学食、結構混んでるみたいだし、早く行って席をとらないと待たされるぞ」

「そうですね、急ぎましょう。ジョージ君の席も取っておかないといけませんね」

こういう時に、マリナは必ずフォローに入ってくれるので助かる。美月はちよっと不満そうだが、とりあえず衝突は回避。俺たちは、学食で空いたテーブルを見つけて、とりあえずロックする。

空いているテーブルや席はアウトバンドの情報から一目で分かる。食堂に入ると表示される仮想パネルでテーブルを選んで人数を入れると、その人数に合った椅子が予約中としてマークされる。これがロックするということだ。空席がある程度以上あれば、一定人数以上でテーブル単位でのロックも可能だ。ロックされた席は一定時間、他の生徒は使えない。ロック解除忘れを避けるために、ロックは10分で解除されるようになってから、その間に食べ物を取って席に座らないといけない。

ちなみに、食べ物、これもアウトバンドで表示されるメニューで注文を出し、配膳口に完了表示が出るのを待つ。個人単位に注文して、その料理の完了表示は自分しか見えないので、取り違いは生じない。待ち時間は、どんな料理でも、混雑時でも、だいたい5分以内。

俺たちは、思い思いの料理を手にしてテーブルに集まる。

「よーし、食べるぞー」

「一番楽しんで楽しんでた癖に、食欲あるじゃない」

いや、美月さん、食事中にまでそういう突っ込みはやめにしような。

「でも、確かにあの障害物はないよな。障害物ってより、もう敵だし。単に調整だけなら小惑星をいくつか配置すればそれで良かったんじゃないか？」

「いやいや、それじゃ面白くないでしょ。それに訓練機はいろんなシナリオが用意されてるから楽しいのよね」

「まあ、実機でゲーセン感覚が楽しめたってのは確かだけどな」

「でも、リアルでしたよねえ、あれ」

「途中でケンジがいきなり操縦投げ出すから焦ったわよ」

「投げ出すって、人聞き悪いな。あれは、武器が使えないか確認したかったからで、操縦を投げ出したわけじゃないっての」

「それなら、ちゃんとそう言うってから渡したらどうなのよ」

「だから、そんな時間は無かっただろ」

あれ、なんで俺と美月がやりあってる？

「まあまあ、お二人さん。喧嘩はしないの！」

「余計なお世話よ。私がケンジと何しようが勝手でしょ」

「おお、何しようが・・・って何するのかなあ？」

「おい、いいからちよっと飯食えよ。昼休みはそんなに長くないんだからな！」

そんな感じでやってるところに、ジョージがやってきた。

「お説教、終わったの？」

「お説教というか、結構大きな宿題もらっちゃったよ。今夜は徹夜かも」

「あらら、フランク先生も結構キツイねえ」

「宿題って、いったい何をもらったんだ？」

「それは明日まで内緒。まあ、こいつがらみなんだけどね」

と、ジョージは持ってきた箱を指さす。

「それ、いったい何よ？」



「まだ内緒。でも、うまくいったら、かなり役に立つ代物だよ。まあ、あくまでうまくいったら・・・だけどね」

「もう、じれったいな。じらさないで言っちゃいなさいよ！」

「ダメ！、先生に、言ったら宿題倍付けだってクギさされてるからね」

「倍付けか、そりゃキツいな」

「徹夜はいいけど、明日も遅刻したりしないでよね！」

「まあ、心配いらないよ。たぶん寝る暇ないだろうし・・・」

ジョージは、やれやれといった感じで肩をすくめて見せた。しかし、フランク先生も結構キツいな。いや、もしかしたら、あのコワモテのサシガネか？

「とりあえず、早く昼食済ませなさいよ。午後の実習まで遅れたら、洒落にならないんだからね」

そうだ、とりあえずは午後の実習なんだが、最新鋭機からいきなり旧型の訓練機になって、うまくいくんだろうか。俺はかなり不安だったのだが、その予感的中することになる。

ジョージがフィルタプログラムを組み込んだものの、そもそも元になる情報の流量が多すぎて、コンピュータがオーバーロード気味。そんな状態では、機体の制御が極端に悪くなる。オートパイロットを使った基礎訓練はどうにかなったものの、マニュアル操縦では機体の反応が遅れるために、どうしてもコース設定に誤差が出てしまう。おまけに、ST1Bでは、自律制御機構がないので、どれだけ飛んでも状況は変わらない。おかげで、俺たちはコワモテに怒鳴られっぱなし。さんさんの実習になってしまった。

「よーし、今日はこれで終わりだ。まったく、お前らのおかげでこっちが疲れちゃったぞ。まあ、初日から期待はしてなかったがな。明日はもうちょっとマシな飛び方をしてくれ」

コワモテが、疲れ切ったという表情で言うのだが、俺たちの状態はそれ以上に悲惨だった。午前中との落差もあって、ストレスが限界まで来てる、というか、意気消沈してしまっているわけ・・・

「まあ、ある程度予想はしてたがな。この機体には、お前らみたいなチームは荷が重いんだよ。でもなあ、フランクの言うとおり、こいつをどうにか出来なきゃ、一人前とは言えん。悔しかったら何とかしてみろ」

何とか、と言われても困る。そもそも俺たちがどれだけ頑張っても、コンピュータの処理性能が上がる訳じゃ無い。コワモテにしてみれば、励ましたつもりかもしれないが、俺たちはかえって暗くなる。

「やっぱりね。だから言ったでしょ、私と組むとロクなことがないって」

「おいおい、誰もお前のせいだなんて言っていないぞ」

「だって、それ以外に何があるのよ。私がいなきや、全部うまくいくんでしょ」

いかん、こいつはそうやって、これまでも全部背負い込んできたわけで、ここでまた同じことをさせるわけには……

「何言ってるの、あんた一人の問題じゃ無いよ。これはチームの問題だよ。ねえ、リーダー」

珍しくケイが真顔で言う。

「そうですよ。美月さんがいるから出来ることの方が多いんですから、そんなこと言わないでくださいね」

とマリナも言う。

「私には美月が必要。このチームじゃなきや、私もやっていけないから」

サムも真顔。そう、これは誰のせいでもない。ぜんぶこのオンボロ練習機が悪いんだ。でも、それ以外に選択肢が無いのも事実。

「僕も同感だよ。たぶん方法はあると思う。だから、このチームで頑張ろうよ」

「……ごめん……ありがとう。」

そう、ここはジョージに何かいいアイデアを出してもらおうしかない。だが、どうやってコンピュータの処理能力を上げたらいいか。いかに、ジョージでも難問だろう。

「そういえば、エイブラムス。お前、遅刻の罰として宿題があったな。さっさと帰って明日までに仕上げてこいよ」

「そうですね。こりや、意地でもやるしかないですね」

コワモテはニヤリと笑ってジョージを見る。

「よし、続きは明日だ。今日はもう帰って休め。疲れただろうからな。まあ、エイブラムスは、もうひと頑張りだが、アカデミーの歴史に残る悪行をやらかした意地を見せてみる。言っておくが、明日は遅れるなよ。宿題は理由にならんからな！」

「はあ、わかってますよ」

ジョージは、またやれやれ・・・という表情を見せる。

「これを持って行け。今日の実習の全履歴データが入ってる。たぶん役に立つだろう」

コワモテはそう言うと、小さなカートリッジをジョージに投げて渡した。

「助かります。これがあれば、早いですよ」

このカートリッジは、今日の実習での俺たちの操作や、機体の動作、その他の情報などが全部記録された。ペタバイトメモリチップである。いわば、宇宙艇のフライトレコーダーだ。このメモリチップは手のひらサイズだが、その容量は膨大である。ちよつとした街の電子図書館のデータなら全部格納できるほどだ。だが、今の時代は、その数億倍を超える量のデータが日々生まれ、処理されていくような時代だ。個人用コンピュータでも、高性能のものなら、これくらいのデータは少し時間があれば処理できる。宇宙機のフライトコンピュータはその量のデータをリアルタイムで処理するのだから、その能力がどれくらいのものかわかるだろう。だが、その処理能力を超えるデータを生み出す奴もいる、ということが問題なのである。ジョージの宿題がどういものかはわからないが、俺たちの役に立つものなら、頑張っって欲しいところだ。

俺たちは、宇宙艇を降りて格納庫を出ると、そこで解散した。附属校の学生は全員が寮住まいだ。学生寮は、男子寮と女子寮がこのゾーンにはそれぞれふたつ、北居住区と南居住区に置かれている。俺と美月は南側、あとの4人は北側だ。ちなみに、南北は便宜上、ステーションの回転軸方向で、地球同様、北側から見たときに自転が時計回りに見えるように決められている。東西も同様に自転方向で決まる。

「ねえ、ちよつと歩かない？」

「ああ、いいよ」

附属校訓練施設から南学生寮までは、車で10分ほどだが、歩けば小一時間かかる。まあ、実習日は終わるのも早いから、まだ日暮れまでは間があるし、今日は美月につきあってやるのもいいだろう。

「ケンジ、本当にこれでよかったの？ 私があのチームに入って・・・」

「なんだ、まだそんなことを気にしてるのか？ いいに決まってるじゃないか。みんなもそう言ってただろ」

「でも、この先、またきつと色々問題が起きるにきまつてる。そのたびに、こんな気分になるのは辛いよ」

「美月らしくない発言だな。いつもの元気はどこへ行った？ 心配ないって。うちのチームのメンバーは本当にいい奴らだし能力もある。問題が出てきつと解決できるさ」

「だから、辛いよ・・・。疫病神呼びわりには慣れてる。そんなこと言われても気になんかしない。でも、このチームは違う。みんな一生懸命になんとかしようとしてくれるわ。けど、それが大きな負担になってることがわかるから・・・」

「いや、たぶんそれだけの価値があるんだと思うよ。美月がいるおかげで、使える情報が圧倒的に増える。これをうまく共有して使いこなせたら、凄いことになると思うんだよ。みんなもそれを期待してると思うんだ。逆に、美月は他のメンバーの処理能力に頼ることもできる。これはお互い様だよな。だから気にするな。それよりさ、あきらめずに、なんとかする方法をみんなで考えようぜ、なっ！」

俺は笑って親指を立て、そしてウインクして見せた。美月は、ちよつと赤面して目をそらす。

「ケンジ・・・のくせに」

美月がつぶやく。久しぶりに聞いたが、ケンジという名前は、出会った直後からこいつの辞書に、ろくでもない意味がたくさん登録されてしまっていた。一年たって、消去されるかと思っただが、まだ健在らしい。

「ケンジで悪かったな」

「ケンジのくせに・・・生意気なんだから」

はたから聞いたら意味不明な会話だが、そういえばあの時もこんな会話があったつけ。そう、入学式前日、こいつと乗り合わせたシャトル事故の時・・・。普段強がっている美月が、

弱音を、というよりも本音を吐けるのは、もしかしたら俺だけなのかもしれない。それも、あの事故と一緒に乗り切った結果として生まれた一種の信頼感だろう。

「そういや、ジョージの宿題ってなんだろうな」

「わからないけど、すごい思わせぶりだったわよね」

「少なくとも、うちのチームにとって悪い話じゃなさそうだけど、気になるよな。あとで連絡してみようか？」

「止めといた方がいいんじゃない？結構大変そうな感じだし、邪魔しない方がいいわよ」

「そうだな。まあ、明日になれば分かるし」

「ジョージが来れば・・・だけどね」

「だよな。明日は出がけに連絡しとくか」

「そうね、それがいいわ」

よかった。なんとなく美月も元気を取り戻したみたいだ。まあ、少し弱ってるくらいが扱いやすくいいんだけどな、こいつは。

「ケンジ、あんた、何ニヤニヤしてんのよ。また何か変なこと考えてたでしょ」

「考えてねーよ。てか、何考えようが俺の勝手だろ！」

「どうせまたエロいことでも考えてたのよね。私にはお見通しなんだからね」

いかん、だんだん元に戻ってきた。これ以上元気になられても困るんだが。この分だと寮に戻る頃には完全復活してるな。その分、俺はエネルギーを吸い取られてそうだな。

俺は無視して歩く。ペースを上げる。

「ちよっと！ 何逃げてんのよ。待ちなさいよね！」

美月が小走りに追いかけてくる。そろそろ夕暮れ時が近づいて、空が、といっても人工の強化シールドなのだが、少し赤みを帯び始めていた。



翌朝、少し早めに目覚めた俺は、寮の食堂で朝飯を食い、それからジョージに連絡を入れてみた。呼び出しにはすぐ出たジョージだったが、どうやら完徹らしく、さすがに眠そうな声。もう少しらしい。今最後のチェックを入れているところだそうだ。なんとか間に合いそうだと言うので、後は北学生寮の連中に任せて、登校の支度をする。  
寮から出たところで美月が待っていた。

「おはよう。早いな」

「ずいぶんのんびりしてるじゃない。待ちくたびれたわよ」

いや、待っていてくれと頼んだつもりもないのだが、それを言うと朝から騒ぎになるのでやめておこう。

「いや、ちょっとジョージに連絡入れてたからな」

「で、どうなの？」

「ああ、なんとか間に合いそうだ。あとはケイたちが首に縄かけてでも引つ張ってきてくれるだろう」

「結局、徹夜でやってたわけ？ ジョージは」

「ああ、そうみたいだな。かなり眠そうだったよ」

「宿題はいいとして、実習は大丈夫よね」

「たぶん・・・」

「実機でエンジニアリングが居眠りしたら洒落になんないわよ」

「そうだな。なんとかもうひと頑張りしてもらおう」

俺たちは、寮の前で車を拾うと、訓練施設に向かった。訓練施設はゾーンの中央部分にある。ここから地下に向かうシャフトを降りると格納庫だ。ステーション内部の三角柱の内側は円筒形の空洞になっていて、そこに宇宙港や訓練用のベイが作られている。練習機の離着陸デッキは、宇宙港とは少し離れた場所に、一般の航路と干渉しないような形で作られている。

直径が4 Km、長さが20 Kmもある大きな空洞だが、宇宙艇の速度なら一瞬だ。ちよつとしたミスが重大事故に繋がるため、どの船も離着陸はステーション管制による自動制御が義務づけられている。訓練ではマニュアル離着陸も行うが、それはステーションの周辺に作られている訓練用浮遊デッキを使って行うことになっている。

小型艇中心のアカデミー訓練機用デッキは、ステーションの内壁から突き出した構造になっていて、アカデミーの施設は格納庫エリアを含む大きなビルくらいの構造物の中に収容されている。中央の格納庫エリアから両側に離陸用カタパルトを含む離着陸デッキが複数突き出している。宇宙艇は格納庫からこの離着陸デッキに移動し、カタパルトで射出される。

一方、大型艦は、専用の埠頭が用意されていて、そこに直接係留されている。一般の宇宙港やスペースガードの巡航艦基地などは、この形だ。宇宙港などの共用施設はタイムゾーンに係なく24時間運用されている。場所によっては地上を移動するのに時間がかかるため、ステーション内部には、施設間を移動するためのシャトルシステムが用意されていて、地域ごとのシャトルステーションから各施設へ移動できる。実習も、自分のゾーンの施設以外で行う場合は、このシャトルを使って、他ゾーンや周辺軌道の訓練施設に行くことになる。

格納庫に降りると、集合場所がある。うちのチームはまだ俺たちだけだ。

「まだみたいね。大丈夫かしら」

「だと思っただけだな。ちよつと連絡を入れてみるか」

俺がコミュニケーターを取り出してジョージを呼び出そうとした時だった。

「おい、おはよー」

「ケンジ君、美月さん、おはようございます」

「おはようございます」

「……」

北学生寮組4人が到着。よかった。しかし、ジョージはかなりまいっている感じだ。

「おはよう。ジョージ、大丈夫か？」

「なんとか、生きてるよ」

「もう、連れてくるのが大変だったよ。出がけに呼んだら返事が無いから、寮監さんにたのんで見てもらったら、机で寝てたみたい。ようやく連れ出したと思ったら、車の中でも爆睡してたし……」

「そりや大変だったな。完徹じゃ無理も無いか。でも間に合ってよかった」

「寝たい、もう寝たい……」

ジョージがつぶやく。本当に眠そうだが、これからは本番だから、なんとか頑張ってもらわないといけない。

「ジョージ君、コーヒー飲みますか？」

マリナがコーヒーを買ってきた。やはり彼女は気がきく。

「ありがとう。いただくよ」

ジョージは一気にブラックコーヒーを飲み干す。

「はあ、ちよつと目が覚めたかな。でも、さすがにキツかったよ、一晩でこいつを仕上げるのは」

ジョージは持ってきた小箱を見せて言う。これは昨日、フランクから貰ってきたあの箱である。

「ところで、何なんだ、それ。そろそろ教えてくれないんじゃないか？」

「ああ、もうちよつとだけ待ってくれよ。きちんと動くのを確認したら教えるからさ。ちよつと先に先生のところへ行ってくるから、時間になったら205号艇で会おう」

ジョージは、箱をかかえて、教務室の方へ歩いて行く。まだ少し時間があるので、俺たちも購買で飲み物などを買って開始時刻を待つ。しかし、昨日の午後のことを考えるとちよつと憂鬱だ。

「あー、憂鬱よね。今日もあのオンボロを飛ばさなきゃいけないなんて」

美月も同じことを考えてるようだが、口に出してみても始まるまい。

「最初に最新型に乗っちゃったからねえ、余計にボロい感じがするよね」

「もう少し処理能力が欲しい」

「そうですね、私のところは、まだマシですけど、メデイカルデータベースの検索には時間がかかりますね」

「まあ、欲を言ってもしかたがない。なんとか頑張ろうぜ」

「そだね、ここはひとつリーダーのケンジに代表して頑張ってもらおう」

「そうよね、ケンジが責任取るべきね」



「お、おい！」

そもそも何の責任だ？ 練習機がボロな責任を俺が取るのか？ そりゃ理不尽過ぎるだろう。

「よし、全員集まってるな。各自、訓練の準備にかかれ。もたもたしてると置いていくぞ！」

いつものコワモテの声が響く。学生たちは格納庫に入って、それぞれに機体に散っていく。俺たちも、205と書かれた機体の前までやってきた。そこにはジョージと、それからフランクがいる。

「おはよう。みんな調子はどうだ？」

「はあ、もう最悪ですよ。ST2Aとは違いすぎて・・・」

「まあ、そうだろうな。いきなり、あれに乗せてしまったのは私のせいだから、少しは責任を感じてるんだがな。ということで、今日は私が君らの担当だ。よろしくな」

「はあ、よろしくお願いします」

しかし、フランクが指導教官でも状況がそう変わるとは思えないのだが。

「さて、準備にかかろう。そのまえに、エイブラムス、そいつを取り付けてくれ」

「わかりました。でも、いきなりやるんですか？」

「そうだ。自信が無いのか？」

「いえ、そういうことでは・・・」

「だったら急げ！」

どうやら、例の箱の出番らしい。いったいなんなんだろう。ジョージが箱をあけて、中から金色のユニットを2個取りだした。

「メインコンピュータか？それ」

「そうだよ。特別製のね」

ジョージは機体のサイドパネルを開くと、その中にもぐり込んで、そこに入っているコンピュータユニットを手際よく取り外し、持ってきたユニットと交換する。機体の両側に一個ずつ。宇宙艇のコンピュータは少なくとも二重化されている。もっと大型の宇宙船の場合、さらに冗長度が高い。

それからジョージは脇にある操作パネルを操作してそれを起動する。ユニットが薄い光を発生し始めた。量子演算ユニットが動き始めたのだ。

「よし、なんとか繋がった」

ジョージはそう言うのとサイドパネルを閉じて、俺たちの所に戻ってきた。

「交換しました。とりあえず接続は正常です」

「よし、それじゃ全員搭乗して準備にかかってくれ」

「はい」

俺たちは205号艇に乗り込むと、それぞれの席についた。

「システム起動します。自動チェックシーケンス開始」

ジョージがコールする。エンジニアリング席のモニターパネルに情報が表示されはじめる。

「自動チェック完了、メインシステム異常なし。」

さてよ、チェックシーケンスの完了が早くないか。本当にきちんとチェックできてるのか？

「よし、中井。各部のチェックを初めてくれ」

「了解しました。機長席システム接続、システムチェック。操縦系統正常。え・・・？」

ちよつと待て、なんでチェックがこんなに速い。昨日はこの数倍の時間がかかってたはずだが・・・。

「副操縦士席、システム接続。操縦系統、火器管制システムチェック。すべて正常。なに、これ？」

「ナビゲーションシステム接続チェック、・・・異常なし。ちよつとこれ速くない？」

「C&I席接続確認、通信系、各種センサー異常なし。処理速度がぜんぜん違う」

「メデイカルコンソール接続確認、VMIアクセス許可確認。すべて正常。反応が・・・」

どうやら、全システムがやたらと速くなっているようだ。理由はさつきジョージが取り付け

たコンピュータユニットにあるらしい。どんな手品だ、これは。

「全システム正常動作を確認。はあ、よかった。なんとかうまく動いてるみたいだ」

「ジョージ、これはいったいどういうことなんだ？」

「あはは、これは私から実験に協力してくれた君たちへのささやかなプレゼントだ。エイブラムス、説明してやれ」

フランクが笑ってそう言うと、ジョージが説明を始めた。

「さつき、取り付けたコンピュータユニットは、実はこの機種のものじゃないんだ。2Aシリーズ用の最新型さ。ハードウェアシステムのインターフェイスは共通なので、物理的には取り付けられるんだ。でも、ソフトウェアは、この機種のもを移植する必要がある。僕が徹夜でやっていたのはその作業さ。今、少なくとも情報処理系だけとってみれば、この船の能力はST2A並になってるんだ」

「だから、処理がこんなに速いのか？」

「そう。でも、処理系を換えただけだから、エンジンや操縦系統、そのほかのハードウェアの能力はそのままどおり。それを越える操作はできないようになってるから、2Aシリーズにはまだまだ及ばないけどね」

「いや、十分だよ、これで俺たちもまともに訓練ができる」

「でも、いつまでも特別製ってわけにはいかないよね」

たしかにケイが言うとおりで。今使っているコンピュータユニットをずっと持ち歩くわけにはいくまい。故障でもしたらアウトだし。

「それは、心配なくていい。今、アカデミーやスペースガードで1Bシリーズのコンピュータを最新型に換える計画があつてな。いずれは、全部の船がこのコンピュータを搭載することになるはずだ。まあ、それまでは機体が変わるたびに、交換しないとけないが、それも長くはないだろう。今回は、エイブラムスにその実験にも協力してもらったわけだ」

とフランク。

「また実験台？」

美月がちよつと不満そうに言う。

「いいじゃないか。おかげで、最新型を使えるわけだし」

「そうだよ。とりあえず、何かあったらジョージが責任取ってくれるからさ」

「えー、そりゃ責任がないとは言わないけど、僕には取り切れないかも。てか、何かあったら全員、一連託生だしね」

「何かあったら、命がけ・・・」

「そうだ。船のメインコンピュータがバグったら、本当に命がけになるかもしれない。しかし、学生の訓練でそんな危険を冒していいのか？」

「念のために言っておくと、これを君たちの基礎訓練で最初に使うのはそういう意味もあるんだ。基礎訓練は、基本的にステーションの近くで行われるし、不慣れな訓練生であることを考慮して、レスキュー体制も完備してるからな。まあ、それでも事故が発生する可能性はゼロじゃないが、それは、従来型の機体でも同じことだ。だから安心していいぞ」

「なんとなく、うまくまるめこまれたような気がするの俺だけだろうか。でもまあ、フランク自身が教官として同乗するのだから、彼も一連託生なわけだ。」

「よし、それじゃ続けよう。エイブラムス」

「了解。情報共有モードをテストしよう。各自、情報共有モードに切り替えてみてくれ」

「これまた昨日のことが嘘のようだ。コンピュータは大量の情報を何の問題も無くさばいている。ジョージのプログラムのおかげで、最新型機とほぼ同じ情報が整理された形で表示されてくる。」

「いいよ、これ！、ジョージ、ありがとうっ！」

とケイが叫ぶ。

「よし、それじゃ訓練を開始するぞ、準備はいいか？」

フランクはそう言うと、管制を呼び出して訓練開始を告げる。俺たちは、またお決まりの手順に従って、離着陸を繰り返すことになる。マニュアル操縦もまったく違う機体みたいにスムーズだ。あまりにスムーズすぎて少し拍子抜けしてしまう。しばらくは、この退屈な訓練が続

くのだが、これはしかたがない。思いがけないプレゼントに盛り上がった俺たちだったが、午前の訓練が終わる頃には、かなりテンションが下がってしまっていた。

◇

「あーあ、ちよつと退屈かもー。もうちよつと刺激が欲しいよー、リーダー」

昼飯を先に食い終わったケイが、テーブルに突っ伏してぼやく。

「しかたないだろ、基礎訓練なんだから。それに、実機訓練は退屈なくらいが一番だって。逆に何かあったら困るだろ？」

「ステーションの管制圏内ばかりじゃ、ナビの出る幕ないじゃん。座ってるだけじゃ、つまんないよ」

まあ、その気持ちはわからないでもない。でも、だからといって何か出来るわけでもない。しばらくは、我慢してもらおうしかないわけで・・・

「あんたね、文句言ったって仕方ないじゃない。そんなこと言ったらマリナなんかもつと退屈じゃないのさ」

美月が、口に運びかけたフォークを持ったまま、ちよつと不機嫌そうに言う。

「私は、大丈夫ですよ。それが仕事ですから。それに、皆さん、退屈しながら集中力が切れないところがすごいですよ」

「まあ、乗員には必要なことだしね。でも、それも、そろそろ限界なのよー。ずっと同じチャートばかり眺めてるとね」

マリナがいつものようにフォローするけど、ケイは本当にダルそうだ。パイロットやエンジンアリングは、繰り返しと言ってもそれなりに動きがあるし、変化もある。たしかに、ナビとメデイカルは辛そうだが。C&Iはどうだろう・・・

「チャートの表示範囲を広げて、周辺航路のトラフィックを見ていると飽きない」

サムが珍しく口をはさむ。そうか、彼女もセンサーの監視レンジを広げて退屈しのぎをしているのかもしれない。

「そっか、その手があったか。周辺航路の状況を見ておくのも私の仕事だしね。午後はそれでやってみよう。ありがとね、サム」

「それなら、広域監視用にくつか機能を追加してあるから、ちよつと使ってみてよ」

「えー、それ大丈夫なの？チャート全体がおかしくなったりしないよねえ」

「もう、信用ないな。まあ、ちよつと冒険なのはたしかだけど、そこまでひどくはないと思  
うよ」

「大丈夫。いくつかは試して見た。よく出来てる」

「え、もう使っちゃったの？いつのまに？」

どうやら、サムはめざとくジョージが入れた機能を見つけて、既に試しているらしい。センサー系に関しては、C&Iはエンジンアリング以上に知識があるから、彼女のお墨付きがあれば大丈夫だろう。

「まいったな。でもまあ、説明する手間がはぶけたか。基本は、長距離センサー情報の処理変更なんだけどね。1Bシリーズのセンサーは2Aシリーズに比べて、性能はかなり落ちる。スキャンできる距離もそうだけど、決定的なのが解像度なんだ。ただ、解像度は、ソフトウェアの処理である程度改善できる。新しいコンピュータの演算能力を使えば、解像度を4倍くらいにすることができるんだ。2Aシリーズに近い解像度が得られる。あと、距離についてはどうしようもないんだけど、これは、航路局のデータを拝借して、スキャン範囲外の部分を擬似的に表示できるようにしてみた。少し、遅延が出るけど、距離は1.5倍くらいまで出せるよ」

「航路局って、もしかして、あたしのインターフェイスを使ってるわけ？」

美月が口をとんがらせてジョージにつつかかる。

「ごめん、先に言っておくべきだったよね。美月の持っている航路局直通回線のインターフェイスは使わせてもらってる。正確には一旦、ケンジとの間で情報共有されたものを使ってる。そうしないと、データの流量をうまく制御できないんだ」

「・・・ってことは、あたしとケンジの両方がいないとダメってことよね」

「正直言ううとそうなんだけどね。でも、これもいずれ、正式に実装される機能みたいだから、それまでの間・・・ってことで」

「ま、いいわ。で？他には何をしてるわけ？」

美月がさらに突っ込む。だが、それには俺も興味がある。ジョージのことだ、まだ他にも隠し球があるに違いない。

「まいったな。お見通しか……。宇宙局専用回線のインターフェイスで、いくつかの衛星システムを使わせてもらってる」

「衛星って、ナビゲーションとか宇宙風関連の情報なら、もともと宇宙艇の通信機能で受信できるだろ」

「いや、結構レア物の情報があるのさ。太陽系内にはいろんな衛星や人工惑星がいる。中にはちよつと面白いセンサーなんかを積んだやつもいるんだ。まあ、どこまで使えるかわかんないけど、とりあえず情報は取れるようにしておいた」

「ちよつと！ 使用料請求していいかしらね？」

「あはは、今度なにか奢るよ。それで勘弁してくれないかな」

「おいおい、いいのか、結構高く付くぞ」

「なによ、それどういう意味？、バカケンジ！」

「いや、そういう意味なんだけどな」

そもそも、この宇宙じゃ、こいつの口に合う食い物なんてないだろう。あるとしたら、地球直輸入物を売りにしてる高級レストランくらいだ。

「私も奢りたい。このデータは私にとってはとても貴重」

「そうだねえ、私もだいぶ助かるからなあ。それ乗るよ。もちろん乗るよねえ、リーダーも」

いきなり俺に振るなよ、ケイの奴……。そこまで甘やかすことないっての。

「何よ、なんか不満そうじゃない？ケンジ。何か文句でもあるの？」

「あ、いや、ありません。俺も、まあ、あれこれ助かってるし」

ああ、弱いなあ、俺って。でもまあ、こいつの雑多なインターフェイスが時々思わぬところで役立つのは事実だからな。まあ、皆がそういうなら乗ってもいいか。

「皆さん、それじゃ今度、お休みの日にお食事会しませんか。いいお店があるんですよ。もちろん美月さんの会費はなしで。私も参加しますから」

てな感じでマリナが最後にうまくまとめてくれる。こうやって、なし崩し的に次の休みの日

に食事会が決まったわけだ。

　昼食時間はこうして終わり、俺たちはまた退屈な訓練に戻ることになる。そう、それは退屈な時間のはずだったのだが……。





「T205、離陸を許可する。カタパルトに進ませよ」

「T205了解」

また、午後の訓練が始まる。今回は離陸後に美月の操縦で月を周回して戻ってくる、ちよつと長めのコースだ。長め、と言っても基礎訓練での話だから、所要時間は1時間くらいである。距離にして片道200万Kmくらいだが、旧型とはいえ、この宇宙艇の速度なら、ゆっくり飛んでもそんなものだ。でもまあ、これまでの離着陸訓練に比べれば、ずいぶんマシである。

「離陸前チェック完了、カタパルト進入」

「サラウンドモードに切り替え」

ぱつと視界が開けた直後、宇宙艇は加速を開始して、あっという間に俺たちは星空のまっただなかに打ち出される。

「T205、インタープラネットコントロールにコンタクトせよ。チャンネルは375B」

「こちらT205、チャンネル375Bにてインタープラネットにコンタクト」

もうL2ステーションはどうに視界から消えている。ここまで来れば、月の軌道近くまでは惑星間管制の管轄である。惑星間管制との通信はC&Iの担当だ。

「インタープラネット、こちらT205、グッデイ！」

「T205、こちらインタープラネット、方位205、236、巡航速度まで加速せよ」

「T205了解、方位205、236、巡航速度まで加速します」

サムの通信にあわせて、ケイがコールする。

「航路クリア、コース表示します」

視界に月方向への航路図と針路の偏差が重ねて表示される。あとは、この偏差をなくす方向に舵を切ればいい。

「オートパイロットオフ、マニュアル操縦に移行。方位修正、205、236」

美月がステイックを握ってコースを修正する。午前中の退屈な訓練でだいぶ感じがつかめたようだ。機体の反応もこころなしか良くなっている気がする。

「方位正常、速度基準点をルナ3に変更」

宇宙空間では絶対的な速度の基準はない。すべて、航路上の基準点に対する相対速度で考える必要がある。目的地によって、航路上の複数の基準点を切り替えながら、速度をコントロールしていく必要があるのだ。

「推力30%、2000Kまで加速」

「加速正常、速度500・・・1000・・・1500・・・1800・・・2000」

「推力0%、慣性航行に移行」

慣性航行、つまり慣性の法則に従って、現在の針路と速度で進むことを意味するのだが、大昔と違って、重力制御や慣性質量制御が一般的な現代では、これは特別な意味を持つ。つまり、エンジンも慣性制御も切った状態で飛ぶ、ということだ。もちろん、大昔の天才物理学者、アインシュタインが言ったように、宇宙空間は平らではない。惑星や太陽の重力によって微妙にゆがんでいるから、慣性航行は完全な直線にはならない。航路図はそれを計算に入れて表示されているのだが、この速度では、些細な変動要因が大きなコースのずれにつながるので気は抜けない。

「コース、速度ともに正常。ウェイポイント、ルナ3まで12分」

ケイのコール。ウェイポイントとは、航路上の経由点で、その宙域にちなんだ名前がつけられている。ルナ3は文字通り、月の公転軌道周辺宙域にある基準点のひとつだ。今回のような短距離飛行では、こうした経由点で管制の管轄が変わり、コースと速度の変更が発生する。月へのアプローチは月公転軌道の少し外側に地球、太陽軸を基準にして時計回りに90度ごとに設定されているルナ1から4のポイントのいずれかを経由してアプローチする決まりになっている。現在、月はルナ1とルナ4の間にあるが、今回は反時計回りに地球を回り込んで、反対側から月にアプローチすることになる。

「了解、現在の速度、コースを維持」

美月も調子は悪くなさそうだ。昨日とは天地の差だ。同じ機体に乗っているなんて信じられない。

「よし、いい感じだな。でも気を抜くな。ここは太陽系で一番混雑してる宙域だからな」

フランクが後から声をかけてくる。たしかにそうだ。月軌道面周辺には様々なステーションが点在していて、惑星間航路やL2のような恒星間航路の起点となっているステーションと地球や月との中継点になっている。訓練用に設定された航路をうっかり外すと、一般航路と交差してしまい、危険なことになりかねない。

「サム、ちよつとあれを試して見てくれないか。長距離レンジの情報を投影してみてよ」

ジョージがサムに声をかける。昼飯時に言ってたやつだな。どんな感じになるのか、お手並み拝見といこう。

「了解。長距離レンジの情報をサウンドに投影します」

サムがそう言った直後、サウンドの映像に周辺航路を飛んでいる船の情報が映し出された。いまさらだが、ものすごい数の船が周辺を飛んでいる。主要な航路上では、船がひしめき合っている状態だ。もちろん、実際の船の間隔はかなり広いのだが、こうして長距離レンジで見ると、まるで蟻の行列だ。

「なによこれ、こんなに飛んでるわけ？」

「うわー、こりゃ、コースはずしたら大変だよ。お二人さん、よろしくねえ」

「そう言うケイも、ちゃんとナビたのむぜ！」

「ナビっても、見てのとおりなんだけどねえ」

「あんたねえ、仕事サボってたら承知しないからね」

「あはは、冗談だって。でも、マジ、私いなくていいかもね。これだけ見えてると」

たしかに、ここまで全部見えてたら、ナビゲーションはいらないかもしれない。でも、これはちよつと情報が多すぎるかもしれない。意識上に投影されているサウンドモードの場合、実際に目で見ているよりも多くの情報を処理できるものの、必要以上の情報は本来の仕事への集中力をそぐ可能性もある。

「エイブラムス、もう少し情報をフィルタしたほうがいいぞ。これは、ちょっと出し過ぎじゃないか？」

「そうですね。特に異常がないパラメータや通常航路の船の情報は、全体から消しましょう。ケイとサムが見えていけばいいでしょうから」

ジョージがそう言うと、他の航路の船の情報が周囲から消えて、星空が戻ってきた。まだ残っているいくつかの船は、通常航路以外を飛んでいる船だ。パトロール船や特別に許可を得て、航路外を飛んでいる船もある。パラメータがグリーンなのは、航路局がそれを承認しているということだ。こうした船が通常航路の船と交差する可能性は低い。俺たちの前後をと飛んでいる訓練艇も表示されている。特に異常もなく、退屈な訓練をこなしているようだ。

「私のも消してくれると嬉しいんだけどなあ・・・」

ケイが小声でつぶやく。

「何言ってるのよ、あんたはそれが仕事じゃない」

美月がそれを聞きつけて嘔み付く。

「もう、美月にはジョークが通じないなあ」

「あんたが言うとな気に聞こえるのよね」

ダメだ、また始まった。こいつら、なにかとこういう絡み方をする。まあ、ジヤブの打ち合いみたいなもんだから、喧嘩にはならないんだが、周囲にはあまりよくない。

「二人とも、実習中なんだから、やめとけよ。そろそろルナ3に近づいてきたぞ」

「おお、リーダーに注意されちゃったよ。えっと、ルナ3まであと3分」

「こちらT205、ルナ3にアプローチ」

サムが管制に通信を入れる。

「T205、ルナ3にてコース変更046、001、チャンネル213Cでルナコントロールにコンタクト」

「コース035、148了解、213Cでルナコントロールにコンタクトします」

ここでコース変更と同時に管制が月公転軌道周辺の管制に切り替わる。ここから月の方向にコースを変え、月を半周して戻ってくることになる。

「ルナ3にてコース変更、046、001。カウントダウン開始、20・・・19・・・」

ケイがカウントダウンを開始する。

「コースセット、046、001。カウントゼロで変更。準備完了」

美月がコールする。

「5・・・4・・・3・・・」

「コース変更！」

「コース変更を確認、コース正常」

「ルナコントロール、こちらT205グッデイ」

「T205、こちらルナコントロール、グッデイ。針路を維持、1500Kに減速せよ」

「こちらT205、1500Kに減速、針路維持了解」

「エンジンリバース10%、1500Kまで減速」

「次のウェイポイント、ルナ2まで6分」

いい感じだ。手順通りに作業が流れている。次のルナ2周辺では、いくつかの航路が交差する。今回のコースでは最も注意が必要なポイントだ。

「ルナステーションBからの出発船に注意しろ！」

フランクが声をかけてくる。ルナステーションBは月公転軌道上の内惑星航路中継ステーションだ。現在はルナ2近くに位置する。惑星間の大型船を高速度で射出してくるので、その航路と交差すると危険なのだ。強力な指向性磁場の干渉ではじき飛ばされる可能性がある。

「ルナステーションB―TCAコントロール、こちらT205、ルナ2に向けて飛行中」

「T205、こちらルナステーションB―TCA、TCA通過を承認。TCA管理情報にリンクせよ」

TCAというのは、ステーションの管轄エリアのことだ。ここを通過する船は、必ずコンタクトして通過承認を得なければいけない。発着船の航路との調整が必要だからだ。TCAにコ

ンタクトすることで、発着船のリアルタイム情報にリンクできる。これで、発着船の航路や指向性磁場の影響範囲などをマップ上に投影できる。

「5分後に出発船、通過リミットは3分」

マップに情報が投影されるとほぼ同時にケイがコールする。

「2分以内に通過できるわ。TCA通過後の針路は？」

「まだコントロールの指示待ちだよ。当面、コース、速度はそのままでもよろしく」

「了解、コース、速度そのまま」

美月とケイのやりとりに、なんとなく緊張してしまう。どうもこの二人の会話にはトゲがあるって言うか・俺の考えすぎだろうか。

「TCAから出るわ。予定どおりね」

「OK。TCA離脱を確認、ルナ2まで30秒」

とりあえず、危険区域は離脱できたようだ。これで、後ろから来る奴らはしばらく足止めだな。そろそろ射出用の指向性磁場が展開されるからマップ上でも確認できるはずだ。

「T205、こちらルナコントロール。ルナ2通過後。針路をルナ1へ、速度基準点をルナ1に変更、1500Kを維持せよ」

「こちらT205、ルナ2通過後ルナ1へ針路変更、ルナ1基準で1500Kを維持、了解」

「コース271、357、変更準備よろしく。ルナ2まであと10秒、9・・・8・・・」

ケイがカウントダウンを入れる。これで、ルナ1から月の周回軌道へのアプローチ体勢に入るわけだ。

「コース変更271、357、エンジンリバーズ10%、ルナ1相対速度1500Kを維持」

「コース、速度正常を確認。ルナ1まで6分」

よし、順調・・・と思ったその時、鋭いアラーム音が響いた。

「後方、異常を検知！」

サムのコールで後方に注意を向けると、マップ上に赤い点。その先には、先ほど通過したルナステーションBから伸びる指向性磁場が伸びている。そして、その磁場に沿って、大型の貨物船が猛スピードで飛び出していくところだ。

「航路を逸脱してる。あのままじゃ突っ込むぞ！」

「あれ、うちの訓練艇だよね」

赤い点は、同型のST1B、つまり俺たちと同じ附属高の訓練艇だ。何が起きたのかはわからないが、いましがた貨物船が通過した射出用の磁場に向かってまっすぐに突っ込んでいく。大型船を惑星間巡航速度まで加速できる磁場に突っ込んだら、小さな訓練艇は木の葉みたいに吹き飛ばされてしまう。破壊はされないだろうが、どこへ飛ばされるかわからない。

見る間に赤い点は磁場の領域に近づき、それから一瞬またいた後に、急角度で方向を変えて流れ星のように飛び去った。

「やばい。飛ばされたぞ」

「救難信号を受信。信号強度は急速に減衰中」

今の飛ばされ方から見て、相当な速度が出てるはずだ。安全装置が働いたとしても乗員は相応なショックを受けているはずだから、意識を失っている可能性が高い。急いでレスキューしないと行方不明になってしまう。

「飛んだ方向はわかるか？」

フランクが尋ねる。

「磁場への接触点を基準に236、084、速度はポイント064C」

速度を小数で表す場合は、光の速度を1とした値になる。約3000Kを越えると、このような表現に変えるのが一般的だ。この速度は光速の0.064倍を意味するから秒速で2万Kmに近い、地球から月までの平均距離をおよそ20秒で飛んでしまう高速だ。

「飛んだ方向がまずいな。惑星軌道面から、どんどん離れていく。発見できなくなるぞ」

そう、惑星軌道面は、惑星間航路のトラフィックも多いので、航路監視の網の目も細かい。

だが、惑星軌道面から離れると、普段は高度な測位機能を持つ恒星間宇宙船しか飛ばないので監視の網の目は一気に粗くなる。惑星軌道面から離れ過ぎれば小さな宇宙艇を発見するのは難しくなってしまう。これは一刻を争う事態だ。

「訓練は中止だ、追うぞ！」

フランクが叫ぶ。

「推定方位032, 078, 推定距離、50万Km。推定誤差は5%」

「とりあえず、行くわよ」

美月は、そう言うと同時に、機首を引き上げて一気に加速する。

「エンジン推力80%、ポイント08Cまで加速。ジョージ、シールドを前方に集中させて！」

「了解、シールド前方に集中。デフレクター展開」

「ルナコントロール、こちらT205、指導教官のフランク・リーブスだ。訓練を中断、事故機のレスキューにまわる」

フランクが管制に連絡を入れる。

「T205、レスキュー開始了解。チャンネル300Aでインタープラネットにコンタクトを」

「T205了解。300Aでインタープラネットにコンタクト」

「インタープラネット、こちらT205、指導教官のフランク・リーブスだ。現在事故機のレスキューに向かっている。誘導をたのむ」

「T205、こちらインタープラネットコントロール。こちらでも今、行方を追っているとこらだ。もう既に惑星軌道面から離れつつあるので、正確な位置がまだつかめていない。おおむねそちらが向かっている方向にいと推定できるが、そちらからは見えないか？」

「エドワーズ、どうだ？」

「既に長距離センサーの範囲外に出ています。航路局からも情報が得られないので、レンジの拡張もできません」

「インタープラネット、こちらT205だ。こちらのセンサーでも探知範囲外に出ってしまったようだ。少しずつ距離を詰めながら探してみる」

「T205, 了解した。こちらでも情報がつかめ次第連絡する」



今の速度は、相手の推定速度を0.02Cほど上回っている。美月が速度差をこのレベルに維持したのは正しい判断だ。コースが間違っていないければ、徐々に追いついていけるが、もしコースが間違っていた場合、速度差をつけすぎるとリカバリーができなくなってしまう。

「ケイ、事故機の推定位置をマッピングできないか？」

「やってみるね。サム、そっちの計算データをちょうだい」

マップ上に、事故発生座標を頂点とした円錐形が表示され、それに沿って、事故機がいる可能性がある範囲が表示される。既にこの船の長距離センサーレンジの外側だ。さらに悪いことには、当初推定値に5%の誤差を加味した範囲は、追いついたとしてもセンサーですべてカバーできないくらいに広がってしまったている。

「かなり厳しいな。星野、中心線に沿って、センサー探知範囲が最大になるような位置につけられるか？」

「やってみます。方位修正、エンジン推力10%、0.1Cまで加速」

間もなく、船のセンサー探知範囲が円錐形の中に入ってきた。しかし、センサーに反応はない。あとは、この範囲内をしらみつぶしに探すしかないのだが、当然時間がかかるほど範囲はどんどん広がっていく。

「エンジンリバース5%、速度を事故機推定速度に同期」

「長距離センサー、依然として反応ありません」

「星野、手前側から順次搜索するぞ」

「了解。搜索範囲設定、自動搜索開始します。」

しかし、搜索範囲は、既に、直径にして100万Km以上の球状に広がっている。そして、それはさらに毎秒1000Kmほどの速さで広がり続けている。この船の長距離センサーでは、直径20万Km程度が限界だ。そもそも今の速度だって、この型の宇宙艇ではめったに出さない速度である。これ以上の速度が出ると、逆にこちらが隕石や宇宙ゴミを回避できなくなってしまう。デフレクターやシールドにも限界はある。大きなのにぶつかったらアウトだ。10分かそこらで見つけられないと、もうどうしようもなくなる。自動搜索モードを使って最大限効率よくやっても、範囲拡大のほうが早くなってしまう。まして、相手が推定誤差範囲外に出ってしまったらもう発見は無理だ。

「厳しいな。このスピードじゃ追いつかない」

フランクが、つぶやく。

「ねえ、ジョージってば、何かいい手はないのかな」

そうだ、ジョージなら何か考えつくかもしれない。

「うーん、そう言われても……。あ、待ってよ。あれが使えるかも」

ジョージはそう言うと、自分のパネルでなにやら操作を始めた。

「あ、いるいる。近くにいるじゃないか」

「何よ、ジョージ。教えなさいよ！」

「いや、科学局が持っている太陽極軌道観測衛星を探してたんだよ。かなりの数があつて、それぞれが、強力なセンサーを持っている上に、複数が連携して精密観測が出来るんだ。主に太陽系外から飛来する小天体や彗星を探すためのものなんだけど、これが使えれば、もしかしたら……。でも、アクセスコードがわからない」

「面倒だからハッキングしちゃえば？」

ケイが言うのももつともだ。非常事態だから、誰も文句は言えないだろう。

「いや、これは厳しいと思う。セキュリティが堅すぎる」

「それなら大丈夫だ、私がアクセスできるから」

フランクが割って入ってくる。そういえば、フランクは附属校に来る前は科学調査をやったんだ。それなら、アクセスコードを知っていても不思議はない。

「まさか、これがこんなところで役に立つとはな……。よし、これで使えるぞ」

「OK、繋がった。サム、これを使ってセンサー拡張をやってみてくれないか？」

「了解。衛星α1から3、β4から6をオンラインに。座標設定入力。小天体探索モードに設定。データ表示します」

サムがそう言った瞬間、マップ上のセンサー探索範囲が一気に10倍以上に広がった。同時に、いくつかの点がマップ上に現れた。このどれかが事故機なのだが、まだそれがどれかは不明だ。

「ST1Bの形状、組成をインプット。再スキャンします」

今度は表示された点が次第に消されていく。そして、一個の点が残った。

「パラメータ一致、拡大します」

サウンドマップの一部に拡大画像が表示される。ぼんやりしているが、確かに宇宙艇の形に見える。

「衛星77から9をオンラインに、解像度を上げます」

画像が少しずつはつきりしてくる。間違いない、ST1B型の宇宙艇だ。驚いたことに、機体のナンバーまで読み取れる。ナンバーは264か。

「よし、間違いない。接近しよう。エドワーズ君、この座標を管制に送ってくれ」

「了解、接近します」

「座標転送完了、管制より救難隊が向かっているとの連絡がありました」

やがて事故機が通常のセンサーレンジに入ってくる。

「緊急システムにアクセスします。船内状況を確認中」

宇宙艇には乗員が操縦不能に陥った時に起動される緊急システムがある。これには、非常用のアクセスコードを持った他の船からアクセスして状態をチェックしたり、遠隔操作できる機能がある。同じアカデミーの訓練艇はこのアクセスコードを共有しているので、非常時には互いにアクセスが可能だ。もちろん、救難隊用にはマスターコードも存在するから、当然、救難隊はこのシステムにアクセスできる。

「生命維持装置は正常動作中。メディカルモニタとエンジニアリングコンソールをこちらに接続します」

「よし、クレア君、クルーの状態をみてくれ。エイブラムス、船のシステムはどうだ？」

「全員、意識はありません。ショックによる脳震盪のようです。怪我の程度は不明ですが、2名ほどバイタルが不安定なクルーがいますね。早急に手当が必要と思われます」

「よし、そのデータを管制経由で救難隊に送信してくれ」

「了解しました」

「先生、船のメインコンピュータは生きてますが、リアクターが落ちているので、セーフモードになっています。エンジン制御系は磁場接触時のショックで故障している可能性があります、詳細はコンピュータを再起動して診断してみないとわかりません。遠隔操作による航行は、この状態では不可能です。シールドも最小限の非常用を除いて使用不能です。大きなデブリとかに当たらなかったのは幸運ですね」

「そうか、とりあえず救難隊が到着するまで、見張っているしかなさそうだな。クルーの容態が心配だが」

「今のところ、重篤な状態にはありませんけど、ダメージの程度がどれくらいか分からないので、できるだけ早く処置したほうがいいと思います」

「そうだな。救急隊も状況はわかっているだろうから、早く到着してくれることを祈ろう」

その時、またアラーム。今度はいったい何だ？

「前方、隕石と思われる小天体群。衝突の可能性があります」

「まづいな、今食らったらアウトだ。衝突までどれくらいだ？」

「約3分です」

まずい。時間がない。それに多少移動しても、隕石群だとどれかが衝突する可能性がある。

「美月、船の進行方向に回り込めるか？」

「OK、やってみるわ」

進行方向をこの船がカバーしていれば、少なくとも、正面からの隕石は回避できる。問題は、その大きさだが・・・

「ジョージ、デフレクターを進行方向に広げられるか？」

「うん、今やってる。ちよっと広げる範囲が広がるから、船体のシールドも強化しておこう」

「たのむ。デフレクターで逸らしきれなかったやつは、こいつで受け止めるしかなさそうだ。」

シールドが持つてくれるといいんだけどな」

「エイブラムス、エンジンパワーをバイパスしてデフレクターを強化できないか？」

「やってみます」

「エンジンの余力も残しておいてよ！ 衝突の反動で後の船にぶつかるはずいから」

「了解、そっちもなんとかする」

「衝突推定時刻まであと30秒。隕石は小石くらいからフットボールくらいまでの範囲、  
相対速度はポイント067C」

「速いな、小石級ならまだいいが、フットボール級だと厳しいかもしれん。全員、衝撃に備えてくれ」

「了解！」

「シートホールドを非常モードに切り替えるよ。ちょっと動きづらくなるけど、我慢してくれ」

この時代、シートベルトなどというものは存在しない。空間粘性制御、つまり重力エンジンや慣性制御と同じように、ヒッグス粒子の作用で、物体に周囲の空間が及ぼす抗力を強化することで、衝撃を吸収するのがこのシートホールド装置である。通常は、ベルトと同じように体の一部にのみ作用しているのだが、非常モードでは衝撃を受けた瞬間に全身を保護するように働く。ただ、この力は人間の体の機能も阻害するので、必要な瞬間のみ作用させる必要がある。このために、あらかじめ微弱なフィールドを全身に広げておく必要があるのだが、それが体の動きに少し抵抗感をもたらすのである。力を抜いていれば、やんわりと抱きかかえられているようなこち良い感触なのだが、動こうとすると体がちよつと重い。

「あと10秒で危険領域！」

これはもう運を天に任せるしかなさそうだ。マップ上を複数の赤い点が迫ってくる。次の瞬間、目の前に流星のような閃光が走る。デフレクターに当たった小隕石の残した痕跡だ。そしてその後、大きな閃光と衝撃があつて、サラウンドの画像が一瞬ゆらいで消えた。次の瞬間、俺たちは非常灯に照らされたコックピットにいた。

「みんな大丈夫か？ ダメージは？」

フランクが叫ぶ。見る限り、みんな意識はあるようだ。

「セーフモードに落ちたみたいです。デフレクターの過負荷でサージが発生して安全装置が働いたようですね。機体については、ちよつとキズがついたくらいで、大きなダメージはありません」

ジョージが答える。

「操縦系統はオフライン、メインエンジンは使えない。スラスタは、どうにかマニュアルで使えそうね」

美月も、とりあえず大丈夫そうだ。だが、この状態だと機体の制御がかなり難しい。

「エイブラムス、再起動できるか？」

「今やってますが、リアクターが非常停止して予備のパワースourceに切り替わってしまっているんで、少し時間がかかりそうです。とりあえず、最小限のパワーで復旧できるところを優先します」

この船のように重力エンジンを搭載した宇宙艇には、エネルギー源として反物質リアクターが装備されている。質量を直接エネルギーに変換できる反物質リアクターだが、不安定な反物質を取り扱うため、何重にも安全装置が施されている。万一、リアクターが暴走すれば、熱核爆弾数千発分の大爆発を起こす可能性があるんで、少しでも不安定化する兆候があれば、すぐにシャットダウンされるようになっていのである。同時に、絶対零度に近い温度まで、リアクターコアを強制冷却する仕組みも加わっている。再起動するためには、これを作動可能な温度に戻して、それから反物質をプラズマ化して通常物質と反応させる装置を起動する。このプロセスには少なくとも数分以上かかる。

「短距離センサー復旧。センサーレンジに障害物なし。事故機との間隔に注意！」

サムの声。短距離センサーのレンジは限られているから、そこに障害物があったら、あつと

いう間にぶつかっている。なので、これは気休めに過ぎない。しかし、事故機との接触は避けたい。エンジンが使えない状態でスラスターだけで機体を制御するのはかなり難しい。

「詰まってきたるな。間隔を保たないとまずいぞ」

「スラスターを使ってやってみるわ。センサー情報をこっちにまわして！」

美月が叫ぶ。でも、美月一人でこいつのマニュアル操縦は無理だ。TS5型シャトルよりもっと制御が難しい機体なのだから。

「美月、無理するな。手伝うから、軸制御をどれかこっちに回せ」

「大丈夫よ・・・と言いたいとこだけど、あんたが半分責任持ってくれるってんならいいわよ。手伝いなさい！」

まったく、素直じゃない奴だ。シャトルの時だって、俺が手伝わなかったらどうなったか・・・

「それじゃ、XY軸を頼むわ。機体を向こうに対して平行に保って！」

あはは、結局一番面倒な奴をまわしてくるわけだ。今回ははっきり言えばZ軸がどうなってしまうのが関係ない、推力のかかる方向だからな。結局、美月は速度だけコントロールしてればいいことになる。

「了解、任せろ」

とは言っただけ見たものの、この機体のスラスター制御はかなり微妙だ。なかなか軸が安定しない。

「何やってんのよ、Y軸が5度傾いてるわよ。X軸も3度！」

なんだか、これはデジャブのような・・・。役割は入れ替わっているのだけど。おまけに、TS5に比べたらこいつはじゃじゃ馬に等しい。

「中井、私が替わろう。君はエイブラムスを手伝ってやってくれ」

そうだった。腕利きパイロットがいるじゃないか。フランク先生。お手並み拝見させていた

できますよ。

「お願いします。そちらにXY軸制御を移行します。いいですか？」

「よし、回してくれ」

「どうぞ」

フランクが操縦を引き継ぐ。小刻みにスラスタを動かして、あっという間に機体を安定させてしまった。さすがだ。でも、ちょっと悔しい。

「さすが、先生。ケンジ、まだまだ修行が足りないわね！」

「人のこと言ってる場合か！ お前の番だぞ。相対速度をきちんとコントロールしろよ」

「うるさいわね、やっってるわよ」

そう言いながら、美月もかなり苦勞している。事故機との間隔がなかなか安定しない。

「星野、今の3分の1のパワーでいい。小刻みに噴かせ」

「・・・」

フランクのアドバイスで、ようやく間隔が安定してくる。

「よし、いいぞ。こいつのスラスタは高速航行時に対応できるように、それなりにパワーがあるから、マニュアルでやるときは抑えめに使うんだ」

なるほど、これはいい勉強になる。おっと、そうだった。ジョージを手伝わないといけない。

「ジョージ、俺は何をすればいい？」

「メインコンピュータを低速モードで再起動してくれないか。フル稼働できなくても、少しは操縦の助けになるだろうから」

「了解。やってみる」

たしかに、低速モードなら、非常用パワースourceでも起動できる。機能は限られるが、ないよりはいい。

「メインコンピュータ、低速モードで起動。OSのロードを開始」



「起動したら、緊急時支援用のプログラムを実行してくれ」

「了解。よし、OS起動完了、緊急時支援用プログラムを起動」

一瞬間があつて、機内の照明が明るくなり、パイロット用の仮想パネルが表示される。まだサラウンドモードは使えないし、最低限の制御機能しかないが、機体の状態は格段に把握しやすくなる。長距離センサーも通常の30%程度の距離なら使えるから、周囲の警戒も多少はできるようになる。ただ、おそらく1時間くらいでパワーが切れるから、それまでにリアクターを復旧しないとまずい。

「美月、姿勢制御をセミオートに切り替えてみる」

「了解。姿勢制御をセミオートに。センサーと連動して、相対位置を維持するように設定。これでちよつと落ち着くわね」

「そうだな。ジョージ、リアクターは起動できそうか？」

「もうしばらくかかりそうだ。緊急冷却状態から、あまり急に戻すと不安定化する恐れがあるからね」

「慎重にたのむよ。リアルの世界で爆発には巻き込まれたくないからな」

「反物質リアクターコアが暴走したらそれこそアウトだ。太陽系全体を照らすような花火にはなりたくない。」

「沢村、今の速度ベクトルを太陽中心座標系で算出してくれないか」

「フランクがケイに声をかける。そうだ、通信も復旧できるから、救助隊に座標を知らせないといけない。」

「了解しました。測位衛星の信号を受信、解析中・・・結果できました。誤差0.05%です」

「よし、エドワーズ君はそれをインタープラネット管制に送ってくれ」

「了解、送信します・・・管制より連絡。救助隊は30分以内に合流可能とのことですよ」

「30分か、しばらくかかるな。よし、まだ気を抜くなよ。事故船のほうの状態はどうだ？」

「システムはセーフモード、リアクターは停止中で非常用パワースourceのみが稼働しています。生命維持システムはあと1時間持つかどうか・・・ちよつとぎりぎりですよ」

「乗員の意識は依然としてありません。内2名の状態があまりよくありません。血圧も低下気味です。こちらでも急いで手当が必要です」

全体的に、かなりきわどい状態だ。救助隊が予定通り合流してくればいいが、でないともんな共倒れになる可能性もある。かといって、何か出来ることはあるのか……。

「リアクター温度、あと5分で正常範囲。起動準備に入ります」

ジョージのコール。どうか、こちらのリアクターは起動出来そうだな。パワーが戻れば、出来ることも増える。

「エイブラムス、万一に備えて、むこうのリアクターも起動できないか？」

フランクがジョージに問いかける。

「単純に緊急停止してるだけなら、同じ手順で起動出来るはずですが、一度、コンピュータを再起動して診断させてみないと、なんとも言えませんね。もし故障してると、最悪、ドカーンですから」

「だが、コンピュータを再起動すれば、パワーを余計に消費することになる。生命維持装置を最優先で考えれば、それは無理だな」

「こちらのパワーが戻れば、こちらのコンピュータを繋いで診断できるんですけどね」

「よし、それじゃ、リアクターを起動したら、コンピュータを通常モードにして、やってみてくれ」

「わかりました」

あっちのリアクターも起動出来れば、最悪、さっきのような事態でも、遠隔操作で一緒に逃げる事ができるかもしれない。救助隊が到着するのと、どっちが早いかというようなレベルだが、万一を考えれば選択肢は多い方がいい。

「緊急チャンネルで救助隊と繋がりました。直接こちらに誘導します。合流予想時間は約20分後」

「よし、あと20分の辛抱だ、気は抜くなよ！」

「あと20分、なんとなく長く感じるよな」

「そうね、あんたは日頃の行いが良くないから、こういう時に祟られるのよね」

「お前に言われたくはないぞ」

「一緒にしないでよね。それでも私は……」

美月が一瞬口ごもる。そうだ、思い出したな。その先を言うと、とたんに良くないことが起きるのは、一年ちよつと前に実証済みだ。神様、なんてものがあるならば、という話だが、俺も美月もあまり受けはよくないらしいから。

「あれ？ こりゃちよつとまずいな」

ジョージがつぶやく。

「どうした？」

フランクが問い返す。

「リアクターコアの温度がちよつと不均一になってきてます。加熱にムラが出ているようですね。一旦、加熱を切って温度が平均化するのを待つ必要があります」

「起動時間はどれくらい延びる？」

「5分ほど温度を一定に保ってから再加熱して5分、あと10分くらいといったところです」  
「よし、それで行こう。無理は禁物だ」

ちよつと危なかったな。これは、美月に余計なことと言うなよという警告だろう。美月もちよつと表情が硬くなっている。でもまあ、これでこいつも、もう余計なことと言わないだろう。

「ちよつと！ 何、人の顔見てニヤニヤしてんのよ。キモいわね！」

「いや、きわどかったな、と思っただけ」

「う、うるさいわね、バカケンジ！」

まあ、俺がバカよばわりされている分にはまだまだ平和だということだ。多少理不尽さを感じない訳じゃないが、ピンチ続きよりはマシというものだろう。とりあえず、救助隊が到着するまでは、大人しくしていよう。そうすれば・・・

「ねえ、これちよつとマズくない？」

今度はケイか？ 何があったんだ。

「今度は何だ？」

「今の軌道だと、あと10分ちよつとで、ワープアウトゾーンに入っちゃうかも」

ワープアウトゾーン、そいつはまずい。外宇宙から太陽系にやってくる恒星間宇宙船は、惑星、とりわけ木星や土星などの重力の影響や、小惑星、太陽系内を航行する宇宙船などを避けるため、惑星軌道面から離れた場所でワープから通常空間に戻る。そのために設定された領域がワープアウトゾーンだ。うっかりここに入り込むと、いきなり巨大な恒星間宇宙船と鉢合わせしかねない。ぶつからないまでも、ワープアウトの衝撃波をまともに食らうと、こんな小舟はかなり辛いことになる。ワープアウトでできる空間の境界面は一種のブラックホールのようなものだ。周囲の空間を大きく歪ませるから、強い潮汐効果が働く。とりわけ、巨大な貨物船などと出くわすと、危険きわまりないことになるのである。従って、ワープアウトゾーン周辺は通常航行が厳しく制限されている。つまり、ちよつとマズいなんてレベルではないわけで……

「それはまずいぞ。とりあえず管制に連絡して対応してもらおう」

フランクがそう言うと、サムが管制を呼び出す。

「先生、インタープラネットは、管轄外だからインターステラコントロールにコンタクトしろと言ってます。とりあえず、連絡はしてはくれるようですが、詳細は直接やれと」

「まったく、そんなことを言ってる場合じゃないんだが……。そもそもこの船の通信機は恒星間航路用のハイレベルワープ通信チャンネルには対応できないぞ」

そうだ。そもそもこの船は太陽系内の航行を前提に作られている。太陽系内でも、昔ながらの無線交信では最大数時間の遅延が生じるので、ローレベルのワープ通信チャンネルが使われている。ローレベルと言っても、宇宙船の速度で言えば、レベル10から12くらいのワープ速度と同等だ。地球、冥王星間で数秒、数十秒程度の遅延ですむレベルである。最新型の宇宙船と同じくらいのスピードだ。一方、恒星間ではその通信遅延が年単位から数百年単位になる上、距離による減衰も大きいため、最低限の遅延で通信ができる高いレベルのワープ通信が使用される。実際、最も長距離用のチャンネルでは100光年の距離でも数秒しか遅延が発生しない。このレベルのワープは通信でしか実現されておらず、レベル32くらいのワープ速度と同等のものである。このレベルになると通信とは言え、かなりのエネルギーを必要とするから、通常、惑星軌道内を飛ぶために作られる船には特殊なものを除いては装備されていないのである。

「ST2Aだったらな。あいつなら恒星間通信にも対応できるのに」

「無い物をねだってどうするのよ。なんとか出来ないわけ？」

美月の言うとおりで。でも、どうすればいい？

「パワーがあれば、短時間なら短距離用の恒星間チャンネルにアクセスできるように通信機能を拡張できます。長時間だと出力回路が焼き切れる危険はありますが・・・」

と、サムの声。

「先生、リアクターさえ起動できれば、回路をバイパスして通信機にパワーをまわせると思いますが、その場合、動力やシールドの復旧は後回しになります」

「それは、究極の選択だな。今はどちらも同じくらい重要だ。それに、通信機が壊れたら、それこそ迷子になってしまう。安易に決断はできないぞ」

そのとおりで。運良く連絡がついたとしても、間に合わない場合だってある。同時にコース変更もできないとリスクが大きい。

「ねえ、ジョージ。あんた、私のDI経由で航路局の回線使ってるのよね」

「そうだけど・・・あ、そうか、それが使えるじゃないか」

「まったく、早く気がつきなさいよ。使用料はいらぬから、さっさとやって」

「美月、どういうことだ？直通回線って・・・」

「あんたもニブいわね。ケンジ、航路管制は全部航路局が仕切ってるんじゃない。直通回線が使えるんだったら、インターステラ管制センターにも直通で連絡出来るってのよ！」

「そうか、それは思いつかなかったな」

「まったく、そんなリーダーじゃ先が思いやられるわ」

いや、そんなこと普通は誰も思いつかないはずだ。そもそも、個人で航路局の回線に直接インターフェイスできる奴なんて、そうそういないからな。まあ、それを言ってしまうと、またお嬢様のご機嫌斜めになりそうだからやめておくとして・・・。

「よし、回線を繋いだよ。サム、たのむよ」

「了解。宇宙局のディレクトリを検索、インターステラ管制センターの緊急用アドレスにコネクタクトします」

「よし、繋がったら私にまわしてくれ。私から話そう」

そうだ、学生が連絡するより教師がやったほうが、何かと話が早い。連絡はフランク先生に任せて、俺たちはこの船の再起動をやるう。

「ジョージ、リアクターはどうだ？」

「うん、だいぶ温度が安定してきたから、そろそろ加熱を再開してもよさそうだ」

「よし、じゃ、そっちは頼む。ケイ、ワープアウトゾーンに入るまであとどれくらいだ？」

「ゾーン境界の緩衝宙域まで、およそ6分よ。そこから30秒くらいでゾーン内に入ることになるね」

「ギリギリ、動力が戻るかどうかってとこだな。マリナ、向こうの様子は？」

「やはり二人ほど、状態が悪いですね。これ以上ショックをあたえるとまずそうです」

「わかった。つまり、もう一度、さっきみたいな事があつたらアウトってことだな」

「はい。そういう事態はなんとか避けてください」

マリナも、あつさり言ってくれるのだけど、パワーを失った状態でそれはほとんど運任せなわけだ。なんとかあと数分、無事に過ぎてくれることを祈るしかない。問題は、パワーが回復できたとして、事故船を含めての軌道変更がまた難題だ。下手に衝撃を与えられないとなれば余計難しい。牽引しようにも慣性制御が切れた状態で急なコース変更をやれば、強烈なGが乗員にかかってしまう。だが、これだけの速度で、人が耐えられるレベルの加速では満足なコース修正なんて不可能だ。これも究極の選択じゃないか。

「聞いてくれ」

管制センターと話をしていたフランクがこちらに向いて言う。

「いま、管制と連絡がついたんだが、これからの時間帯、到着船がかなり混み合っているらしい。一部はどうか、他のエリアに振り向けることが出来そうだが、全部は無理そうだ。ワープアウトしてくる船の推定時刻と位置のデータを受け取れるようにしてもらったが、どうかその位置を避けながら飛ぶしかなさそうだ」

「ケイ、マップに出せるか？」

「ちよつと待ってよ、これだよね」

マップ上に、いくつかの球面が表示される。そして、その中心から方向を示す矢印と、予想時刻が表示される。

「これって誤差は？」

「だから、この球面の中のどこに来るかはわからないよ。船の規模から推定した影響範囲を計算して見るね」

球面の外側に、薄い赤色でさらに大きな球面が表示される。それぞれ大きさが異なるのは、船の大きさ、つまりワープアウト時の衝撃波の大きさが反映されているからだ。船の数は多くないが、どれも大型船らしく、かなり広い範囲に影響が出そうだ。

「こりゃあ、・・・厳しいな・・・」

フランクが唸る。

「単独ならまだしも、事故船を引っ張っての軌道変更は厳しいぞ。慣性制御が切れた状態だと、たかだか1Gの加速度でも悪影響を及ぼしかねない」

「できれば、0.2G以内に抑えたいですね」

フランクの言葉にマリナが付け加える。

「ケイ、0.2Gを最大にして、可能な回避コースを計算出来るか？」

「0.2Gはちよつと厳しいと思うよ・・・、うーん、こんな感じでちよつとムリっぽいんだけど」

ケイがマップに投影したコースは、いずれも赤い球面の内側を通過してしまうコースだ。あとはタイミングだが、ワープアウト予定時刻にもかなり誤差があるから、それを考慮するとリスクがかなり大きくなる。

「ちなみに、ワープアウト時刻の誤差を考慮した航路上の危険範囲はこんな感じだよね」

やはり、どの航路も危険範囲を含んでしまっているようだ。事故船の動力が復旧できなければ、かなり危険なことになってしまう。とはいえ、こちらの復旧すらぎりぎりだから、そんな余裕はないわけで、つまりは八方塞がりというわけだが・・・。

「リアクター温度、起動可能範囲まで上がりました。起動シーケンスを開始します」

ジョージはそう言うと、手際よく起動シーケンスを開始する。リアクターのパワーゲージが

徐々に上がって反応臨界点を超える。コックピット内に明るさが戻ってきた。

「メインコンピュータを通常モードに切り替えるよ」

ジョージがそう言った瞬間に、これまで消えていた計器パネルがすべて戻ってきた。だが、このあとどうするか……。

「エンジン始動。牽引ビームも使えます」

美月が叫ぶ。

「よし、とりあえず、一番リスクが少ないコースに向かうんだ」

「了解、牽引を開始。加速0・2G以内でコース変更開始」

これは、かなり厳しい。この船の牽引ビームでは、同じ大きさの船を引っ張るには少し無理がある。コースがいまひとつ安定しないから、誤差が次第に大きくなっていく。

「これはまずいな。0・2Gでも安定しないのか。ちよつと交替だ」

フランクがまた操縦を交替する。しかし、今度はさすがのフランクもかなり手こずっているようだ。そもそも、メインコンピュータのアシストがあつてこの状態だから、状況はかなり厳しいわけで……。

「緩衝宙域に入りました。あと30秒でワープアウトゾーンに入ります」

ケイが叫ぶ。ワープアウトゾーン境界ぎりぎりまで、赤い領域が伸びているから、つまりはあと30秒で危険領域に飛び込むということだ。時間が無い。どうする？

「先生、ひとつ手があります」

とジョージ。

「なんだ、なんでもいい、言ってみろ！」

「向こうとの距離をぎりぎりまで詰めて、こちらの重力エンジンで一緒に引っ張るってのは、



どうです？」

「そりゃ無茶だ、どこに飛んで行くか分からんぞ」

「エンジンの重力場をうまく調整して拡散させれば、パワーはかなり落ちますが、この船のメインコンピュータなら制御は可能です。それに、重力場の加速なら、自由落下ですから向こうにも衝撃は及びません」

「よし、わかった。やって見ろ。私は距離をぎりぎりまで詰めてみよう」

「一旦エンジンのパワーを落とします。調整はスラスタを使ってください」

「了解した。星野、私が姿勢を保つから、牽引ビームを調整して徐々に距離を詰めてくれ」

「わかりました」

「先生、なんとか50m以内まで接近してください。それくらいが限界です」

宇宙空間で50mの距離なんて衝突してもおかしくない距離である。もちろん、牽引ビームもコンピュータのアシストがあるので、そんな微妙な制御もなんとかできるのだが、心臓にはよくない。それにしても、コンピュータを新型に交換したことが幸いているのは間違いないだろう。

「距離、100m、90m、80m・・・」

「ワープアウトゾーンに入ります。20秒で危険領域」

ケイが叫ぶ。もう時間がない。

「60m、50m。現在の距離を維持」

「美月、牽引ビームの制御をこっちにもらうよ。エンジンと連動させて制御するから」

「OK, そっちに渡すわ。よろしく」

なんか、俺の出る幕がないのだが、とりあえず、作業は任せて、何か問題が起きた時に備えておくとしよう。

「前方、重力波振動を検知、ワープアウトの前兆と思われます」

サムが叫ぶ。やばい、出てくる前に方向を変えないと、この船の重力エンジンなんて比較にならないほどの強烈な重力波が襲ってくる。

「エンジン起動、重力場を拡張して展開。推力、進行方向に対してマイナス30%。ワープ

アウト想定位置基準で減速中……」

「これじゃ間に合わないぞ。サム、ワープアウトの方向はわかるか」

「10%の誤差で推定可能」

「よし、その方向を避けて、加速しよう」

「針路、060、340へ」

すかさずケイが針路指示を出す。

「OK、060、340、推力50%……これが限界なの？」

「なんとか回避させてくれ！」

俺たちは、ワープアウトしてくる船の背後に回り込む針路を取る。ワープアウトの衝撃波は前方が最も強い。後方も影響がないわけではないが、前方に比べればかなり弱くなる。それに、出てきた船との鉢合わせもしなくて済むわけだ。

「ジョージ、サラウンドに切り替えられるか？」

「OK、切り替えるよ」

視界が、一瞬またたいて、俺たちは星の海の中に浮かぶ。そして、その直後、左手の星たちの姿が、ぐにやりと曲がって、真ん中に真っ暗な球体が現れ、次の瞬間、大きな船がその中から飛び出してきた。まるで、星たちを押しつけて突然現れたような感じだ。実際はワープアウトの際に生じる重力場で背後の星の光がゆがめられたわけだが、そこからさざ波のように、ゆらぎが周囲の星に広がってゆく。

「来るぞ！気をつけろ！」

フランクが叫ぶのとほぼ同時に、機体が大きく揺れた。単に揺れただけではなく、一瞬引き延ばされて、その後、押しつぶされたような感じで、それが何度もやってくる。宇宙の大波に翻弄される小舟、というような感じだろう。目眩と船酔いのような感覚が、繰り返し襲ってくる。

「うえっ、気持ち悪い……」

「ほんと、ひどいわね。ワープ酔いみたい……」

「ああ、ワープ酔いと同じものが原因だからな。ジョージ、船は大丈夫か？」

「こっちはどうにか大丈夫そうだ。重力波でエンジンの安全装置が働いてダウンしてるけど、再起動はすぐできるよ。でも、その前にちょっとトイレに行っていいかな……うつぶ……」

ジョージはかなり辛そうだ。実際、俺も結構きてたりする。

「もうちょっと我慢しろ。向こうはどうだ？乗員は大丈夫か？」

フランクが叫ぶ。

「あまり状態がいいとは言えませんが、大きな変化はありません。ただ、急いだ方がいいかと思えます」

マリナが少し不安そうな声で答える。これで終わりならばいいのだが、もう一度大きいのを食らうとどうなるかわからない。

「ジョージ、エンジンの再起動をたのむ。早くここを出ないとまずい」

「今やつてる……うつぶ、もうちょい……」

「ケンジ、ますいわ。事故船が漂い始めた。エンジンなしじゃ、牽引しきれない」

「美月、とりあえず向こうに合わせて距離を保てるか？」

「なんとかやってみるわ」

早くエンジンを復旧して、こいつをつれてワープアウトゾーンから出ないと、救助隊だってこのゾーンには簡単には入れないだろう。

「救助隊から通信、現在、ワープアウトゾーン境界で待機中。出ることは可能かと聞いてきています」

「努力はするが、難しいかもしれないと伝えてくれ。既にかなり入り込んでしまっているからな」

フランクはそういうと、ジョージの様子を見に行く。

「どうだ、動きそうか？」

「はい、再起動はもう出来ます……ですが、ちょっと問題が」

「問題？」

「さっきの衝撃で、スタビライザーの調整が狂ったようで、出力が安定しないかもしれません」

「まずいな。調整にどれくらいかかる？」

「やってみないと分かりませんが、結構かかると思います。5%程度の出力ならそれほど大きな変動は出ないので、とりあえず、動かした方がいいと思います」

「そうだな、とりあえず再起動してゾーンから出る方向に針路を向けよう」

「了解。エンジン再起動シーケンス開始。再起動まで10秒」

「星野、再起動したらゆっくりとコースを変えて加速しろ。ゆっくりだぞ」

「わかりました。ケイ、最短コースは？」

「コース、080、230、ゾーン境界まで120万Km」

「了解。コース設定080、230」

「OK、再起動したよ」

「エンジン推力1%で始動、段階的に5%まで上げるわよ」

「エドワーズ君、救助隊に脱出予定座標を連絡してくれ」

「了解。推定座標を転送します」

美月は、ゆっくりと船を加速させていく。エンジンの出力ゲージは、小刻みに揺れている。やはり変動が少しあるようだ。推力が上がるに従って揺れが大きくなる。やがて船体が少し振動を始める。

「出力3%、そろそろきつくなってきたわね」

「これだと5%もぎりぎりだな。これ以上変動が大きくなると、事故船を引き留めておくのが難しくなるぞ。この出力で少し様子を見よう」

「ケンジ、そんな悠長なこと言ってるんじゃないわよ。こうしてる間にも、別の大型船がワープアウトしてくるかもしれないのに！」

たしかに美月の言うとおりだが、さりとて、事故船を逃がしてしまえば本末転倒、俺たちがこれまでやってきたことが水の泡になるわけ・・・。

「方位120、350、距離35万Kmに重力波源を検知。ワープアウトの兆候と思われる」

ほら来た。35万Kmはかなり近い。重力波の伝わる速度は光速だ。ここでワープアウトされたら1秒ちよっとでさつきより数段きついやつを食らう可能性がある。

「方位修正240、010、とにかく離れるわ。ちょっと揺れるわよ！」

美月が叫ぶ。同時に、機体の揺れが一段と激しくなった。かなり厳しい感じだ。

「推力5%、これじゃ間に合わない・・・」

「美月、これ以上は危ないぞ、もう限界だ」

「わかってるわよ。でも、結局、このままじゃ、衝撃波でバラバラになるわ。どのみちダメなら、イチかバチかやるしかないじゃない！」

たしかに美月が言うとおりで。だが、このまま加速しても結果は同じかもしれない。

「星野が言うとおりで。だが、やるなら、事故船との間隔をギリギリまで詰めるんだ。そうしないと衝撃で、どこへ飛んで行くか分からんぞ」

「ケンジ、牽引ビームは任せるわ。お願い」

「わかった、やってみる」

距離を詰めると簡単に言うが、ただでさえ不安定なエンジンの重力場の中で、牽引ビームを操るのも簡単じゃない。下手をすれば、牽引が切れてしまう可能性もある。そもそも、この機体の牽引ビームは自分と同じ大きさの船を引っ張るために作られた物じゃない。既に出力だつていっぱいだ。エンジンの重力場を広げて一緒に引っ張っているから、とりあえず位置関係だけは保っているものの、相手の機体が間違つてエンジンの有効範囲から出てしまうと、その瞬間に軌道から外れてどこかへ飛んで行ってしまふだろう。

「エンジンの出力を上げるわよ」

「ゆっくり、ゆっくりだぞ」

「出力、段階的に10%までいくわ」

美月がそう言うと、機体の振動がまた一段と激しくなった。牽引ビームの余裕がだんだん無くなつていく。

「くそ、安定しない・・・このままじゃ、引き留められない」

「ぐずぐず言つてないで何とかしなさいよ、ケンジ。こっちもギリギリなんだから。もう一段加速できないと、間に合わない」

そう言っても、これ以上、変動が大きくなると牽引ビームが持たない。

「重力波の振幅が増大、15秒プラスマイナス3秒でワープアウト開始と推定」

またしても・・・ピンチだ。どうすりゃいい、このままじゃ共倒れになっちゃう。どうすれば・・・



もう考えている時間はない。こうなったら一か八かだ。

「美月、10秒だけ最大加速かけろ！」

「最大？」

「いいから、やるんだ」

「いいわ、いくわよ！」

ガクンと衝撃があつて、背景のマップが一気に流れる。俺は、牽引ビームをカットした。へたに制御しようとせず、エンジンの重力場で引張った方がいい。自由落下なので衝撃が無いからだ。たとえばぐれても、相当な速度が得られるから、とりあえず、ここからは出られないだろう。

「5、4、3、2、エンジンカット。速度ポイント3C。ゾーン境界まで10秒」

「思ったほど衝撃がなかったな」

「どうやら、コンピュータが補正してくれたみたいだね」

「もう調整が終わったのか？」

「いや、コンピュータが学習したんだよ」

「学習？」

「うん、実は、コンピュータの余力を使って、SF2Aの自律制御系をシミュレーションするプログラムを入れてあつたんだ。それが効いたらしい。本物ほどの性能は出ないけど役にはたつたみたいだね」

ジョージの奴、そんな仕掛けがあるならもっと早く言えよ。でも、事故船はこれで見失ってしまった。どうにか、ぎりぎり逃げられたとは思うのだが、この速度ではもう追跡できない。

「事故船の予想針路は出るか？」

「いや、位置と速度は追跡できてるよ」

「追跡？どうやって」

「観測衛星に自動追尾させてる。マップに出すよ」

サラウンドマップに赤い点とその座標、速度が表示される。

「ケイ、合流コースを出せるか？」

「リアルタイムで計算してるよ。そっちにデータを回すね」

「美月、コースに乗ってくれ」

「了解。エンジンの反応もだいぶよくなったわね」

マップ上には合流コースが表示されている。美月がそのコースに船を乗せると合流予想時間が表示される。

「かなり時間がかかるな。相手は漂流状態でシステムも止まってるから、心配だが」

フランクが言う。

「エドワーズ君、救助隊の現在位置はどうだ。どっちが早い？」

「当初予定位置からかなりずれているので、こちらより早く追いつくのは難しいかもしれない。座標は送ります」

「よし、たのむ。こっちも急ごう」

マップ上に、救助隊の青いマークが表示される。向こうも動き出したようだ。だが、速度は惑星間航路では、まず出さないような高速である。救助艇も高速艇だが、この訓練艇とあまり大差がない。既に限界近い速度が出ているので、追いかけるのはかなり厳しいだろう。とにかく、先に着いた方が急いで対処しないといけない。

「コースに乗ったわ。合流まで20分くらいよ」

「離れる前の状態から見て、クルーの様子が気になります。メディカルモニタが切れているので状態がわかりませんから」

「サム、通信可能範囲まではどれくらいかかる？」

「通常の通信方式による接続可能距離まで、推定17分プラスマイナス20秒」

「直前だな。ジョージ、何か手は？」

「そうだね、コマンドを送って非常用のテレメトリーを起動してみよう。双方向通信はムリでも、受信だけならできるだろうから。観測衛星からコマンドを送信させてみるから、受信できるか試して見てくれないか」

「了解、テレメトリー受信を待機」

「じゃ、コマンド送信するよ」



宇宙船や基地との間の通信は高度にデジタル化されている。音声、映像、様々なデータはすべて統合されてコンピュータ間で通信が行われる。しかし、今回のように相手が応答出来ない場合、まず接近して非常用回線からアクセスする必要がある。それから、相手のコンピュータを介して通常回線をオープンして接続を確立する。一方、こうした方式がとれない場合や、メインコンピュータがダウンしているような場合、外部から状況を知ることが出来るように、一方的に最小限の情報を周囲に送信するモードが用意されている。これが非常用テレメトリーだ。これだと、特定の非常用チャンネルを使って、セキユリティーコードを送ることで、どこからでも起動が可能だ。

「テレメトリー受信を確認。メデイカルに接続します」

サムが受信したデータをメデイカルコンソールへ接続する。これで、マリナが事故船のクルーの様子をモニタできるはずだ。

「クレア君、どうだ？」

フランクが聞く。

「状態は・・・かなり悪いです。一人に血圧の低下が見られます。心拍も弱いですから、かなり危険な状態と思われれます。他のクルーも状態は悪化してますね。血中の酸素濃度が下がっているのは、もしかしたら環境維持系が故障しているのかもしれない」

「ジョージ、そっちはチェック出来るか？」

「ちよつと待ってください・・・。うん、たしかに環境維持システムにエラーが出てる。でも、これじゃ詳細はわからないな。でも、最悪、船内の酸素供給が止まっているとすれば、一刻を争うぞ」

「酸素があっても、浄化システムが止まって二酸化炭素濃度が増加すれば危険です。テレメトリーからは、その傾向も出てますから」

クレアがいつになく真剣な顔で言う。メデイカルにしてみれば、こういう状況で指をくわえて見ているのは耐えられないだろう。

「今の情報は救難艇とも共有しておこう」

フランクが言う。

「テレメトリー情報は救難艇でも受信できています。彼らの見解も同じです。時間の勝負だと」

サムは救難艇との通信を維持し続けていたようである。とはいえ、どちらも速度はほぼ限界まで出ている。これ以上時間を短縮するのは困難だ。どうすればいい……

「エドワーズ君、もう一度インターステラに通信を繋いでくれないか」

フランクが言う。恒星間航路管制に何をたのもうと言うのだろう。

「次にワープアウトしてくる船に救助を要請するんだ。恒星間宇宙船なら、あつという間に事故船を捕捉できるだろうし、医療設備も整っているからな」

なるほど、そうか。我々は今しがたワープアウトゾーンを出たばかり。それには絶好の場所にいるわけだ。

「了解、インターステラ管制に救援依頼を要請します」

「たのむ。あとは、いいタイミングで船が来てくれることを祈るだけだが……」

重苦しい時間が流れる。

「管制から連絡。間もなくワープアウトしてくる貨物船が救援要請を受けてくれたそうです。ワープアウト後、直接、こちらのチャンネルに連絡を入れるとのことですよ」

「よし、わかった。通信チャンネルの音声を共有してくれ」

昔なら、スピーカーに出して……というところかもしれないが、クルー全体が情報共有モードにある状態では、インターフェイスを経由して音声を共有した方が早い。実際、聞いている方には、外から聞こえているように感じるのだが、音声は非常にクリアで、耳から入ってくる物音とは完全に分離されるから聞き落としがほとんどないわけだ。そして、その直後だった。

「おい、アカデミーのひよっこども、聞いてるか。こちらは救援隊だ。座標を送ってくれ」

「これは……どこかで聞いた声だが……」

「え、この声って？」

美月も気づいたらしい。すかさずフランクが応答する。

「こちら、訓練艇T205、救援感謝する。事故船の座標を転送する、至急対応を願う」  
「座標、送信します」

サムが座標を送信するとすぐさま応答があった。

「よし、受信した。こっちはまかせろ。クルーの状況はどうだ？」

「あまりよくない。意識がない上に環境維持系が故障しているようだ。非常用テレメトリーを受信できるか？」

「了解だ。今うちのドクターが見ている。心配するな、ものの1、2分で回収できる」

「よろしくたのむ。ところで、どこかで聞いたような声だが、貴船は？」

フランクもか……もしかしてこいつは……

「なんだ、今こっちもそう思っていた所だ。こちらは、貨物船ヘラクレス3、俺はナビゲーターのデイビッド・ムラカミだ、そっちは？」

や、やっぱり……。俺と美月は思わず顔を見合わせた。

「なんだ、デイブ、デイブなのか。俺だ、フランクだよ」

「フランク？ フランク・リービスなのか。どうりで聞いたことがある声だと思ったが、こりや奇遇というか、お前もあいかわらずトラブル続きみたいだな」

「ああ、お互い様だがな。こっちはいいから、早く救援をたのむ」

「大丈夫だ、既に牽引ビームで捕捉した。現在収容作業中だ。あとどれくらいでここまで来れる？」

「流石にボロ船と言えども、恒星間貨物船だな。こっちは15分くらいかかりそうだ」

「おい、こっちは船長も聞いてるんだ。余計なことは言うな馬鹿野郎。ボロでも、亀よりはマシだぜ。おっと、今のは失言だ。これは立派な由緒ある船だからな」

なんとという偶然だろう。忘れもしない名前である。1年ちよつと前、入学式前日に俺と美月が、静止軌道ステーション行きの特S5型シャトルで遭難した時、救助に来てくれた船、それがヘラクレス3だ。デイブことデイビッド・ムラカミはその船のナビゲーターで副長。フランクや美月の両親とはアカデミーの同期なのである。もはや、これは偶然というより、因縁に近いかもしれない。

「一年ぶりですね、先生」

「そうだな。しかし、中井と星野は、よほどあの船に好かれているようだな」

フランクが苦笑しながら言う。

「もしかして、シャトル事故がらみの話なのかな？」

ケイはまた興味津々。

「そうだよ。あの船が俺たちを助けてくれたんだから」

「へえ、そうなんだ。こりや因縁だねえ」

「ちよつと、嫌な言い方しないでよね！」

と美月が食ってかかるが、ケイはおかまいなしだ。

「フランク先生も今の人は知り合いませんかあ？」

「そうだ。アカデミーの同期だよ。ちなみに・・・、言ってしまったてもいいかな、星野の両親も同じだが」

「うわあ、ますます因縁っぽい。親の代からかあ」

ケイは完全に面白がっている。一方美月と言えば、今にも嘔みつきそうな怖い顔をしているのだが・・・一難去って喧嘩はご免だ。

「でもまあ、お世話になった船だしな。こうしてまた会えたのも何かの縁には違いないよ」

と、軽くフォローしておくことにする。でも、確かにそうだ。宇宙も狭いというのは、実感するところなのだ。美月の両親、フランク先生にデイブ、そして俺たち。何か、どこかで繋がっているような気がするのも不思議じゃない。

「ほら、雑談はそこまでだ。まだ、とんでもない速度ですっ飛んでることを忘れるな！」

フランクが注意して、その場の話はおしまいとなる。やがて、長距離センサーのレンジにヘラクレス3が入ってきた。既に事故船は収容されて、乗員の担当が行われているようである。そして、俺たちの視界にも、あの巨大な船が見えてきた。

「ヘラクレス3、こちらT205、着艦許可を！」

フランクが呼びかける。

「歓迎するぜ。システムをニュートラルにして、こっちに制御を渡してくれ。収容する」

「了解した。久々に会えるな」

「ああ。1年ぶりだな」

「よし、着艦体勢をとろう」

フランクがこちらを向いて言う。

「システムをニュートラルに。ヘラクレス3に制御を渡します」

「システム接続、リンク完了」

パネルの表示がブルーに変わり、船はゆっくりとヘラクレス3に吸い寄せられていく。

「うわぁ、おつきいねえ、この船」

ケイが貨物船を見上げて言う。ヘラクレス3は既に頭上の視界のほとんどを覆っている。

「インターステラ級の大型貨物船だね。型式は古いけど、パワーはかなりありそうだな」

ジョージもこの船に興味を引かれているようだ。

「この船だったら設備も整ってるでしょうから、負傷者も一安心ですね」

乗員を気にかけているのがメデイカルのマリナらしい。

「外見は古いけど、システムは最新に近い。この船のコンピュータとの通信もスムーズに行っている。この船と一緒に外見と中身は別物」

サムはもう相手側のシステムに探りを入れているようだ。この娘もなかなか油断がならない。

「どうだ、見かけは古いが、そこそこのものだろう？」

いきなりダイブが話しかけてくる。どうやら、サムがあちこち探っているのには気がついていたようだ。

「バ、バレてる？・・・」

サムがつぶやく。

「あははは、まあ、エイブラムスほどじゃないが、ダイブの奴もそっちのほうは結構やり手だったからな。あの船のシステムもだいぶ奴の手が入ってるんじゃないか？」

フランクが笑いながら言う。

「しかし、そつちもなかなか面白そうなものを積んでるじゃないか。試作品か？そのコンピュータは」

ダイブにはこちらの中身もお見通しらしい。カウンターを入られた感じだ。

「そうだよ。もともとは、SF2A用のものだ。うちの生徒で、お前さんの上手を行きそうなのが一人いてな。そいつが徹夜でソフトウェアを移植したのさ」

とフランク。ジョージはちよつと照れくさそうにしている。

「なるほど。アカデミーはまだ健在ってわけだな。例の二人といい、なかなか面白そうな奴らがいるじゃないか」

「そうそう。その二人だがな、実は今ここにいるんだが・・・」

フランクは俺たちの方を見ながらそう言う。

「なんだって？ またお前らなのか。よくよくトラブルが好きな奴らだな」

いや、別に好いている訳じゃないんですが・・・

「あ、お久しぶりです。中井です。その節はお世話になりました」

フランクに促されて俺が応答する。

「いやいや、お世話しましたっけ？ 今回もだがな。そういえば、あのお嬢ちゃんとは仲良くやってるのか？」

えっと・・・、そりやどういう意味ですか？ 誤解を受けるような発言はやめてほしいんですが・・・

「なるほどなるほど、入学前から公知の仲でしたか。いやいや妬けますなあ」

ほら、すぐに食いつく奴がいるし、で、たぶん・・・

「あんたね、それどういう意味よ。あたしは、ケンジなんか、なんとも思っていないんだからね」

・・・という反応になるわけで・・・最終的には俺にオハチが回ってくることになっている。

「相変わらず、そんな感じで痴話喧嘩してるみたいだな。全部こっちに筒抜けだが・・・」

ダイブが笑いながら言う。だから・・・

「ち、痴話喧嘩なんかじゃないわよ。そっちがおかしな事を言うからじゃない！ け、ケンジは私の下僕なんだから、私と仲良くするのは当然なんだから」

おいおい、言うに困って何を言い出すんだ、美月！

「そうか、まだ続いてるんだな。やっぱりこりや一生物だな。がんばれよ、中井ケンジ」

たのむから、それだけは止めて欲しい……。一生こいつの下僕なんて、俺の人生は終わってしまおう。

「ねえ、ケンジ。一生、美月の下僕はいいとしてさ、ついでに私のもやってくれないかなあ」

よくない！ たのむから、そこを既成事実化しないでくれ。しかも下僕の掛け持ちなんざご免だつての！

「ほらほら、そこまでだ！ そろそろ着艦だぞ。準備にかかれ！」

と、フランクの一言で、とりあえず大騒ぎは回避されたのだが、こういう火種はこのチームにつきまといているわけで……。とはいえ、フルオートに着艦シーケンスだから、異常が無いか見ている以外、何もすることは無い。

「ヘラクレス3とのデータリンク、異常なし」

「着艦シーケンス、第2フェーズに移行。自動制御異常なし。間もなく格納庫ゲートを通過します」

シャトルの時は、向こうの牽引ビームのお世話になったのだが、今回は自力での着艦である。まあ、何もしなくていいことには変わりはないのだけど。そうやって、俺たちの宇宙艇はヘラクレス3の格納庫に着艦した。





なんとなく、1年前のデジャブのような光景。だだっ広い格納庫、と言うより貨物庫だが、先に収容されたST1Bが一機。すでに医療チームによって乗員の手当が始まっている。エアシールドが周囲を覆って空気が満たされると、俺たちは船を駐機モードに切り替え、ハッチを開けて外に出た。

「久しぶりだな。元気そうだなによりだが、どうやら毎回、こういう遭い方になってしまiumみたいだな」

デイクが外で待っていた。

「いや、おかげで助かったよ。まさかお前が来るとはな」

「いや、俺も驚いたぞ。1年ぶりに太陽系に戻って、最初に会うのがお前らだとは思っても見なかったぞ」

フランクとデイクがそう言いながら握手をする。

「ほお、ちよつと面構えがよくなったな。フランクに少しは鍛えられたか」

デイクが俺の方に向けて言う。

「そうですか？ありがとうございます」

「でもまあ、それくらいじゃないと、美空の娘の相方はできんだろうがな」

「いや、それは・・・」

「ちよつと、ケンジ！なんか文句でも・・・？」

「あ、ありませんってば、美月さん」

「あっはっは、相変わらずだな。まあ、仲が良くてなによりだ」

「いったい、俺とこいつのどこが仲良く見えるんだろうか・・・。まあ、腐れ縁であることは否定しないのだが。」

「事故機のクルーの様子はどうですか？」

マリナが質問する。やはり、彼女にとっては、それが一番の気がかりなんだろう。

「ああ、大丈夫だ。うちのドクター、見かけは藪医者っぽいけど、あれでなかなかの名医だ。後遺症も残らないだろうと言ってたよ。もう少し遅れたらまずかったみたいだが」

「そうですか。よかった」

「そういう意味ではインターステラから応援を頼んだのは正解だったな。それに、ワープアウトゾーンの外に出てくれていたのは、俺たちにとっても助かった。もし、中に残ってたら、この船でもうかつには動けなかっただろうから」

「インターステラへの要請はフランク先生の指示でした」

「なるほどな。お前は昔からそういう判断が速かったよな。言い方を変えれば、あきらめが早いとも言えるが・・・」

デイクがフランクの肩を叩いて笑いながら言う。

「適切な判断と言って欲しいもんだな。だが、ワープアウトゾーンから、あの船を出せたのは中井の機転があったからだ。あそこで見失うのを覚悟でフル加速しなかったら、両方とも他の船に潰されてたかもしれないからな」

「なるほど。まあ、追い詰められた時には、案外、無茶してみるのがいいって話もある。そう言えば、一年前も、こいつらはずいぶん無茶苦茶をやったわけだし。だが、よく見失わずに位置をトレースできたもんだな」

「それは、このエイブラムスのおかげだ。近傍小惑星監視用の衛星ネットワークを使って追尾するなんて技は俺も考えつかなかったよ」

「エイブラムスって、もしかして例の奴か？センターコンピュータに侵入したとかいう」

「あ、先生、そんなこと言いふらしてたんですか？」

ジョージが頭をかきながら言う。

「なるほど、こいつがなあ。しかし、あれに侵入できる奴が学生にいたとは信じられんが・・・。でも、この練習機のソフトウェアの仕上がり具合を見たら納得もいくな。あれを一晚で仕上げたってのか。たいしたもんだ。それに、ちゃっかりこっちのシステムものぞき見してたようだしな」

「あ、それは僕じゃなくて、こっちのサムですが・・・」

「なんだ、お前じゃないのか？俺が作った防壁を、さらっと3枚も破った奴だぞ？それだけでもハッカーとしての腕前は超一級だが」

サム、知らない間にそんなことまでやってたのか……

「でも、あそこまでが限界。次の防壁はトラップ……」

「おいおい、そこまで見抜いてたつてののか？こりゃ驚いたな。フランク、いったいお前はなんて連中を集めたんだ」

「集めたと言うより集まったと言う方が正解だな。いわば、類が友を呼んだ部類だろうな」

類友はひどくないっすか？先生。少なくとも、俺はいたってまともな学生のつもりなんですが……

「こいつら、例のゲーセンのシミュレーションもクリアしやがってな」

「例のつて、あのSF2Aの奴か？クリアって、まさか、最後のおまけは無理だろう？」

「いや、あれもクリアしちまいやがった。ちよつと反則技だったがな」

「反則も何も、小型宇宙艇で巡航艦をやっつけたつてののか？どうやったらそんなことが出来るんだ」

「こいつが、システムを書き換えて、とんでもない飛び道具を仕込んだのさ」

「飛び道具？反物質弾頭でもきついでらう……まさか？」

「そうだよ。それもEMP付きだ。先にEMPで防御を封じてからドカーンさ。センターコンピュータはこの戦術の有効性を評価して、ライブラリに追加したよ。まあ、実際に使われることはないだろうがな」

「そんなシチュは、御免被りたいもんだな。しかし、お前も大変だな……同情するぜ」

「まあ、楽しんでるがな、俺も」

なんか、俺たちのこと忘れて話し込んでないっすか……？でも、たしかにこのチームは普通じゃ無い。一人一人の力もそうだけど、なんか、こう、しっくり来るといふか……

「せんせー、本人たちを前に何話してるんですかあ？こんなチームにした責任は先生にあるんですからねえ！」

「あんたね、こんなチームとは何よ！何か不満でも？」

あ、いかん。また始まった。

「いえいえ、不満なんて……。ま、こんな楽なチーム、他にないしね」

「そうですね、こんな楽しいチームは他にありませんから。私は大好きですよ」

「うんうん、そだよね」

「・・・」

マリナさん、うまく丸め込みましたね。さすがです。

「君らは、ナビとメデイカルか。まあ、二人は暇な方が平和だ。出番になったときは、結構ロクでもないことになってる時だからな。いや、でもまあ、既にそういう事態に巻き込まれるわけだがな」

デイクが笑って言う。

「とりあえず、パイロット二人とエンジニアリングは札付きだからな。周りはフォローが大変かもしれないが、頑張ってくれ。そういう意味ではフランクの人選は間違っていないようだがな」

「ふ、札付きですか？」

「そりやそうだろう。TS5型シャトルを無免許でアクロバット飛行させた新生と、セキユリティは完璧と言われていたアカデミーのセンターコンピュータに侵入した一年生、どっちもアカデミー始まって以来の騒ぎだからなあ。同窓会でもその話で持ちきりだったよ」

フランクも楽しそうに言うのだが、たぶん、色んな噂に尾ひれだの、背びれだのがつきまわって、大変なことになってるに違いない。なんとなく憂鬱だ。俺は平凡な人生を送りたいだけなのに・・・

「さて、ここで話し込んでいても仕方が無いな。とりあえずブリッジに上がろう。船長に会ってから、ゆっくりするといい」

「船長も久しぶりだな。最後にあったのは、俺がベテルギウスに行く前だから、もう何年になるかな。かつての鬼教官もずいぶん丸くなったなと思ってたんだが」

「まあな。俺たちの歳を考えれば、そういうことだろうよ。お前が教官をやってる時代だからな。世も末だ」

「おいおい、生徒の前で、なんてことを言うんだ。あんまり余計なことは言うなよ」

かつての悪友。そんな感じの二人である。これに美月の両親が加わって、いったいどんな学生生活を送っていたのだろう。そんなことを考えながら、俺たちはデイクと一緒に移動用のカーポートに乗り込んだ。ちよつとした運動場くらいの貨物庫。それが何個も連なっているから、歩

いたら、向こうの端までどれくらいかかるか分からない。相変わらず人気のない船内は、作業用ドロイドだけがせわしく動き回っている。この巨大な貨物船を僅か数十人で動かしているわけだ。

「ありゃあ、ぜんぜん人がいないねえ。幽霊船みたいだよ」

「貨物船はほとんど自動化されてますからね。それに、たくさん人がいると、その健康管理や生命維持だけで大変ですから」

そういえば、去年、俺と美月もよく似た会話をしたな。まあ、こういう穏やかな会話とはほど遠かったが……。

「そうそう去年、ケンジったら、この船に何百人も人がいると思ってたのよね。バカみたい」

「おい、昔の話を持ち出すなよ。普通、素直にそう思うだろ」

「まったく、子供じゃあるまいし。アカデミー附属高に入ろうって人間が言うこと？」

「ほっとけよな」

まったく、同じようなタイミングで思い出しやがって……。

「そっか、去年もこれに乗ってるんだよね、お二人さんは」

「そうよ、まさかまた乗ることになるなんて思っても見なかったけどね」

「まあ、見かけはボロいが、住めば都だ。卒業して就職先がなかったら拾ってやってもいいぞ」

「遠慮させてもらうわ。そもそも、それまで動いてるかどうかだっただけじゃない」

おいおい、美月、ちょっと言い過ぎだ。

「手厳しいな、お嬢さんは」

デイクが苦笑いをして言う。

「俺の苦勞もわかるだろう？」

フランクがぼそっとつぶやく。いや、たしかに大変だろうとは思うけど、生徒の前で言わないでほしいんだが……。

そんな話をしているうちに、カートは貨物エリアの端まで来て止まる。ここからリフトでブリッジまで上がるわけだが……。

「よし、そこから上に上がろう」

ダイブとフランクが先にリフトに入る。リフトと言っても見てくれは単なる光の筒だ。重力制御による昇降シャフトといった方がいいだろう。なので……

「じゃ、俺たちは先に……」

と先に行こうとしたら

「なんか楽しそう。お先っ！」

とケイが先に乗ってしまう。俺は……見てはいかん、と思いつつ、ちょっと上目遣いに……

「このエロケンジ、何みてんのよ！」

とパンチが飛んでくるわけで……。だから先に行こうとしたのに……。だいたい、スカート姿の女子が乗ることなんか、このリフトには想定外なわけで。これもまた、去年のデジャブ。去年は、俺がそれに気づかず、美月を先に行かせようとしてパンチを食らったわけだが……。

「あれ、なんで来ないの？ なかなか見晴らしいよ〜」

ケイが上から叫ぶ。いや、こっちの見晴らしもなかなかいいのだけどな……

「バカね、あんた、丸見えじゃない！」

美月が下から叫ぶ。

「え？……あ〜っ、こら見るな〜！」

ケイが慌てておしりを押さえる。だがもう遅い。白……。だったか……

「危なかったですね。美月さん、気がついてくれて助かりました」

「これは危険。そもそもこの格好はこの船では想定外だから。でも、白は意外……」

「そうよね。意外だわ」

サム、それ言っちゃっていいのかよ？ 美月も納得してるし……。まあ確かに、あのケイが白つてのは、俺も意外ではあるが……

「こら、バカケンジ！ なにニヤニヤしてんのよ。さっさと先に行きなさいよね。上は見るんじゃないわよ！ わかってるわよね！」

いや、見ませんってば、美月さん。

「ジョージ、行こう」

「ああ。確かに、このリフトはこういうことは想定してないよね」

そう言いながら、俺たちは二人でリフトに乗る。アウトバンドで出てくる行き先表示でブリッジを指定すると、体がふわっと浮いて上がっていく。加速をほとんど感じないので、逆にちよつと違和感がある。しかし、上は見られないし下を見れば美月と目が合うので、なんとなく視線のやり場がない感じだ。美月とマリナも続いて上がってくるが、美月は去年同様におしりのあたりを気にしている。そう言えば、去年はリフトを降りた後で、デイクに監視カメラがどうとか、さんざんからかわれたからな。それも気になるんだろう。

「ケンジ、もしかして白いの好き？」

リフトを降りたらいきなり……。だ。

「え、いや、その……」

「あ、やつぱり、みいゝたあゝなあゝ」

ケイ、それは卑怯だ。確かに白いのは……。見たが……

「でもいいよ、ケンジなら。今度、好みの色教えてくれたらあ、サービスしちゃうからねえ」

「おい、俺はそんな趣味ねえって！」

「えー、あ、まさか、まさか、無しがいい……。とか言わないよねえ。それは、ちよつとハ

「ドル高いから」

「……………」

俺が答えに窮していると、後から……

「何の話してんのかしらねえ……」

いつの間にか、美月が後にいるわけで……

「ケンジは白が好き……って話だよ」

「おい、何の話だ！」

「まったく懲りない奴ね。去年も危ないとこだったわ」

「なんだ、見せてないのかあ。残念だったねえ、ケンジ」

「おいっ！」

まったく、こいつらときたら、俺をなんだと思ってる。

「ほお、今年は二人が相手か、なかなか元気がいいじゃないか」

ダイブが横から茶々を入れる。いや、俺だって好きでやってるわけじゃないから。

ブリッジは去年とにも変わっていない。大昔の帆船のブリッジを思わせる、アンティークな飾り付けや、大きな操舵輪。全部、この船の船長の趣味だ。もちろん、そんなものは飾りに過ぎない。実際の操船は全部、インターフェイスを経由して行うのだから。

「へえ、なかなかシブいじゃん。骨董品だね」

「地球の18世紀から19世紀のデザインですね」

「昔はこんな仕掛けで船を操ってたのか。今度、シミュレーション作ってみようかな」

なんとなく意外な感じだが、みんなこのブリッジが気に入ったらしい。

「気に入ってもらえたかな」

気がつくとも船長が立っていた。突然そこに現れたみたいで、ちょっと俺はびっくりしたのだが。



「先生、お久しぶりです」

「おお、フランク・リービスか、何年ぶりかな」

「私がベテルギウスに行く前ですから、かれこれ10年くらいですかね。お元気そうですね。よりです」

「君の論文は読ませてもらったよ。さすがだな。赤色超巨星の崩壊過程のモデルを書き換える画期的なものだ。だが、あれが正しければ、ベテルギウス星系の最後はそう遠くないことになるな。オリオンの左肩が吹き飛ばせば、周囲に大きな影響が出るだろう。なにより大昔から親しまれた星座が変わってしまうことになるのは寂しいが」

「ありがとうございます。心情的にはあの予測が外れて欲しいと思っただけですけれどね。ただ、準備は早急に始めた方がいいだろうと思ってます」

「そうだな。極方向以外でも半径数十光年の範囲には大きな影響が出る。重力崩壊によるワープへの干渉もあるだろうから、しばらく航行もできんだろう。極方向のガンマ線バーストはもっと要注意だ。こいつは数千年にわたって航路図に通過している座標をのせないといけないだろうな」

「そうなりますね。極方向にある有人惑星系は、惑星規模の対応が必要になりますから。幸いにも爆発がわかってから、最も近い星系でも数十年の猶予はありますから、経路上に大規模なガンマ線シールドを構築する余裕はあるでしょう」

超新星爆発は、宇宙で最も壮大な現象のひとつだ。ましてや、ベテルギウスのような巨大恒星の最後に出会える確率はきわめて低い。人類社会にとっては、幸か不幸か・・・ということになるが、科学者としては最大級の幸運に違いないだろう。それに、ワープが一般的になっていく現在、超新星爆発はリアルタイムで把握できる。一方でその影響は光の速度でしか伝わらないから、対応のための時間は十分稼げるのである。地球から見た星座が変わるのも、実際は数百年後だ。

「先生、ベテルギウスも爆発するとブラックホール化するんですか？」

ケイが質問する。

「いや、星自体が大きすぎて、爆発の過程で多くの質量を失うために、ブラックホールになるほどの質量は残らない可能性が高いと考えられている。たぶん、後には中性子星が残っていわゆるパルサーができるんだろうな」

「そっか、でも、どちらも航路図上は接近注意区域には違いないなあ。面倒だ」

「面倒って、あんたね、自分の都合でしか考えてないわけ？」

美月がすかさず突っ込むのだが・・・。

「当然よ！ だつてうちのパイロットは鉄砲玉だから、ナビが気をつけとかないとどこに飛んでくかわからないからね」

「あんたね、それどういう意味よ。そもそも、太陽系内の航路じゃナビの仕事なんてほとんどないじゃない！」

という感じで、また火がつくわけで・・・。

「こら、やめないか。パイロットとナビが喧嘩してどうする」

「なによ、ケンジ。こいつの肩持つわけ？」

「当然、ケンジは私の味方だよね」

いや、俺はどちらの味方でもないのだが・・・。

「ほらほら、そこまでだ。なんだかん言いながら、君らはうまくかみ合ってると思うぞ。今回だつて、二人とも自分の仕事をきちんとこなしたから、うまくいったんじゃないか」

フランクが言う。

「そうですよ。私から見てもコース計算と操縦のコンビネーションは抜群でしたから。それはお互いにわかってるんじゃないでしょうか」

「そうそう。喧嘩するほど仲がいいっていうしね。後はリーダーがしっかりまとめてくれれば・・・だろ、ケンジ」

え、最後は俺かよ。マリナはいいとして、ジョージの一言は余計な気が・・・

「まあ、リーダーが大変だつてのは認めるが、それは仕事だから仕方が無いだろうな」とフランク。いや、そもそも俺をリーダーに据えてしまったのはあんたでしょうが。

「さて、修羅場かハーレムか・・・そこは考えどころだぞ、中井」

とデイクが笑って言う。いやいや、俺はどちらも嫌です。って、違っだろう、話が！

「ともあれ、この船は一旦、L2に立ち寄って、君らともう一機を下ろしてから地球に向かうことになる。この位置からなら、速度制限もほとんどないから、2時間もあればL2に入るだろう。短い時間だが、ゆっくりしていくといい」

「L2にはどれくらいいるんだ？」

「本来ならすぐに地球軌道に向かいたいのだが、事故調がてぐすね引いて待つてるだろうか、一日くらいは足止めだろうな」

「そうか、申し訳ないな。巻き込んでしまっって」

「宇宙じゃ、お互い様だ。気にするな」

昔から船乗りがそうであるように、宇宙船乗りにも、遭難船の救助を最優先するという不文律がある。緊急連絡があれば、近くの船がすぐに駆けつけるとするのが基本だ。とりわけ、救助体制が手薄な恒星間空間では、そうした救助の多くを宇宙船同士の連携に頼らざるをえないのである。

「しかし、2時間くらいと言っても、ちょっと中途半端だな。アプローチ作業の開始は30分前くらいには始めたい。それまでの間なら、少しこの船を案内できると思うが、どうだ？」

「そうだな、デイク。学生諸君もいるから、それがいいだろう」

デイクの提案に、そう船長が付け加えた。

「それはありがたい。こいつらにも、いい勉強になるだろうから。そうだ、デイク。君の自慢のコンピュータシステムをちょっと見せてやってくれないか」

「おっと、そうきたか。なんだかんだ言いながら、お前が見たいんじゃないのか？フランク」

「まあな。正直言うと、話を聞いて、一度見たいとは思っていたんだ」

フランクが笑いながらそう言う。

「いいだろう。まあ、出来のほどはともかく、自分が手間暇かけた代物を人様に見てもらっても悪くないからな。こっちだ、ついてこい」

デイクはそう言うと、ブリッジの奥にある小さなドアに向かった。

二重になったドアを抜けると、その先に少し広い空間があり、中央に、シールドされた円筒形のドームがある。

「この中だ。ちょっと待ってくれ」

ダイブはそう言うと、ドームのドアの前でなにやら操作をした。たぶん、インターフェイス経由でセキュリティシステムにアクセスしていたのだろう。やがて、ドアがすつと開いた。

「よし、入っていいぞ。但し、稼働中のシステムだ。間違っても触ったりするなよ」

俺たちはダイブに続いてドームの中に入る。ドームの中に入ると中央に円柱形のプロセッサラックがあり、その側面にはめ込まれている無数の演算ユニットが薄緑色の光を放っていた。壁面には様々なダッシュボードやアクセスパネルが配置されている。もちろん、これらのパネルはアウトバンドで伝送されてくるもので、物理的に存在するものではない。普段は、必要なものだけが表示されているはずだが、おそらくダイブが見学用に並べてくれたのだろう。

「すごい。これ、アカデミーのセンターコンピュータと同じユニットですよ」

最初に声を上げたのはジョージである。

「そうだ。さすが、アカデミー始まって以来のハッカーは見る目があるな」

ダイブが笑って言う。

「ダイブは、今のバージョンのセンターコンピュータ開発にも、しばらく関わってたからな。でも、まさか自分の船にこれを置いているとは思わなかったよ」

フランクが言う。しかし、これはセンターコンピュータにこそ及ばないものの、宇宙船のメインコンピュータとしては、かなりオーバースペックなものだ。これをいったい何に使っているのだろう。

「仮想的なニューラルネットワーク」

サムがつぶやく。

「一種の人工知能。各部のサブコンピュータを統括、状況に合わせてリプログラミングすると同時に、全体を自律協調させるネットワークを構築、監視している」

「なんだと？ これを見ただけでそこまでわかるのか」

ダイブが驚いた顔をして言う。

「アカデミーでも同じようなシステムを研究している。センターコンピュータを核として、L2都市全体のコンピュータシステムを使った自律系を作り、処理能力や柔軟性、障害耐性などを大幅に向上させる研究。でも、まだ実験段階で完全には機能していない」

「そうか、C&Iは一年の授業でアカデミーの情報系プロジェクトの概要を勉強してるからな」

フランクが言う。でも、アカデミーで実験段階の技術をダイブはもう実用化してしまったというのか？

「まあ、そういう意味ではこれも実験だがな。この年代物の船だ。まともに動かすには結構手間がかかる。新造船なら機械がやってくれることを人がやらなきゃいかんからな。かといって、人を増やすとコストもかかる。だから、処理能力を上げて、なんとか自動化してるってわけさ」

ダイブが言う。

「必要は発明の母だな」

「そういうことだ。それに・・・」

ダイブは、そう言いながら壁にあるパネルをひとつ持ってきて拡大表示した。

「これは、この船の情報処理の系統図だ。見ての通り、普段はこんな感じで、役割ごとにサブコンピュータがグループ化されて、それぞれが自律系を作っている。たとえば、これは船全体のロジを担う部分だが、積み荷管理と作業ドローンの管理、荷物リフトや船倉の環境管理などのサブシステムがネットワークを作っている。入港時の荷積み、荷下ろしの作業から適切な

貨物の配置や航行中のケアなども含め、このグループが全部やってくれるわけだ。もちろん、船内で必要になる物資の管理もやる。食料や水、消耗品から燃料の在庫管理や消費量見積もり、発注、積み込みまでな。それとゴミの管理もだ。そして、このグループは、船の運航管理を担当するグループとも密接な関係を作っている。船の運行は主に貨物の引き取り、届け先と要求された日程から最適なルートやスケジュールを計算するわけだが、航行中に何か問題が生じると、自動的に連携して、必要があれば、航路や寄港地の変更が行われる」

「自律系が階層化されているわけですね」

とジョージ。

「そうだ。末端の自律系は、基本的に自分のグループの動きを最適化するように働く。だが、それだけでは、いわば人間のお役所仕事と同じで融通がきかなくなる。そこで、もう一段上に、相互に関連するグループが調整を行うような上位の自律系が構成されているんだ。この階層は必要に応じていくつでも作ることができるんだが、階層が多くなればなるほど調整は難しくなる。つまり、複数の課題に対して、それぞれを担当する自律系から矛盾する要求が下位のグループに対して出される可能性が高くなる。往々にしてそうした矛盾を解決するためには、別のグループの情報が必要になるから、そこで上位の自律系を組み替える必要が生じる。だが、これが機械には難しい。人間なら、チームリーダー同士が話し合っ、それでもダメなら上司に相談して判断を仰ぐということになるんだが、これを機械にやらせようとすると多くの難題が生じる。基本的には、人間と同じで、問題が生じた場合は上位の自律系が対処するわけだが、こうした自律系はそれ自身に柔軟性が要求される。下位のグループから上がってくる問題が多岐にわたる、すべてを想定できないからだ。つまり、発生した問題を解決するために自分自身を含めた下位のネットワークを組み替える能力が必要になる。つまり、自分自身をリプログラミングできないといけないわけだ」

「でも、もし機械が間違った組み替えをしちゃったらどうなるんですか？」

ケイが口をはさむ。

「そう。そこが問題だ。間違いを発見して直すことはできるが、それでは一種の試行錯誤だ。とりわけ運行管理や船の制御系では致命的な問題を発生させる危険がある。だから、このメインプロセスが、様々な条件で自律系の動きをシミュレーションして、最適解を見つけ出す。同時に、そこに生じるリスクの計算もやる。もし、一定以上リスクを低く出来ないとか、同じ

レベルの選択肢が複数あるような場合、コンピュータは人間に対して判断を求めるようになる。OKを出せば、サブコンピュータをプログラミングして自律系を最適化するわけだ。実際にあった話だが、航行中に機関が故障してパーツの交換が必要になったことがある。ところが、保守用パーツの在庫がなかった。ちょうど、次の寄港地で調達する予定になっていたんだが、そのときにコンピュータが提示してきた選択肢が面白い。貨物の中に、たまたまそのパーツが入っているのを見つけて出して、それをちよろまかせと言うんだ。もちろんリスクがあるので、聞いてきたわけだが」

「で、どうしたんですか？」

と俺は聞いてみる。

「もちろん、ありがたく頂戴した。と言っても、スペアは手配済みだったから、次の寄港地で返しておいたし、荷主にはそのことを報告して了解は得たがな。宇宙のまっただなかで足止めされて、補修船が来るのを指をくわえて待っているよりはマシだ。OKを出したとたんには、ドロイドがパーツを荷物から取り出して機関部を持って行き、あっという間に修理完了ってたわけだ。たぶん、今度同じ事があつたら、こいつは全部自分でやるだろうな。」

「でも、いつもそう都合よくいくわけじゃないわよね」

と美月。

「そうだな。人がやってたら積み荷にそれが入っていることがわかるまでにはすいぶん時間がかかってただろうから、それだけでも十分ありがたいんだが、実はコンピュータはその時にはもう一つの選択肢を提示していたんだ。それは、有り物で代替品を作るという選択肢だ。これには俺も驚いた。必要な部品が船内のどこにあるかや、組み立て手順まで全部示してきたわけだ。これは俺も興味があつたので、後でそのとおりに組み立ててみたら、確かに動いたよ」

「メデイカル系のシステムはどうなってるんですか？」

とマリナ。

「そっちは、うちの藪・・・おっと今のは聞かなかつたことにしといてくれ、ドクターがあまり使いたがらないんで、活躍する機会は限られるんだが、さっきの話同様に、何度か、治療

法についてドクターも渋々受け入れざるを得ない答えを出したことがある。先生、いつも機械が俺の仕事に口を出すなど、こいつと喧嘩ばかりしてるんだが、だんだんこいつも先生の性格を学習したようで、提案のしかたがうまくなってるように見えるところが不思議だ。一方で、こいつは先生の普段の治療方法などをしっかりと学習してるようで、それを前提にしてシナリオを考えているフシがある」

「なんだか、すごく人間的ですね。コンピュータなのに」

「そうなんだ。まあ、そういうふうにプログラミングされているというのを分かっているけど、不思議な感じがするな。一方で、そんなメデイカル情報を他のサブシステムもうまく利用しているんだ。船の当直管理のシステムは、船員の健康状態をメデイカルからもらって、勤務負荷を調整してるし、食堂の栄養管理システムも同じ事をやっている」

「バックアップは？」

とサム。

「いい質問だ。さすがに、このプロセスはここに一台きりだから、これが壊れると、さっきのような高度な学習機能やシミュレーションはできなくなる。だが、このメインプロセスが直接担っているのは、そうした部分だけだから、よほど想定外の事態が起きなければ通常の運行には問題はない。下位の自律系はすべて冗長化されているし、多くの些細な問題は、それぞれの自律系が解決してくれるからな。何か大きな問題が起きた場合は、全部人手で解決が必要になるが、考えてみれば、それがこれまでのやり方だったわけだから、大きな問題じゃない。」

「ところで、これをアカデミーの連中は知ってるのか？」

フランクが聞く。

「ああ、さっき話が出たプロジェクトの連中とは常に連絡を取っている。近々、このシステムのクローンを作って彼らに渡すつもりだ。このボロ・・おっと失言だ。この船で得られる情報は限られるから、L2のようなもつと情報量の多い場所で動かしたら、どんな答えを出さんだろうという興味もある。それに、こいつももつと情報を欲しがっているようだ。どこかに寄港して船のシステムが外部に接続されるたびに、勝手にあちこちから情報を集めてるようだしな。残念ながら、こいつ自身の容量には限界があるので、多くの情報はそのエッセンスだけ



凝縮した形で取り込まれている。だが、少なくとも何か情報を得たい時にどこに接続すればいいかというインデックスはかなりの量を持っているようだから、船の外に出すと。もっと面白い仕事をしてくれるかもしれない」

「興味深い。そういえば防壁を抜けるたびに、前に使った方法が使えなくなるのは不自然に感じてた。システムがこちらの技量を試しているような感じがした」

サムが言う。

「だろうな。あの防壁の基本デザインは俺が作ったものだが、こいつはそれを自分の物にして改良しようとしている。最終防壁のトラップは俺じゃなくてこいつが作り上げたものだ。3枚の防壁を破ったことで、これ以上侵入させるのは危険と判断したようだ。同時に、こいつは、そっちの防壁の弱点も調べていて、最悪の場合、差し違える準備も整えていたよ。驚いたことにな」

コンピュータシステムがそこまで自分で動けるといっなのは驚きだ。というのも、これまで数百年の間、人間を越える人工知能を作ろうという試みは、ことごとく失敗してきたからである。ある意味で、これは人間の本質を機械に与えようとする試みなのだが、肝心の人間の人格や知性に関する根幹部分は、遺伝子工学がここまで進んだ現在でも、まだ未解明のままだから。

「なんだかコンピュータが意思を持つてみたいですね」

「俺も、時々そう思うことがあるよ。だが、こいつが本当に意思を持っているかどうかは、誰にもわからない。だが、少なくとも意思を持つて思考している人間にきわめて近い動きをするという意味では、そう言ってもいいかもしれないな」

「チューリングの考え方ですね」

とジョージ。

「そうだ。自らの本質を知ると言う意味で人類は、もう何百年も前の科学者の域から一步も出られていないわけだ。ただ、その本質は意外と単純なものかもしれない。たとえば、好奇心だ。人は、何かを見聞きした時に、それをもっと深く知ろうとする。そのために、その近傍にある情報を調べて、関連性を見つけ出そうとするわけだが、これの繰り返しで知性を作り上げ

ていくとは考えられないだろうか」

「それと、推論だろうな。欠落している情報について、周辺の情報をもとに仮説を立て、検証するという作業を論理的に進められるのも知性の特徴だ」

フランクが付け加える。

「だから、俺は、こいつの基本プログラムにその特性を組み込んだ。もう一つは、あきらめと忘却だ。こいつの処理能力がどれだけ高くても限界はある。ある事象の周辺を探っていくと言つても、それをどんどん繰り返していくと、あつという間にこいつの能力を使い果たしてしまふ。情報量はステップごとに指数関数的に増えていくからな。だから、最初のステップでは、その問題への興味の大きさ、言い換えればこれは、こいつの仕事である船の管理という意味での重要度の高さという意味になるのだが、それに応じた深さで探索や推論を一旦停止するようになっていく。当面の課題を解決するためには、それで十分だからだ。そして、一旦得た結論を元に、探索過程を抽象化して、余計な情報をそぎ落とす。これが第一の忘却だ。こうして作られた探索ツリーが抽象記憶となり、保存される。類似の事象が発生した場合、もし探索過程が過去の抽象記憶のツリーと重なる部分があると、これが再利用され、探索過程をショートカットする。つまり、過去の経験によって、将来の探索が効率化されるわけだ。こうして何度も再利用される抽象記憶は、強化され、より高速にアクセスが可能になる。一方で、再利用されない記憶は、次第に奥底に沈んでいき、やがては消される。これが第二の忘却だ」

「でも、推論が間違っていたり、実はちょっととした条件の違いで別の結論が導かれる可能性もありますよね。一旦作られた抽象記憶が再検証されることはあるんですか？」

ケイが質問する。

「いい質問だ。だが、考えてみる。人間だって同じ間違いに陥ることがある。とりわけ思い込みの強い人間は、一度出した結論を信じ込むことで間違いを犯しやすい。つまり、この過程自体は人間の特性に近いと言えるわけだ。だが、俺たちの目的は、間違いだらけの人間の複製じゃない。一方、与えられた質問に全く同じ答えしか出さない杓子定規なコンピュータでもない。慎重な人間は、過去の結論を再利用する時に、その間違いに気づくことが多いが、それはなぜだ？ つまり、その結論を推論過程の一部に組み込んで得られた結論が事実と矛盾している時に、推論をトラックバックしていく過程で過去の結論もしくはその結論を使うことが誤りであることに気づくからだろう。このシステムでも同じ事が行われる。人間と違うのは、そ

うした推論やトラックバックの処理が恐ろしく高速で行われるということだ。また、処理能力が余った時には、過去の抽象記憶の整理や再確認が並行して行われる。もちろん、それでも間違いは完全に排除できないのだがな」

「メインコンピュータが僅かでも間違いを犯したらまずいんじゃないの？」

美月が言う。

「それは考え方だ。このシステムは、高度な自律系の最上位に位置する。たとえば、万一誤った判断に基づいた指示を下位に与えたとしても、それが危険なものであれば、下位の自律系はその指示を一度は拒否するだろう。この拒否によって、システムは自分の判断に問題が含まれていることに気がつき、判断を再検証することになる。この過程で多くの誤りは修正できる。一方、自律系のほうが間違っている、もしくはある理由からどうしてもそれを実行しなければいけないような場合、システムは自律系をリプログラミングして、その動作を実行できるようにする。大抵の場合、こうした操作を行う場合、システムは人間に最終判断を求めてくるがな」

「無謬性を前提としたシステムはかえって脆弱」

サムがつぶやく。

「そういうことだ。たとえコンピュータだって、人間が作った物である以上、間違いや故障はある。問題は、それが起きるという前提で、部分的に問題が生じても全体が倒れないようなシステムを作り上げられるかどうか、それが一番重要なんだよ」

「でも、そんなシステムができれば、人間がいなくてもよくなっちゃうよね。まあ、楽が出来るのはいいことだろうけど、なんか退屈しそうだ」

ケイが言う。

「その種の危惧は、コンピュータが最初に作られた頃からあるんだが、俺は人間の側の考え方の問題だと思ってる。実際、俺はこいつと一緒に仕事をしていると楽しい。おそらく、こいつにもし感情があるとしたら、こいつもそう思ってるだろう。それはお互いに得るものが大きいからだ。メデイカルシステムとうちのドクターの話じゃないが、こいつは俺の仕事をずっと横で見ている、その情報をどんどんため込んでいる。俺だけじゃない、この船の全員の仕事を

サポートしながら、それぞれの癖や特徴を取り込んでいくんだ。一方で、一緒に仕事をする時は、必要な情報が瞬時に出てくる。それも、自分が欲しいと思う情報や提案を、要求する前に先回りして出してくる。もちろん、俺がそのすべてを受け入れるわけじゃないが、無視したとしても、こいつは嫌な顔はしない。むしろそれを新しい経験として取り込もうとする。そして、様々な情報をもとにそれを検証する。そして、次に同じ状況が生じたときには、俺の上を行くやり方を提案してくるわけだ。ちよつと悔しいが、俺も新しいやり方を覚えることができる。この船の乗組員は、みんなそうやってこいつと仕事をすることを楽しんでるよ。なんだかんだ言いながらドクターもね」

「普段、システムとのコミュニケーションはどうやってるんですか？」

とマリナが質問する。

「今、君たちが見ているようなアウトバンドを使った表示や音声を中心だが、DIを使えば、サラウンドモードの中でのコミュニケーションもできる。いわばコンピュータとの情報共有モードだ。こいつは、自分の存在をコンパクトな情報パネルにして送ってくる。指示は音声や体の動きその他様々な方法でできるので、その時の状況とか課題に応じてこちらが選ぶことになる」

「その部分では、機械が人間のスピードに合わせざるを得ないんだよね。まどろっこしいけど」

とジョージ。

「そうだな。でも、それを劇的に変えようという研究もあるんだ。抽象思考インターフェイスでも言うべきものだが、システムが持つ抽象記憶やそのイメージを直接人間の脳に送ることができれば、情報を、いわゆる、ひらめきの形で受け取ることが可能になる。言語や動作に直さなくていい分、伝達速度は劇的に上がる」

「そういえば、彼らは人間同士でそれが出来ないか研究してたよな」

とフランク。

「ああ、そうだったな。それが出来ると、同じパターンで、コンピュータとの対話も可能に

なる。たとえば、自分が無意識に欲しいと思った情報が瞬時に頭の中に浮かぶ・・・といった具合だ。まあ、そうなるには、まだいくつもハードルがあるけどな」

「彼らって？」

俺の問いかけにフランクが答える。

「アンリ・ガブリエル、そして星野美空。つまり、星野のご両親だよ。アンリの卒論テーマがそれだった。その後、結婚してから二人で研究を続けると聞いているが」

「知らなかったわ、そんなことまで研究してたなんて・・・」

と美月。なんだか宇宙は狭いなと感じてしまう。俺たちと美月の両親やその同級生であるデイズ、フランク、どこかでみんな繋がっているような気がしてきた。

「でも、それは簡単なことじゃない。そもそも、人間の脳内の抽象思考がどのような電気活動から生まれているのか、その形がすべての人に共通なのかといった基本的な事柄すら十分に分かっていないわけだからな。そういう意味では、今のインターフェイスはすべて、いわゆる五感に関する脳内の機能を利用したもので、人間自身が持っている思考の外部表現を経由したものだ。それが感覚器官や運動器官を経由せずに、その神経系と直接繋がっているに過ぎない。だから、アンリの卒論も、抽象思考から外部表現への脳内インターフェイスを調べるためのアプローチ論の域を出ないものだった」

フランクが言う。

「まあ、今のところ、これで不便もないから、じっくり時間をかけて研究してくればいいんだがな」

デイズは笑いながらそう言うと、壁から別のパネルを引き出した。

「そうだ、お前ら、一度こいつと繋がってみるか？この船のサウンドを見てみるといい」

「いいんですか？」

「ああ、もちろん見るだけだがな。DIを用意しろ。情報共有モードでだ」

俺たちは、それぞれのDIを船のネットワークに接続した。そのとたんに景色が一変する。周囲の壁が消え、いきなり星空の中に浮かんだ感じだ。そこに、様々な船の運航パラメータや航路などが投影されている。俺たちの宇宙艇のサラウンドに比べると格段に情報量が多い。

「すごい。航路マップが外宇宙仕様だ。惑星軌道面の外なのに航路図の精度がすごいよ」

「センサーのレンジも段違い。ここから地球近傍の様子まで見える」

「ワープで飛んでる船の航跡もセンサーでわかるんだよね。恒星間宇宙船に乗ってるって実感するよ」

これはちよつと感動ものだ。このサラウンドビューは最新の巡航艦のものと比べてもひけをとらないだろう。

「あれ、なんだろう？」

上を見上げてケイがつぶやく。みんながその方向を見た瞬間に、そこに拡大画像が投影された。

「すごい、彗星だね。まだ太陽から遠いのに、こんなに大きく見えるんだ」

「意識がそこに向いただけで、拡大されるんですね。これも、コンピュータがやってるんですか？」

「そうだ。気が利いてるだろう？・・・ん？」

一瞬、デイクが考え込むそぶりを見せる。

「どうした？」

それに気がついたフランクが声をかける。

「いや、考えてみれば、この船のセンサーじゃ、こんな距離にいる彗星まで見つけれられないんじゃないかと思ってる・・・」

「そうなのか？それじゃどうして・・・」

デイクは傍らのパネルで、しばらく何かを調べていた。

「フランク、これを見てくれ」

「なんだ、……え、これは？」

「これ、もしかして、お前がさっき言った奴か、太陽極軌道観測衛星。どうしてこれがうちの船からオンラインになってるんだ？」

会話を聞きながら、俺は美月と顔を見合わせた。この彗星の映像は、俺たちが遭難した宇宙艇を探すために使った観測衛星から送られている、ということとは、美月のインターフェイスを経由した通信が勝手に確立されているということなのだろうか。

「そういえば、観測衛星をオフラインにするのを忘れてたな。このコンピュータがそれに気がついて利用したってことかな」

ジョージが言う。

「こら、勝手に使うな」

美月がそう言った瞬間に、彗星の映像が消えた。

「消えた。美月が言ったことをコンピュータが理解したのかな？」

「そうらしいな」

「たしかに、衛星をオフラインにしたあと接続が切れる。こいつ、さっそくお嬢ちゃんが持つてるおもちゃを見つけて、食いついたってわけだ」

デイクが言う。

「驚いたな。一瞬でそんなことができるなんて」

とフランク。

「いや、もしかしたら、そっちの宇宙艇と通信している間に、こいつはあれこれ情報を仕入れていたのかもしれない。救助要請と同時に、そちらから送られてきた情報も、こいつは全部見ているから、そのあたりから使い方を学習したんだろう」

デイクはそう言うと、上を向いて怒鳴った。

「ちょっとお行儀が悪いぞ。レディーの持ち物で勝手に遊ぶんじゃない」

・・・ゴメンナサイ・・・

「え？」

俺は美月とまた顔を見合わせる。

「今、ゴメンナサイって言ったか？」

「私もそう言われた気がしたわ」

「え、何も聞こえなかったよ」

「僕も何も聞こえなかったな」

「私もです」

「私にも聞こえなかった」

と皆が口を揃える。

「何か聞こえたのか？」

ダイブが聞く。

「聞こえた・・・というより、なんかゴメンナサイと謝られたような気がしたんです」

「私も・・・」

「二人だけってのが不思議だな。一人なら気のせいってこともあるだろうが、二人一緒とは・・・」

とフランク。ダイブは脇のパネルをまた眺めている。

「驚いたな、コンピュータが詫びを入れてきてる。その上で、船の航行に役立つので出来れば使わせて欲しいというお願いだ。この情報があれば、速度を今の倍まで上げられると言ってる」



デイクはそう言うと、何かをパネルに入力した。

「とりあえず、ずっと使える物ではないから保留させた。だが、面白そうだから、L2に寄ったときに科学局にかけ合っただけ合っただけ使えるようにしてもらおう」

「だったら俺からも口添えするよ」

「そりゃありがたい」

しかし、なんだったんだらう。あの感覚は……。たしかにゴメンナサイと言われたような気がしたのだが。

「さて、そろそろL2寄港準備に入らないといけない。今回はこれでおしまいだ」

デイクがそう言うと、サラウンドが切れて、俺たちは、またコンピュータールームに戻っていた。部屋を出がけに振り向くと、プロセッサラックの光が一瞬またいた。

・・・サヨナラ、マタネ・・・

そう言われたような気がした。

それから俺たちは、ヘラクレス3のブリッジへ戻り、L2へのアプローチと入港作業を見学することになった。俺と美月にとっては、去年の第6静止軌道ステーション入港に続いて2回目である。そして、入港後に事故調のヒアリングと、メディアのインタビュー、なんだか去年のデジャヴを見ているような気がしたのは、美月もたぶん同じだろう。去年の事件もあって、メディアは俺たち二人に質問を集中させたが、そこはフランクが教師としてうまくカバーしてくれた。

今回は、それに加えてアカデミーでも調査委員会が作られていて、そっちのヒアリングも受けることになったわけだが、救助に回った我々に対する質問は、主に搜索活動の手順に関する部分に集中した。特に、近傍小天体監視ネットワークを搜索に活用した点は、大きく評価され、今後の救助活動でこれらを活用できるように、科学局がその枠組みを検討することになったようである。それ以外にも、隕石群への対応や、その後のリカバリーについて、多くの部分がこれまで未経験の状況下で行われていたため、有効な対処法として、今後、非常時対処のマニュアルに記載されることになるらしい。ジョージが手を加えた新型コンピュータについては、それによる1Bシリーズの能力の大幅改善が、図らずも実証できたため、更新計画を前倒しして実施する検討に入るとのことで、ジョージもオプザーバーとして検討委員会に招請されることに決まった。

さすがに、これだけ立て続けに緊張を強いられて、俺たちは全員疲れ切っていたのだが、最後に待っていたのは、アカデミーでのお祭り騒ぎだった。自らの危険をかえりみず、僚船の救助にあたったヒーロー、ヒロインのご帰還に学生も教師たちも沸いていた。俺たちにしてみれば、ごく当然のことを、四苦八苦しながらどうにかやり遂げることができたわけだが、世間はその過程よりも結果を大きくとりあげる。すでに俺たちはアカデミー栄誉賞の候補に挙げられていたのだが、その前に盛大な生徒会表彰式が催された。かくして、普通の学生でありたい俺は、美月や仲間共々、またしても派手に世間に名前と顔を知られるハメになってしまったのである。

そして、慌ただしく数日が過ぎ、最初の週末の夕方。ようやく一息ついたところで、俺たちは、ゾーン中央街区にある広場に集まった。ここはアカデミーの校舎からも近い、このゾーンの商業地区なのだが、19世紀頃のヨーロッパ風町並みが再現されていて、様々なショップや

レストランが建ち並ぶ、女子には人気のスポットである。これからチームの食事会。そもそものきっかけは、ジョージが美月に食事をおごる、という話だったのだが、マリナの提案で、チームの食事会になったというわけだ。そういう成り行きで、今日の美月はゲスト待遇。甘やかす癖になるので俺はあまり気が進まないのだが、このところ、彼女が持っている様々なインターフェイスが大活躍しているのも事実だから、たまにはいいかもしれないと一応、自分を納得させている。

「皆さん、集まりましたね。まだ少し時間がありますけど、そろそろお店に向かいましょうか」

とマリナ。今日の店はマリナのお薦め。こちらはちょっと楽しみだ。

「おっけー、行こう行こう。でも、ジョージが時間より早く来るなんて珍しいよね。雨とか降らなきゃいいけど」

ケイがジョージの肩をたたいて言う。ここは宇宙都市、もちろん雨なんか降らない。地球の気象をすべてシミュレーションすることにより意味は無い。空気の湿度管理や循環は保たれているし、ある程度の風もある。雨が降るのは、とうか空から水が降ってくるのは大規模な火災が発生した時くらいだろう。もちろん、そんな事態は、このL2が建設されて以来、一度も起きていない。

「バカじゃないの。雨なんて降るわけじゃない。ここは宇宙都市よ」

「まあ、それは物の例えだろ。そこは突っ込まないほうが・・・」

例によって、美月がからむわけで、放置するとまた騒ぎになるから、俺はちょっとフォローを入れる。

「この町並みだと、雨も似合いそうですね。地球がちよつと懐かしいです」

マリナが言う。

「風情があつていいかもしれないな。俺も雨の多い所で育ったからわかるよ」

「ふん、私は雨なんか大嫌い。だいたい、じめじめして髪もまとまらなくなるし、ロクなことないじゃない。雨のないところに来て助かってるわ」

うーん、今日の美月はちょっと機嫌斜めのような。あまのじゃくは、いつもの事だが、マリナに絡むのは珍しい。今日はちょっと俺が気をつけておかないとダメかもしれないな。

「いっそ、街全体に仮想現実を重ねて、自分が好きな景色にできるってのがいいかもしれないね」

「技術的には可能。同じ景色を適宜共有できるといい」

ジョージとサムはどうしても、技術的な方向に話がいく傾向がある。

「でもさ、もし違う景色を見ながら並んで歩いてたら、会話が成り立たないよね。共有するにしても、どっちにするかで喧嘩になったり」

ケイの言うとおりで。一人で歩いているのだったらいのだけど、下手をするとテレビのチャンネル争いみたいになってしまうかもしれない。そもそも、この街に店を出している人たちも自己主張ができなくなってしまう。社会的な意味では様々な問題が出るだろうな。

「そうですね。もしそうだったら、私たちは美月さんが雨を嫌いだということも、知らなかったかもしれませんし。コミュニケーションがおかしくなっちゃうかもしれません」

「仮想現実とは、むしろ街を作っている人たちが考えるといいんじゃないかな。そうすれば、時々、模様替えもできるだろ。商店街もたまにはコンセプトを変えたいこともあるだろうし」

そんな会話をしながら、俺たちは一軒のレストランの前までやってきた。小洒落た、というか、見るからに高級なお店という感じでもなく、カジュアルな感じを出しつつ、随所にちょっとしたこだわりが見える店・・・俺が言うのもなんだが、そんな雰囲気のお店だ。ストリートに言うならば、マリナらしいチョイスだろう。

「お、いい雰囲気じゃん、マリナ。こんな店どうやって見つけたのさ。もしかして、デートとかあ？」

とケイがちやかす。

「いえいえ、去年、生徒会の人たちと、ここでお食事会やったんですよ。代々の生徒会御用

達のお店らしいのですが、料理が美味しくて、お値段も手頃なのでいいかなと思ったんですが、気に入ってもらえると嬉しいですけど」

「へえ、附属校生徒会御用達の店かあ、なんとなく楽しみだね」

「おっと、ジョージ君、イタズラはなしだからね！」

「あはは、分かっているって・・・」

いや、こいつはまた何か企んでたに違いない。でも、さすがにケイも心得ているようで、先手を打ってクギをさしたってところだろう。サムは興味深そうに店のあちこちを眺めている。美月はといえば、あいかわらず無愛想な表情で黙り込んでいる。これはちよつと不気味だ。

「お料理は一応コースでお願いしてますけど、今日の主賓は美月さんだから、お肉系にしました。いいですよね」

「問題なし！」

「それでいいと思うよ」

「同意」

「俺もそれでいいと思う。いいだろ、美月」

「・・・肉は嫌いじゃないわ。でも私はちよつとばかりうるさいわよ」

「いや、うるさいのは分かっている。いつものことだからな」

うっかり口が滑ったのだが、結果、やはり美月に思い切り睨まれた。でも、ちよつといつもと反応が違う。いつもなら先に口が出るはずだが・・・。

「いいじゃん、とりあえず味わってのお楽しみ・・・ってことで」

とケイ。

「それじゃ、皆さん、入りましょう」

店の中は、外見から想像したとおりの感じだった。それほど広くない店だが、テーブルや様々な調度類は、かなり余裕を持って配置してある。内装はちよつとアンティークな感じで、店員も生身の人間だ。これなら、ジョージの出る幕もなさそうである。

俺たちは、窓際の大きなテーブルに案内された。とりあえず飲み物だけ各自注文して、あとはお任せのコース料理である。とりあえず、料理は出てくるに任せて、このところの顛末の話で盛り上がることになる。

「でさあ、結局、あの生徒会表彰式ってなんだったわけ？かなり唐突・・・てか、今までに生徒会表彰なんつてあったっけ？」

ケイが前菜のサラダのトマトをフォークに突き刺したまま言う。

「ああ、あれですねえ・・・」

マリナがちよっと困った顔で、全員を見回して言う。

「私は大袈裟なのはやめてくださいって言ったんですけど、先輩たちがどうしてもってきかなくて。バラしちゃうとしかられるかもしれないですけど、これは生徒会が存在感を示す二度と無いチャンスだ。君も生徒会なら協力したまえ！って・・・すみません」

「世の中なんてそんなものよ。あんたが謝ることはないわ。利用できる物はなんでも利用する。去年もそうだったけど、騒いでる奴らのほとんどは、私たちを利用したいだけなのよ。結局、ほとぼりがさめればみんな忘れてしまうんだから」

ほお、珍しく美月がまともなことを言うじゃないか。

「そういう意味じゃ、アカデミーだってそうかもしれないね。今回の事故そのものは、アカデミーにとっては大きなマイナス点だし、そっちがクローズアップされる前に、ヒーロー、ヒロインを作り上げて、派手に宣伝しとけば、煙幕を張れるよね」

とジョージ。しかし、だんだん話が自虐的になってきているような気がする。

「でも、周囲がどう扱おうと、今回、俺たちは、いろんな事をうまくやれたんじゃないかな。俺たちのチームとしては、少なくともそこは誇っていい話だと思うぜ」

「そうですね。このチームだったから出来たことの方が多いですから」

「それは同感」

「ふん、ケンジのくせに、まともな事言うじゃないの」

「なんだよ、そのケンジのくせに・・・って」

よかった、どうにか美月もいつもの美月に戻ってきた。何か変だと思ったのは俺の思い過ぎだったんだろう。

「そういえば・・・」

と、ジョージ。

「あのコンピュータ、近いうちにクローンを作ってL2で動かすって言ってたよね。どこに置くんだろうな」

「たぶん、アカデミーの情報研究センター。あそこが自律ネットワークの研究拠点」

サムが言う。

「あんた、また何か企てるんじゃないでしょうね。気をつけないと今度は謹慎じゃすまないわよ」

今度は美月が突っ込む。この種の話題で、チーム全員が考えることは同じらしい。

「あのね、僕がどこでも勝手に侵入するって思い込みはやめて欲しいなあ。僕も表玄関から入ることだってあるんだから。それに、今回の1Bシリーズのコンピュータ更新プロジェクトも情報研究センターが主体になってるから、うまくいけば、そっちの情報も得られそうだし」

「共通の研究テーマも多そうだしね。メンバーも重なってるんじゃないの？」

とケイ。

「うん、僕もそれを期待してる。できれば、そっちのプロジェクトにも入れるといいんだけど」

たしかに、あのコンピュータは興味深い。あれが、様々な船で使えるようになると、いろんなところで大きな変化が起こりそうだ。でも・・・、俺はちよつと美月のほうを見る。彼女も何か考え込んでいる様子だ。たぶん、気になっていることは同じだろう。あの感覚はいつたい何だったんだろう。表現しようとすると言葉に頼るしかないのだが、あれはむしろ感覚とか、

感情に近いものだったな。もし、あのコンピュータが俺と美月の二人にだけ、何かを伝えようとしていたのだとしたら、それはいったい何だったんだろう。そして、なぜ俺たち二人なんだ。

そんな事を考えている間に、メインディスプレイが運ばれてきた。これまた、うまそうなステークである。

「おお、肉だねえ。美味しそう。いただきまーす」

と、ケイがさつそく手を着ける。

「これ、いける。みんな食べてみなよ。美味しいよ」

ケイは肉を口に入れたまま、そう言うと、また肉をほおばった。

「まったく、育ちが分かるのよね、こんな肉くらいで大騒ぎして」

美月はそう言うと、肉を一切れ小さく切り分けて口に運び、そのあと少し固まった。それからちよつと顔を赤らめるところ言った。

「ふ、ふん。まあまあね。ち・地球で食べたのに比べると、あ・アレだけど・・・」

その、まあまあ、つてのがどれくらいの物かは、その後の美月の食べっぷりを見れば明らか  
なわけで、まあ、そこは全員心得ていて、誰も突っ込まない。

「な、なによ。おながが空いてるだけ、それだけなんだからね」

はいはい、言わなくても分かってますよ。美味しいんだよね。とりあえず、会話はそれくらいにして、俺もこの料理を楽しむことにしよう。

「これ、自動調理じゃないよね。でも、焼き加減がすごくいいな」

「すごくジュシー」

ジョージとサムも気に入ったみたいだ。



「よかった。気に入ってもらえたみたいで。私もはじめてこのお店に来たときはちょっと驚きました」

マリナもそう言うと、上品な感じで食べ始める。歴代生徒会に伝わる隠れ家、そんな感じがするこの店は、実際、地球でもなかなか見つけることができな美味い店だろう。

「あー、食べた食べた……。おなかいっぱいだあ」

ケイの皿はもうすっかり空になっている。

「おいおい、もうちょっと味わって食べたらどうだ？」

「いやいや、こんな美味しい料理は一気に食べるに限るよ。満足だあ」

前菜、メインディッシュだけじゃなくて、デザートも小洒落ている。自家製のアイスクリームなのだが、濃厚な割に甘さが抑えられていて、香ばしいカラメルソースとうまく調和している。

「ここのお店、デザートも美味しいんですね。自家製ケーキは持ち帰りもできるんですよ」  
「そうなんだ。買って帰ろうかな」

とジョージ。

「だめだよ。ジョージはスイッチ入ると際限なく食べちゃうから。カロリーオーバーはデブの元だよ」

ケイが、手に持ったスプーンでジョージを指して言う。

「ひどいな。頭を使うから糖分が必要なんだよ」

「それは同意。でも、過剰摂取の誘惑には逆らいがたい」

たしかに、体の中で糖分と酸素を一番必要とするのが脳だというから、間違いはないかもしれないが、俺から見てもジョージはちよつと食べ過ぎだ。

「甘い物は、ゆっくり食べるといいですよ。血糖値が上がると自然と食欲が抑えられますか

ら」

とマリナ。チームの健康管理は彼女の関心事でもあるわけだが、ジョージにはもう少し厳しい言い方をした方がいいかもしれない。

さておき、そんな感じで我々の食事は終了。店を出るとあたりは既に暗くなっていた。明日からはまた退屈な授業や実習が待っている。

「じゃ、また明日ね」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

俺たちは、店の前で解散して、それぞれ寮ごとに車を拾って帰途につく。南学生寮の俺と美月は一緒の車だ。

「アカデミー南学生寮まで」

そう告げると、いつものように機械的な返事を返した車は、静かに走り出し、やがて高架道路に上がる。周囲には都市の夜景、そして空には星があふれている。

「あれ、何だったんだろうね」

美月が唐突に口を開いた。

「ヘラクレス3のコンピュータ・・・か？」

「そう。不思議な感覚だった。心の中に言葉が浮かんだみたいなの」

「俺も同じ感覚だったよ。明らかに聴覚インターフェイス経由じゃない声というか感覚というか」

「他のみんなは感じてないのよね。それも不思議だわ。あれからずっと気になってるのよ。なんとなく頭を離れなくて」

「俺も同じだ。でも、頭で考えても結論は出なさそうだ。もう一度、繋がってみれば何か分かるかもしれないけど、それまではあまり深く考えない方がいいんじゃないかな」

「そうね。もしかしたら偶然かもしれないし。あんたと一緒にするのが、偶然にしても気に入らないけど」

「おい、そりやどういう意味だ？」

「そういう意味よ！」

「あのな！」

結局、最後にはこういう会話になってしまふのが俺と美月である。そんな会話の間に車は学生寮のエントランス前に滑り込んで止まった。俺たちは車を降りる。

「じゃあな。また明日」

「おやすみ、寝坊するんじゃないわよ」

「ああ、お前もな」

俺たちは、そこで別れてそれぞれの寮に向かう。どうにか門限には間に合ったようだ。部屋に帰って一風呂浴びて、それからベッドに横になって寝付くまでの間、俺は新学期が始まってからの出来事を思い返していた。たかだか一ヶ月ほどの間に色々なことが起きた。入学式以降、平穩だった去年が嘘のようだ。もしかしたら、俺と美月は、そういう巡り合わせなのかもしれない。だが、どうして俺と美月なんだ？これは何かの因縁だろうか。いやいや、だとしたら親の代からの因縁にちがいない。俺は何も悪いことはしていないから。

そんなことを考えながら、俺はいつしか眠りについてた。なにやら色んな夢を見た気がするが、朝にはその中身は忘れていた。そして、またいつもの日常が戻ってくることになる。日ごとに難しくなっていく授業。あいかわらず退屈な実習。ある意味平穩な日々は、夏休み前まで続いたのだが……。

話の続きは、また近いうちにするでしょう。